
～ 龍の孫娘 ～

にゃんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～ 龍の孫娘～

【Nコード】

N3910T

【作者名】

にゃんこ

【あらすじ】

あるところに

龍神の血を引いた

龍の孫娘がいた

その少女は、

とても美しかった。

だが、どこか儚かった。

~~~~~

ぬらりひよんの孫の夢小説な感じのものです

今まで、モ。ゲーに投稿していたけど

強制非表示になってしまい、続きが書けなくなったので

こちらで、改めて書き直しました

## プロローグ

夜空の月を見上げている

美しい少女がいました

「私は約束を果たしたよ…。」

ちゃんと組の当主になったよ

これで

やっと、アナタに会いに行ける…。」

その少女は、

人であり、妖怪でもあった

その妖怪というのは、

雷の使う雷龍と

水を使う水龍でした

その少女に、

流れている血は、

雷龍と水龍だけでは  
なかった

もう、1種類

もっと特別な血が流れていた…

そのもう1種類の血は

龍神の血でした…

龍族の中で最も強い龍神

その龍神の血を色濃く継いでいた

その少女は、

父が作りあげた妖怪の組の当主となり、

龍族と組をまとめることが出来るくらい

強くなった…

く  
零

「ねえ…。リクオ、

また遊びに来てもいい？」

リ「なに言ってるの？いいに決まってるよ！翠雨！

いつでも来てよ（ニコニコ）」

翠「うん。でも…、すぐには来れないかも…。」

下を向いて俯いた

リ「どうして？」

翠「これから、組のみんなを支えられるように、

特訓をするって父様が言ってた。それができない

と私は当主にはなれない  
んだって…。」

リ「そつかあ、翠雨なら出  
来るよ！」

ボク翠雨が来るのを待つ  
てるね。

ボクもおじいちゃん

みたく強くなつて翠雨を  
待ってるよ！」

翠「ホント！？

じゃあ次会うときはお互  
い当主と総大将になって  
会おうよ（ニコニコ）」

リ「うん、約束だよ！（翠雨を守れるくらい強くなって翠雨を守る  
んだ）」

翠「約束だからね！忘れないでね！

いつか必ず戻ってくるから」

## オリキャラ紹介

主人公

リュウ スイウ  
龍 翠雨

♀

容姿

人るとき

髪は青みがかった黒。長さは背中の中ほどまである  
瞳の色は金色

妖怪のとき

（覚醒前）

髪色と瞳の色が逆転し、髪が金色、瞳が青  
服装は、真っ白の振り袖姿。帯から何まで白。  
とにかく、白一色。

（覚醒後）

覚醒すると龍の姿になる。たてがみが金色で、目は青。体の鱗は真っ白

かなり美人で

綺麗7割可愛い3割

性格

基本は大人しく敬語。

かなり大人びている。

仲がいい人の前だと敬語がとれてかなり軽い感じになる

## 概要

両親がお互い半妖同士のため、翠雨は祖父母の血が色濃く出ている、そのため、ほぼ純血の妖怪と同じ。

家に居るときは、妖怪の姿をしている

妖怪のときは、水と雷を使い戦う

## 主人公の父

リュウ  
龍 雷牙 ライガ

雷龍と人の間に生まれた半妖

金髪に金色の瞳

彼が龍組を作り上げた  
組が作れるほどの実力者

龍組は奴良組の傘下で  
かなりいい地位にいる

## 主人公の母

リュウ  
龍 翡翠 ヒスイ

水龍と人の間に生まれた半妖

青みがかった黒髪に青の瞳

かなりの美人さん

くきく

あれから4年

「リクオ様あーどこにいらっしやいますかあー！」

雪女ことつらは屋敷の中をこつ叫びながら走っていた…

つ「あつ、やーっと見つけましたわ、リクオ様！」

リ「どうしたの？」

つ「リクオ様にお客様ですよ（ニコニコ）」

リ「えつまさか「違いますよー！さっ早く行って下さい（ニコニコ）」

リ（誰だろう、まあいいか。）

客間に付くと、中から声がした

ぬ「リクオか？早く入りなさい。」

そう言われて静かに襖を開けて中へ

そこにいた人物は、

真っ白の着物で綺麗な金髪がよく映えた。

その人物に目が奪われていたリクオは、

はっと我に帰りぬらりひよんの隣に座った

席に着いたのを確認したのか、金髪美人は話し出した。

翠「お久しぶりです。総大将、リクオ様（ペコ  
覚えていらっしゃるかどうかわかりませんが…。  
龍組二代目当主、  
龍 翠雨でございます。  
幼い頃よく遊びにきていた。」

リ「す、翠雨なの!？」

翠「はい、そうですよ（ニコニコ）」

リ「嘘ーっ、久しぶりだね翠雨。何年ぶりだろうっ…」

翠「約4年ですかね？」

リ「そっかあ、あれから4年たったのか…」。

（あの約束ならまだ達成してないんだけどな）

ぬ「おおーこりやまた、翡翠（母）に似て美人になりおって。

してどうしたのじゃ急に…」

翠「実は、しばらくまたこっちにお世話になることになりました…」。

これが父様からの手紙です。」

さっそく手紙を読み始めたぬらりひょん

ぬ「……………フツ。」

リ翠「「？」」

翠「どうかされましたか？」

父様が何か変な事でも…（アワアワ）」

ぬ「翠雨、この手紙の内容を知っているか？」

翠「？いいえ知りませんが…」

ぬ「何か言われたりは？」

翠「いいえ、特になにも…」

ぬ「そうか…。（ニヤリ）」

突然何か企みのある笑みを浮かべていたが、

何のことか分からない二人であつた…

ぬ「よっし、

翠雨、お前は今日から奴良家の家族だ！

リクオ、翠雨を部屋に案内したら屋敷の中を色々教えてやれ」

リ「分かったよおじいちゃん

じゃあ行こうか翠雨？」

翠「はい（ペコ）」

総大将に一礼し出て行った

部屋で独りになったためらひょんがポツリと独り言を言った

ぬ「まさか、自分の娘を貰ってくれないか？なんてな……。

面白くなってきたやい（ニヤ」

翠雨たちはというと…

廊下でつらら達に会っていた

つ「あつ、リク才様」

首「リク才様、

そちらの方はどなたですか？  
（なんて美しいお方なんだ）」

リ「ほら、覚えてない？ 翠雨だよ。

昔よく遊びに来ていた」

首黒青

「「「えーつ 翠雨様あー！？」」」

首（ああーなんて綺麗になられたんだ）

黒（あの翠雨様かぁ、立派になられた）

青（おー大きくなられたな）

各々こんな事を思っていた…

翠「皆さん、お久しぶりです。  
この度、

龍組二代目当主となりました。

しばらくこちらでお世話になります。

よろしくお願いしますね（ニコニコ）

満開の花のような笑顔で挨拶をした

つらら以外

「っ／／／／」

り（いつ今の反則だろ／／）

四人の頬はみるみる赤くなっていた

首「翠雨様、良かったら今度お茶でもしませんか？」

黒「なっ！」

抜け駆けは許さんぞ！

翠雨様拙僧とも今度お茶を…」

翠「では、今度皆さんでお茶をしましょうか（ニクニク

今はリクオに屋敷を案内してもらうので、

では」

首（よしっ！翠雨様とお茶だ！みんなと一緒にするのが嫌だけでしょうがないか）

その後、つらら達とは別れ屋敷の中を案内された  
屋敷であつ妖怪達と挨拶をしながら回った

挨拶する度に

破壊力抜群の笑顔をしたため

皆頬が赤くなつてたとか  
なつてなかったとか…

次はオマケです

オマケ

夜、夕食後部屋へ戻ろうとしたら、鴉天狗とあつた

鴉「おー。翠雨様、丁度よかった」

翠「どうかしましたか？ 鴉天狗さん」

鴉「息子たちを紹介しようと思ひまして、

何かあれば息子たちに言つて下さい

おい！三羽鴉」

シュン

？「どうした、親父」

どこからか三人が現れた。

それを見て啞然とする翠雨

鴉「あーこれから本家に住むことになった龍 翠雨様だ、  
お前たち自己紹介しとけ」

羽「はっ、三羽鴉長男黒羽丸です。これからよろしくお願いします  
ね翠雨様」

ト「次男のトサカ丸だ、よろしく」

さ「長女のささ美だ。

何かあったらいつでも呼んで下さいね」

翠「はい、此方こそよろしくお願いしますね（ニコ

えーと、黒羽丸さんにトサカ丸さん、ささ美さんですね。ふつつか  
ものですが、

これからよろしくお願いします（ニコニコ）」

黒ト

（っ／／／なんて素敵な人なんだ／／／／）

二人が頬を赤らめたのを見てささ美は  
さ「二人に春が来たみたいだな」

鴉「そうみたいだが、ライバルがかなりいるがな…」

こうして、またここに翠雨に惹かれた人が増えたとき

オマケおわり

く  
式  
く

―学校の教室にて―

「ねえ、聞いた今日転校生が来るんだって」

「へえーそうなんだ、どんな子だろうね」

キンコンカーンコンガラッ

先「おらー、みんな席つけー」。

知ってる奴も居るだろうが、

今日は転校生がきてるぞ」

男1「男、女？」

男2「その子可愛い？」

先「女の子だぞ、しかもかなりの美人さんだ。

さあー入ってこい」

ガラッ

扉を開けて入ってきた子は、

青みがかった背中の中程まである黒髪で、  
瞳の色が金色だった…

その子を見てクラスから歓声があがった

男「「かっかわいいー」」

男1「彼氏いますか？」

男2「好きなタイプは？」

……

女子からも歓声があがっていた

女1「凄く綺麗な人」

女2「あの人ハーフかな？」

リクオはというと…

目を丸く見開いて口をあんぐりと開いていた  
リ（あっあれって翠雨だよね！？

えっなんでいるの！？

あっ 同い年なんだっけ？ てか、普段と違うよね？）

そんな、リクオの反応を楽しんだ翠雨はみんなに自己紹介を始めた。

翠「皆さん、初めまして、

龍 翠雨と言います（ペコ  
始めに言っておきますが、

私の目の色なのですが

祖父母が両方とも外国人のため

色が混ざってこの色になっていますので、

気にしないでください。

あと、今は敬語なんですけど、仲が良くなると敬語がとれてかなりキャラが変わると思いますけど…

そのときは

まあ敬語がとれたら仲がいいということなので…

これからよろしく願いしますね（ぺ）」「

先「おし、自己紹介もおわったな。龍お前の席は…  
奴良の席の隣な〜。  
奴良色々教えてやれよ」

リ「はっはい！」

翠雨はリクオの隣までくると、ニッコリと微笑んだ

翠「よろしくね、奴良君」

リ「よろしくね翠雨。僕のことはリクオでいいよ。」

翠「分かったよ、じゃあリクオね」

リ「ヒソヒソ」学校くるなら、言ってくればいいのに。

それに普段と色逆じゃない？いつもは目が青で髪が金じゃないの？」

翠「ヒソヒソ」いやー、リクオを驚かせたくて（ニコニコ

色についてはね、

家に居るときは妖怪の姿だからだよ、  
意外と妖怪のほうが落ち着くから。

勿論今は人のときだよ」

リ「ヒソヒソ」へえーそうなんだ、知らなかった」

翠「ヒソヒソ」うん、だって初めまして言ったもん（笑）」

リ「えっ……」

先「よっし、授業始めるぞー」

――休み時間――

みんなから質問攻めの翠雨であつた…

女1「ねえ、前はどこに住んでたの？」

翠「えーと九州や近畿の方を転々としていました」

女2「おじいさんたちってどこの国の人なの？」

翠「実は実際には会ったことがないから知らないんです。

（まるっきりの嘘だよVお爺様達はまだまだ元気で日本中を転々としています）」

男1「彼氏っている？もしくは、好きな人は？」

翠「彼氏はいませんが…好きな子といいますが、気になってる子はいますよ。誰かは教えませんが…」

チラッとリクオの方に視線を向けたがすぐに戻した

男2「好きなタイプは？」

翠「すごく仲間思いが強い人ですかね？」

遠目で見ていた（聞いていた）リクオはというと…

リ（翠雨の好きな人って一体どんな人だろう）

気になってしまったリクオであった

あつと言つ間に放課後…

翠雨達の前に、

妖怪オタクが現れた（ポ。モン風（笑））

清「明日、君の家にお邪魔するから  
よろしくね」

そついつて彼は去つていった…

翠「明日、今の妖怪オタクが来るの？」

リ「妖怪オタクって…確かに妖怪オタクだけど…」。

明日、清繼くんは来ると思うよ…

一度言つたら聞かないから…。

ハア、翠雨悪いけど明日色々と手伝ってね」

翠「分かったよ…」

二人でため息をついた

二人は明日が不安で気がきではなかった…

く参る

翌朝、本当に妖怪オタクと  
その仲間たちが現れた（笑）

そして、今は…

陰陽師の娘ゆらから  
なにやら妖怪に関して  
長々と指導されていた…

ゆ「妖怪には、神に近い存在のものもあるな。」

そうだな、例えば…

『龍』やな

龍は神の使いと言われている。  
そのため、神社にも祀られている。

祀られた龍も自分を祀ってくれた人々に感謝して人々を護る。

他の妖怪と違い、人の味方かな？」

清「なんとも、義理堅いんだね」

ゆ「そうやな。

昔の資料には、洪水になった村を龍が救ったっていう話もあるくらいだから…。

でも、決して龍を怒らせてはアカンで！

『逆鱗に触れる』っていう言葉があるやろ？

あれは元々、

龍が語源になったんや

龍の喉元に逆さに生えた鱗があって、

人がそれに触れれば必ず殺されるということからきたんや

まあ、元々龍っていうものは他の妖怪より強いからな。

無闇にふれてはいけんよ

（一度でいいから見てみたいな、噂ではとても美しいらしいし…）「

リ」そうだったんだ。

知らなかったよ。

（てことは、翠雨を怒らせると不味いつてことだね？）「

翠（へえ）、自分の事なのに、知らなかったなあ。

確かに、お爺様達は人間のことが好きだったから、あり得る話か…。だからこそ、父様と母様がいるのか。

納得納得）

―みんなが帰ってからの本家にて―

妖怪たちは

グダァーと疲れ切っていた

みんな集まっていたが翠雨の姿はなかった

つ「若、翠雨様が見えないのですが…  
どちらに？」

リ「あー翠雨ならみんなを送っているよ。

ここに残ったら一緒に住んでいるってバレるからだって…

あとなんか、

神社にも顔を出してくるって言ってたなあ」

つ「そうなんですか…」

翠雨たちは…

カ「それじゃあね、また学校でね」

翠「うん、バイバイ。」

ゆ「きい付けて帰りたい」

翠「うん、それじゃあね」

翠雨は、途中で二人と別れてた

そして、向かった先は…

町外れの小さな神社だった

翠雨の後を追う1つの影…

翠「いつまで、隠れているの？」

もう、出ていなさいよ…

ゆら

ゆ「なんや、気付いてたか…」

翠「初めから分かっていたよ。で、何で付いてきたの？」

ゆ「……………」

なあ、翠雨は人間だよね？」

翠（さすが、陰陽師。

気づいたか？…

まだ確信は持ててないみたいだけど…）

翠「じゃあ、ゆらはどっちだと思っ？」

人か妖怪か…」

ゆ「……………」

わからん……。

翠雨からは、人としての気と……

妖怪の気も感じる、しかもかなり強力なのを……」

翠「そう、分からない……か」

翠雨はどこか悲しげな表情をしていた

翠「ねえ、ゆら。

この神社何を祀っているか知ってる？」

突然聞かれたゆらは呆然としていた

それをみた翠雨は、少し微笑んで

翠「……龍神様だよ。」

ここには、龍神様が祀られている。

さっきの質問に答えようか…

私が人なのか、妖怪なのか……

私は、その龍神様の一族に当たる方の孫なんだよ  
私の両祖父母は龍神様の一族の者。

で、私の両親は龍と人との間の子、つまり半妖同士

そして、私はクォーターに当たるのかな？

でも、

私は祖父母の血を多く受け継いだから、

純血の妖怪に近い…存在なんだ。

だけど、私は人でも在る

中途半端なんだ

何もかも……。

私は、  
ちゃんとした人ではない…

ちゃんとした妖怪でもない…

中途半端な存在なんだ」

どこか、寂しげで悲しい顔をしていた

それを聞いたゆらは驚いていた

ゆ「嘘や、そんな嘘を信じるか！！」

翠雨は人間だ  
妖怪じゃない！！」

まるで翠雨に言い聞かせるように言った

翠「これを見ても私を人間だと言い切れる？」

そう言うと、翠雨は神社にあった小さな池へ向かった

そして、水に手をかざした。

ふわっと

手を上に上げると、水が浮かび上がった

手を左右に動かすと、それにつられ水の塊も移動した

ゆ「!!!!!!!!!!」

翠「分かったでしょ？私は人じゃない…

もう話は終わったでしょ？もう帰ったら？

私はこれからやることがあるから」

翠雨は、ゆらに背を向け  
神社の奥の林へと向かった

ゆ「ま、待ちいゝ！」

翠雨を追いかけ林へ向かった

翠「もう、話すことはないから帰ったらどう？」

私についてきてもつまらないよ」

ゆ「これから、何するん？」

翠「今日は疲れたから、少し息抜きしようと思って……」

林を抜けるとそこには、大きな湖が広がっていた……

ゆ「な、なんやこ！？」

翠「何って湖だよ」

ゆ「分かるわあ、そんなこと!!  
で、

「ここで何するん？」

翠「泳ぐのV」

ゆ「えっ、泳ぐ？」

翠「うん、すごく気持ちいいんだよ（ニコニコ）」

その時の笑顔は先ほどのまでの寂しげで悲しい顔が  
嘘あつたように感じられるくらい無邪気に笑っていた

翠「私に妖怪の血が流れていることを証明してあげる。

そういえば、本物の龍を見てみたいって言ってたよね？」

ゆ「そうや、1度でいいから見てみたいわな」

翠「じゃあ、見せてあげる」

ゆ「?????」

ブアっと、突風が吹いた

風がやみそこに現れたのは

真っ白い鱗を身に纏い、

光のぐわいで金色と黄金色に見えるたてがみ、

吸い込まれてしまうような蒼い瞳を持った

美しい龍がそこにいた

その龍を見て、しばらく固まっていた

やっと口を開き

ゆ「す、翠雨なのか!？」

と言った

どうやら、かなり驚いていたようだ

翠『そうだよ、

驚いた?』

どこからか、声がした。

周りを見回すが

ここには、ゆらと翠雨以外は誰もいない

ゆ「翠雨なのか!？」

翠『だから、そうだって言っているじゃん。

今は、ゆらの頭の中に直接話しかけているんだ

テレパシー的な感じだね

もちろん、普通に口でも話せるけど、

ちょっと厄介だから使いたくないんだ』

ゆ「そうなんや、

その姿で泳ぐの?。」

翠『そうだよ、気持ちいいんだよ

それじゃ!』

翠雨は水へと、飛び込んだ

そして、悠々と泳いだ

ゆらは、そんな翠雨をじっと見つめていた

ゆ（翠雨、綺麗やなー）

そして、さっき翠雨が言った言葉を思い出していた

ゆ（中途半端な存在か……人と妖怪のどちらでもない……うちは、  
どうしたらいいんや？……………）

その後

翠雨は元の人姿に戻りゆらと共に湖をあとにした

ゆ「あんな所に湖が在ったなんて知らなかったわ」

翠「あの湖は特殊でね、普通の人は絶対に辿り着けない

さっきの林にはいると、方向が全く分からなくなり、

いつの間にか林の入った場所に戻るように術がかけであるんだ

昔の陰陽師が術をかけてくれたんだ。

私達龍族と陰陽師しか湖の場所を分からないようにした。

あの湖は、龍神様が誕生した所なんだ。

だから、私達からするとあそこは聖地なんだ

だから、人を近づけさせないようにしてある」

ゆ「そうなんや、まあ当たり前か、神が誕生したところに人を近づかせないのは……」

なあ、さっきその湖で泳いでたけどええの!？」

翠「大丈夫、

ちゃんと許可貰っているから」

ゆ「だ、誰に??」

翠「勿論、龍神様だよ。

あれ?、言わなかったけ?

龍神様は私の曾お爺様だよ」

ゆ「ええええええええ!!」

翠「そんなに驚かなくても…」

家系図はたぶんこんな感じ



結局、血縁同士なんかんじです。あと、PCからだとうまく表示されないかと思われます。PCからご覧のみなさま申し訳ありません m ( \_ \_ ) m

ゆ「じゃあ、翠雨って直系に当たるの!？」

翠「一様そうなるね…」

く  
四

神社から帰るため、石段を降りていた

すると、下から石段を登ってくるスーツを着た男達が現れた

翠（この気配……）

翠「鼠が何のようだ！！」

ここが龍神様の土地だと分かって来ているだろうな！」  
そう言うつと、池へてをかざし、水を宙に浮かせた

「そう、警戒すんなよ」

ゆ「鼠……旧鼠か？……」

ゆらも、警戒し式神を構えた

旧「ちよつと、お前等には餌になつてもらつ

やれつー！ー」

部下たちが二人に襲いかかった

シュッ

ゆ「いくで、翠雨!!」

出番や!!うちの式神!!」

バッ

次の瞬間

大きな狼が現した

翠（狼かぁーそれにしても大きくて強そう）

翠雨はのんきにゆらたちを見ていた

ゆ「あいつらネズミや食べてしもて」

狼は待っていましたと言わんばかりに鼠どもに食らいついていった

鼠1「うわああああ」

ガブッ

バキバキ

ギヤアア

ガブッ

バキバキ

翠（うわぁー凄いなあ…かなりの実力。てか、かなりグロテスクな  
んだけど…）

ガッ

翠雨は、ゆらたちに見とれていたため後ろをとられ  
うしろから抑えつけられた

翠「くっ、離せー!」

抑えつけられた翠雨に

気付いたゆらが

翠雨に駆け寄ろうとした

が後ろから殴られ、

ゆらはその場に倒れた

翠「ゆらっ！！」

翠（このやる・（怒）

ヒョイ

翠雨をつしろから押さえていた奴が宙を舞った

翠雨が投げ飛ばしたのだ

続いて、

近くに奴には回し蹴りをし木に叩きつけた  
鼠「グハアッ」

思いつき蹴られたらしく

ピクリとも動かない

旧鼠のもとへ行き同様に回し蹴りをした

だが、

旧鼠は受け身を取り翠雨たちから離れた

旧「危ないじゃんかよ  
殺す気？」

翠「当たり前よ」

殺す気でいったもの（笑）

ゆらの元へ行き、

近くの木にもたれかけさせた。

翠「今度は私が相手（ニコニコ  
せいぜい、楽しませてね」

そこには、  
いつもの笑顔ではなく、

黒々としたオーラを纏っていた

翠雨の髪の色が徐々に金色へと変わり、

着ていた服も白の着物に変わった

旧「あゝ君が最近来たって噂の龍組の二代目か、結構かわいいね」

翠雨は鋭い眼差しで睨んだ

すると

コツコツ

旧鼠が歩み寄ってきた

翠「それ以上近付くな！！（シュッ）」

翠雨は旧鼠の足元に何かを投げた

バツチ

シュッ

突然、

地面がシュ〜と音を立てていた

見るとそこには穴が開き少し焦げていた

翠雨の右手を見ると

バチバチと音を立て時折、紫電が見えた

翠「それ以上近付くな！！次は当てるよ」  
さつきよりも低い声で言った

いつの間にか

翠雨の手には新たに紫電が握られていた

右手には槍状の細長いものが、

左手にはナイフほどの長さのものを二本  
指の間に挟んでいた

鼠1「てめーよくもやってくれたなあ!!」

すると、四人のねずみたちが迫ってきた

翠雨はナイフの一本を先頭にいたねずみに向かって投げた  
シュッ

ブソッ

バチバチ

鼠1「うあああー」

シュー

バチバチと音をたて

煙を立てながら倒れた

続いて残りの二本も投げた

シュッ

ブソブソッ

バチバチ

鼠23「うああー」

シュー

二人も倒れた

どこからか

肉を焼いたような、焦げ臭いにおいがいた

最後の一人は右手に持っていた得物で  
切り裂いた

すると

ほかの三人とは違い、

突然、炎を上げて燃え上がり倒れた

翠「ねずみの丸焼きのか〜ん〜せ〜（ニコ）」

旧「おーやってくれるねえ、かわいい部下たちを…」

翠「さあゝさあゝ」

次は誰が相手をしてくれ」っうっっ」

突然右肩に痛みが走った

と思ったら、体に力が入らず

その場に倒れ込んでしまった

翠（体が燃えるように熱い）

翠「ううっっ、ハア何っをしたっ…」

旧「俺は何もしてないよ（ニコニコ）」

翠雨は動かない体を無理に動かし  
自分の右肩を見た

肩には、1本の矢が刺さっており、赤く血が滲んでいた

矢を放ったであろう所には一人の男が立っていた

翠（くそっ、あいつかぁ…ハア…ダメ…だ、

意識が…とお、の…く）

そこで翠雨は意識を手放した…

旧「旦那ぁ、助かりましたわ、予想外に強くてどうしようかとお  
もいましたよ」

「ふふっ 抜かりはないな旧鼠よ」

旧「大丈夫ですよ早く三代目を殺したくてうずうずしてますよ」

「まあ、そう慌てるな… ゆっくりと確実に行くんだ。だから、邪魔  
な翠雨様には退席してもらったんだ」

く 伍く

―本家にて―

リクオは1人縁側に座って空を眺めていた

リ（はあゝ、なんか今日は大変だったな…）

コンコン

「リクオ様…」

どこからか、小鼠が現れ

鼠「初めまして（ぺこ

私、旧鼠組の使いのものです。」

リ「旧鼠組…。」

鼠「ハイ、

我らが主、旧鼠様からの手紙を預かっております、どうぞ「

手紙を受け取り読んだ  
手紙の内容はこうだ

『ご友人と

龍組二代目当主の龍翠雨を預かった、

返して欲しければ、今夜中に全国の親分衆に三代目を継がないとい  
う回状を廻せ。さもなくば、2人を殺す。

あと、龍組の子は俺の優秀な部下たちを殺したから、少し罰をうけ  
てもらった

早くしないと死んじゃうよ  
』

手紙を読み終わると突然走り出した

タッタッタ

リ（なんでこんなことに！？）

タッタッタ

リ「一体どこにいるんだ！？」

「ならば、連れて行って差し上げよう」

リ「えっ？うつっ」

突然頭を殴られ気を失った

リ「……う……ん……」

気が付くと目の前には旧鼠たちがいた

旧「おっ目が覚めたかい……三代目さん……」

リ「君が旧鼠？」

旧「ああ、そうだよ。俺が旧鼠

なんでわざわざここへ来たんだ？

回状を廻せば早いものを……」

リ「2人はどこにいる！？」

旧「ん」

顎で指された先に  
人が倒れていた

リ「花開院さん！」

だが

翠雨の姿がなかった

リ「翠雨はどこにいる！？」

旧「ああ、龍組の子？」

あの子ならあそこだよ」

指を指した方にいたのは

大きな鳥籠のなか足を鎖で留められ、

体のいたる所から

赤い血が滲んで荒く呼吸をしている翠雨がいた。

リ「彼女に何をした！」

旧「何をしたって、

部下たちの仇をとったんだよ

あの子せいで優秀な部下をなくしてね。

書いたでしょ？

あと、動けないように毒をやったんだよ」

リ「僕は三代目なんかじゃないよ、だから今すぐ2人を離して」

旧「ふっ言ったな、なら早く全国の親分衆に回状を廻すんだな  
もし破ったら、

この子たちを夜明けと共に殺すっ！！

早くしないと龍組の子は毒で死ぬかもね」

――奴良組本家にて――

鴉「なっなんですかーこれは！！」

リ「回状だよ鴉天狗

これを今すぐ全国の親分衆に廻して、  
じゃないと翠雨がっ!!」

鴉「いけません！翠雨様は我々で助ければよろしいんです！

三代目を継がないことを宣言するなんて!?

これが意味することが解っているんですか!!」

リ「そんなの百も承知だ」

ぬ「騒がしいぞ。リクオ事情は聞いたぞ

鴉天狗回状をくれ」

鴉「どつどつぞ」

ぬらりひょんは回状を受け取ると…

ビリビリッ

と破いて捨てた

ぬ「何を考えておるんじゃないー!!」

バシッ

リ「っ痛いじゃないかつ!!」

ぬ「リクオっお前がこの組を継ぐんだ!」

リ「嫌だっ!!悪さばかりするような最低の組なんか継ぎたくない!!」

「それは違いまっせ!」

リ「だっ誰?」

良「化け猫組当主良太猫でございます。

元々あそこはこの化け猫組のなんです!

あのねずみどもを野放しにしていたら、あの街は終わります。

どうか、お助けを!!」

リ「そつそんなこと  
知らないよ!!」

僕は人だ！なににもできないっ！！  
早く回状を廻してっ」

ぬ「リクオ、あんなドブねずみどものいいなりになるんじゃない！

てめーのことはてめーでけじめを付けるんだ！！」

リ「そんな事言って、  
僕は人だ！力なんてない！」

そういつて部屋をでた

リ（なんだろう？体が熱い）

どこからか声が聞こえた

「情けねえなあー、昼の俺よ。  
翠雨をさっさと助けに行くぞ。

好きな女一人守れねーでどうする！  
さあ、時間だ』

すると、リクオの姿が変わった髪が伸び、赤い瞳…  
それはまさにぬらりひよんの姿だった

と、そこへ鴉天狗が現れた

鴉「若…？」

リ「鴉天狗、皆をここへ呼べ

翠雨に手を出したドブねずみ共を駆除する」

リ（待ってるよ翠雨。今、迎えに行くからな…）

く  
陸く

所かわって旧鼠たちのねぐら

ゆ「う…ん…ここどこや？」

旧「おっ目が覚めたか？陰陽師さん」

嘲ながら言った

旧「どうだい、これから殺される気分は？」

俺を憎まないでくれよ

悪いのは約束を破った三代目だからね」

ゆ「三代目何のこつちや？」

それより、

旧鼠！翠雨をどこへやったんだ！？」

旧「ああ、あの子ならあつち」

そこにいたのは、妖怪の姿で倒れている翠雨がいた

ゆ「翠雨！！翠雨なのか！！？」

大丈夫か翠雨！！」

旧「いいね、感動の再会ってやつ？（シュンッ）」

突然旧鼠の顔の前に紫電が走った

翠「それ…以上…ゆらに、近づくな…」

旧「何いゝまだ動けたの？毒で体を動かすだけで辛いでしょう？どこにそんな力があるの？」

翠「ゆらは…かん、け…いつないでしょ？」

ゆらを、放して…」

今にも消えてしまふくらいの小さな声だった

旧「え、なに？小さくて聞こえないよ。（笑

さて、そろそろ時間切れだ…

なあゝ知ってるか、人の血は、日が昇る前が一番うまいんだよ」

そういうやいなや、

鼠たちが動き出した

鼠1「俺、こっちがいいな」

鼠2「オレホントはあっちの子が良かったな…」

鼠1「ならお前あっち行けばいいだろ？」

鼠2「だってあの子毒食らってたんだよ、オレ下手したら死ぬじゃん」

ゆ（翠雨なんで、うちを庇った？

毒だってきつとうちのため…

なんでや！？なんでわざわざさうちを助ける！？）

突如、白い霧が現れた

霧が晴れ、そこにいたのは、

おびただしい数の妖怪

鼠3「なっなんですかあれっ!!」

鼠1「猫の奴も居ますよ!!」

リ「あれが旧鼠組か？」

良「そうです、あいつらです」

リ「ほお、

おい、旧鼠。てめー

覚悟はできているだろうな？

よくも、翠雨を傷つけやがったな…

その報い、死んで償ってもらおうじゃねえか」

ゆ「（ウソ…）百鬼夜行…なんで？」

ゆらは突然現れた大量の妖怪を見て固まってしまった

ゆ（生の百鬼夜行なんか初めて見た…

じゃあ、あいつが百鬼夜行の主…妖怪の総大将か？）

鼠「てめー、何者だゴラァ」

旧「回状は！？ちゃんと廻したんだろうな！」

リ「ああ、回状ならビリビリにして捨てちまったよ」

旧「ならば、人質を殺すまでよ!!」

ん？

いない!？」

ゆらは、首無たちによって救出されていた

翠雨の方はというと、

さ「大丈夫ですか!？翠雨様」

翠「…ささ、美…さん？」

羽「今、鎖をとりますから!！」

ト「しっかりしろ!」

三羽鴉たちによって救出されていた

が、

足についている鎖をとるのに手こずっていた…

それに気づいた旧鼠は  
「もう1人忘れてないか？」

おいっあの娘を殺れ！」

鼠たちが翠雨に襲いかかった

カキーン

グサアッ

リ「おいおい、何こいつに手え出してんだよ!!」

そこには先ほどまでと違う

怒りに満ちたリクオが鼠を斬り伏せていた

リクオは翠雨の元へ行き、  
刀で足の鎖を切った

そして翠雨を抱き上げた

翠「リ…クオ…なの？いつも…と、違、う」

リ「ああ、俺だ。これが妖怪の姿なんだ。

翠雨、護ってやれなくてごめんな」

とても優しい声で言った

リ「少し待ってろ、今からねずみ退治して来るから

三羽鴉！今すぐゼンの元に翠雨を連れていけ！  
こいつ、毒を盛られている」

三羽

「はっ！！」

3人は翠雨を抱えゼンの元へ飛び立った

リ「それじゃあ、始めようか

ねずみ狩りを…」

それを合図に戦いが始まった…

\*これより先今までより血みどろになります。  
注意してください

バツサ…バツサ…

さ「大丈夫ですか翠雨様？」

三人は翠雨を抱えゼンの元へ向かい飛んでいた

羽「お気を確かに！！  
もうすぐ、ゼン様のところにつきますから！  
もう少しです！」

翠「ゲホゲホ…、ゴホゴホッ

うつゲホッゴホッ」

咳込んでいたら、

急に吐血した。

するとそれを皮切りに、身体中の傷という傷から血が溢れ出した

ト「っ！！！！！大丈夫ですかっ！！」

羽「ゼン様の元へ急ごう！」

そういうと、先程よりスピードを速めた

三羽

「『ゼン様ー！！』」

叫びながらゼンの屋敷に飛び込んだ

ゼ「おいおい、騒がしいぞ、ちつとは、」

そこまで言っと、

返り血を正面から浴びたようになってる三羽鴉たちと  
黒羽丸に抱えられた翠雨が目に入った

身体から血がポタポタと垂れ、もう消えてしまっくらいの呼吸を  
していた

ぜ「！！！！早く中へ！！！」

中の部屋へ行き、翠雨を寝かせた

ぜ「こりゃ、ヒデー、一体誰にやられたんだ？」

そう聞きながらテキパキと止血をしていた

羽「おそらく、旧鼠でしょう、毒も盛ったみたいです」

答えながら手当てを手伝う

ぜ「毒なら、これが利くだろう」

そついつて翠雨に解毒剤を飲ませただが、いくらたつても血は止ま  
らなかった…

ぜ「おかしい…普通なら止まるんだか……………まさかっ！！！」

さ「どうかしたのですか？」

ぜ「今すぐ、旧鼠の所へ行けっ！！！」

こいつはたぶん、普通の毒じゃねえ！

旧鼠に何の毒か聞き出してこい！！！」

羽「分かりました！！

二人はゼン様の手伝いをしろ！」

そう言い残し黒羽丸は

旧鼠の所へ戻った

リクオたちは…

ゴオオオ -

勢い良く炎が燃えていた

リ「てめえらなんか、俺の下になんかいらねえー…

奥義 明鏡止水 さくら」

ブアアア -

旧「なっなんだこれ!!」

炎が旧鼠の周りに渦巻いた

リ「すべてを燃やし続ける…

翠雨に手を出したこと後悔するんだな…」

バツサバツサ

息を切らしながら黒羽丸が来た  
羽「リクオ様っ、旧鼠はっ？」

リ「ああ、ちょうど灰になったところだ

翠雨はどうなんだ？無事か？」

羽「その事なのですが……………」

黒羽丸は、これまでであったことを全て話した

容態が急変したことを…

毒について…

夜「くっそう、旧鼠は死んだ。

どうしたらいいんだ！？」

突然ゆらが

ゆ「さっきのって翠雨やろ？」

翠雨はうちのことを庇ってあんなことになった

だから、

うちが、翠雨を  
助けたる！！」

青「ふざけんなあ！！てめー陰陽師だろ！？

そんな奴信じられつか！！」

首「確かに、信じられませんがね  
嘘を付いて入るとも、  
考えられます

リク才様、どうしますか？」

リ「（翠雨のことをしっていやがる）

分かった、連れてってやる。」

青「いいんですかつ！！若ぁ！！！」

リ「こいつの目は嘘をついちゃいねえ

よし、翠雨の元へ

急ぐぞ！！」

く  
て

ゼン達は…

ぜ「くっそう、血が止まらねえー

黒羽丸はまだなのか!？」

翠「っゲホッ」

また、血を吐いた。

さ「翠雨様、もう少しの辛抱ですっ

もう間もなく、黒羽丸が帰ってきますから!！」

バッサバッサ

ト「戻って来たっ!

遅いぞ黒羽丸！！

つて

リッリクオ様あ！！

それに…

なんで陰陽師の娘が入るんだ！！」

そう、そこにいたのは

リクオ、ゆらとつららたちがいた。

ほかの妖怪たちは帰ったらしく、

つららたちは心配で一緒に来たようだ

今来たメンバーは翠雨の姿を見て驚愕した

それもそのはず、

今の翠雨は真っ白だった着物を真っ赤に染め、  
血溜まりの中にいたのだ

もちろん、

ゼン達も翠雨の血で所々赤くなっていた…

ゆ「っ、症状はなんや！」

ゼ「あっああ。……………」

ゼンから翠雨の症状を聞いた  
ゆらはテキパキと指示を出す

ゆ「まず、酒を出来るだけ沢山準備して！！

あと、ここにある

薬を見て、

それ見て薬を作るから。

薬が出来るまでは、とにかく、傷口を押さえて！そして酒で傷口を  
消毒してね、かなり痛いだろうけど、」

そう口早にいうとゼンと共に奥の薬へ行った

そのあとは、ゆらに言われたとおりに、  
みんなで傷口を押さえ、酒を傷口にかけ消毒した

ゆらに言われたとおりに傷口に酒をかける度に翠雨は顔をしかめ唸っていた

トクトク（酒をかける音）

翠「！！！！っ、うっ！！あっ！！」

相当、傷口に染みるらしく下唇から少し血が滲むほど咬み、堪えていた

っ「薬が出来るまでの辛抱ですっ！！頑張りましょう！」

そう言い、翠雨を励ますが

もう、翠雨には声を出すことさえきつくなっていた

その間にも、皆手を止めず、傷を押さえ、酒をかけ続けた

血の勢いはおさまってきた

だが

もう随分と血が流したため、  
次第に翠雨の意識が薄れていっていた……

リ「しっかりしろ……！ 翠雨……！！」

俺はまだ、  
お前との約束を守っていねえー！

お互い当主と総大将になろうって言ったじゃねえか！！  
約束破る気か！？」

肩を揺すってみるが反応が鈍くなっていた

そのとき！

スパンツ！！！！

と勢い良く襦が開いた

「待たせたな！！」

勢い良く襦を開け現れたゆらの手には小瓶があつた

「早く、飲ましてな。  
効き目は抜群の筈だから」

そう言い、その小瓶をリクオに渡した

リクオは、翠雨を抱き起こし、  
小瓶の蓋をとり、自分の口の中に流し入れた

そして、翠雨の口に自分の口を重ねた

ツーと口元に薬がこぼれた  
それを拭い、また翠雨を寝かせた

周りにいた者は、静かにその様子を見ていた

ゆ「いい薬草ばっかだからいいやつが作れたよ」

ゼ「そうか、そりゃよかった」

ゆ「もう、大丈夫。安静にすればすぐ直るよ」

そのとき、

庭の方から突風が吹いた

リ「っ！！なんだ！！」

庭を見るとそこには…

1頭の龍がいた

白い鱗に、青い目、光のぐわいで濃い青と淡い青に変わるたてがみ

その青い龍はずっと部屋の中を見ていた

皆

（ほ、本物の龍だ…）

ゆ（翠雨と色違いだ…）

すると、風が吹き、龍の鱗が一気に剥がれていった

それは、まるで桜の花びらが散っていくようで、儚げで、綺麗だった

風がやみ

龍がいたはずの所には、一人の女性が立っていた

淡い青の着物を纏い、青い髪、青の瞳をした、美人が立っていた

皆」……………」

「翠雨っ！！」

その女性は、翠雨のもとに駆け寄った

翠雨の状態を見た瞬間、表情が曇った。

そして、翠雨の横にいたリクオの胸ぐらを掴み前後に揺すりながら

「ねえ、翠雨は無事なの！？

ねえ！！どうなのよ！？

早く答えなさい！！

じゃないとあなたを絞め殺すわよ！！」

後半は、もはや脅しになっていた…

リクオは、グワングワンと揺すられ、目を回していた

つ「若を離してください！！翠雨様は無事ですから！」

無事と言う言葉を聞き、  
ホッとしたようでリクオを掴んでいた手を離した

「良かったわ…」

首「あの、あなたは…」

「あゝ、そうね。知らないわよね、

私は、龍 翡翠  
翠雨の母です」

皆リクオ以外

「えゝ！？、翠雨様のお母様」

翡「そんなことより、一体何があったの！？

あの翠雨がボロボロなんて、有り得ないわ！」

翠雨は今

リクオの隣で規則正しい寝息をあげていた

リ「ゝゝつ、目え回った…で、なんで翠雨の母ちゃんが居るんだよ？」

翡「そんなの決まっているじゃない！？

可愛い愛娘の様子を見に来たのよ。

で、本家に顔出したらなんだか騒がしくて総大将に何があったか聞

いて

それで、翠雨が怪我したって聞いて駆けつけたのよ」

リ「そうだったのか…」

翡「で、何があったの？」

そして、リクオはこれまでであったことを全て話した

ゆ「うちのせいや、うちがもっと強ければ…」

強ければ、翠雨がうちを庇う事なんてなかった…」

翡「そんな事ないわ、翠雨は自分であなたを助けようとして、失敗した。」

それは、あの子の力が足りなかっただけ…  
それだよ

だから、あなたが変に気にすることなんてないわ。  
何か償いたいのなら、

あなた、翠雨が龍であることを知っているでしょ？

翠雨が龍であることを外へ口外しないでくれる？

そして、今まで通りに接してあげて。変に特別扱いをしないであげて

それが今あなたに出来ることよ…」

ゆ「わっわかった」

リ「随時、落ち着いてきたな…」

そう言いながら、

スースーと寝息をあげている

翠雨の顔についていた血を拭った

その顔は、どこか悲しげで泣きそうな顔だった

翠「……うん……」

目を開けるとそこには、みんなの顔があった

リ「お、目え覚めたな

大丈夫か、翠雨？

どこか、痛くねえか？」

心配そうに頭を撫でている

翠「うん、大丈夫…

ただ体がふわふわしてる感じ……」

ゼ「そりゃ、そうだ。

あんだけ血い流したんだからな。

貧血起こしているから血い作る食いもん食えよ」

ガシッ

翡「あゝ、翠雨。無事で良かった!」

翠「か、母様!?!」

ギユウ

抱きついた腕がきつく締められる

翠「ううつ、く……苦しい」

翡「ホントに無事で良かった」

やっと腕から解放された

翠「心配かけてごめんなさい…」

翡「わかればよろしい」

リ「翠雨、護ってやれなくてすまねえ

お前のこと護るって決めてたのに…  
情けねえ…」

翠「いいよ、謝らなくて。

今回は私が気を抜いてたのが原因だからリクオが謝る必要はないんだよ

みんな、

助けてくれて  
ありがとう（ニコ）  
「

危険な目にあっただのに、笑って皆にお礼を言った

翡「しんみりムードはこれで終わり！

翠雨、着物脱ぎなさい」

皆「えっ！？」

翠「ああ、そうだね。

血塗れだから気持ち悪い……」

ムクつと起き上がり  
帯に手をかけた

首「！！！！ここで脱ぐんですか？」

翠「他にどこがあるの？」

シュル

つ「翠雨様、いきなりすぎます！」

さあさあ、殿方は外で待つててください」

リクオたちは、つららとささ美によって部屋を出された

それを確認するとつららたちは翠雨の手伝いをした

翡「ほら、翠雨。傷見せて」

背中 of 傷を見せた

深い傷口の周りに龍の刺青が丸く傷口を囲んでいた

ほかに、体の至る所に小さな龍の刺青があった

翡「うん、これならすぐ治るわね」

つ「翡翠様、この刺青は一体何ですか？」

翠「私から説明するね。」

この刺青は私の妖力の塊

私の体は人の体だけど

妖力は龍の純血と同じくらいあるの

だから、

体に収まりきれずこうして、皮膚の下に刺青のように妖力が貯まっているんだ

これは、簡単にいうと私の分身みたいな

たまに数匹ガス抜きのためにそとに出すんだけど

外にでた刺青は小さな龍になる

その龍は私の分身だから私が命令すればなんでもするよ

今は、こうして傷の治りを速くしてくれているんだ」

翡「まあ、これは特別で翠雨にしかないのよ  
本当に龍の血を多く受け継いだのね……」

さ「あの、お着替えはしないのですか？」

翡「あっ……………」

翠「はあ、信じらんない……」

脱げって言うつといて『着物の替えがない』

なんて…」

今翠雨が着ているのは

リクオが羽織っていた羽織りだけ、

勿論胸には晒しを巻いている

が、

羽織りの丈が短くミニスカ状態

さつき着ていた着物は

今つららとささ美で大急ぎで洗っていた

足をぶらぶらさせながら縁側に座っていた

翡翠は、

翡「無事なら良かった

総大将に迷惑をかけないようにね」

じゃあまたね」

そう言い残し

龍の姿になって空に消えた

翠「はあ、どうせ母様は父様と仲良くやってんだろっな……」

ゆらはというと、

ゆ「助けてくれてありがとな  
ほな、また学校でな」

普通に帰って行った

翠「ゆらに、本当のことバラしちゃった…」

リ「あいつは、お前から離れていたりしねえよ」

翠「えっ!？」

振り向くと

そこには、襖に寄っ掛かったリクオがいた

翠雨の隣に腰を下ろす  
リ「起きてて平気なのか？」

翠「うん、ふらふらするけど少し風に当たりたくて…」

リ「そうか……」

あいつは、お前から離れて行ったりしないさ

むしろ、あいつの恩人だから付きまとわれるかもな」

翠「ハハ、あり得る。ゆらならやりかねないね」

リ「だろ」

そのころゆらは

ゆ「ハクション誰かうちの噂でもってしてるんかな？」

夜空の月を見つめながらポツリポツリと翠雨が  
語り出した…

翠「私ね、怖いんだ…

いつか…私が力を使いこなせず…暴走するんじゃないかって…

みんなを巻き込んでしまうんじゃないかって…

我を忘れて、

みんなに牙を向けるんじゃないかって…

みんなを傷付けるんじゃないかって…

自分が怖い…」

翠雨の肩が震えていた

そして、一筋の涙が落ちた

リクオは翠雨の肩を抱き

リ「大丈夫だ、もしそんな事があつたら俺が止めてやるよ

例え何があつてもお前を連れ戻してやる。

だから、泣くな翠雨」

もう、涙はとどめなく流れ落ちていた

翠「ありがとう、リクオ…  
お願いがあるんだ…

もし、

私が暴走して組の誰かを傷つけたら

その時は

リクオの手で私を

殺して」

リ「!!!!!!

分かった…。

それが望みならやる。

だが、

その望みは絶対に叶わないからな

そんなことなる前に俺がお前を止めてやる」

翠「…うん…」

ありがとう」

東の空がだんだんと

白んでいった



く七七（後書き）

皆さん、初めてにゃんこといいます。

今頃挨拶することとなつてしまいすみません。

今回の作品は如何だったでしょうか？

内容は旧鼠編ですね。

内容がグチャグチャで少し分かりづらかったと思います…

感想、ご要望、どしどし送って下さい。できる限り答えて行きます！

今回とも、龍の孫娘をよろしくおねがいします。

次は、牛鬼編に行きたいと思います。

ちなみに、牛鬼編のあとは四国編でその後はオリジナルを入れた  
いと思っています

く捌く（前書き）

お待たせしました！

やっと牛鬼編突入ですね（ ）

牛鬼編は旧鼠より、少し展開が早いかも知れませんが、よろしくお  
願いますm（ ）m

では、どうぞ

く捌く

旧鼠の件があつた翌日 学校では

清「ずっずるいぞ花開院さん！？妖怪にあつたんだって！？」  
悔しそうに嘆いている清継

ゆ「そんな事言つたつて、殺されかけたんやで…」

清「でも、今君は此処にいるじゃないか？」

ゆ「そ…それは…妖怪に助けられたからや…」

清「ま、まさか！！あの御方に助けられたのかい！？」

ゆ「あの御方つてぬらりひょんやろ？うちを助けてくれたのはもつと凄い方や！！」

なぜか、目がきらきらと輝いていた…

清「誰なんだい！？」

ゆ「それは…  
…内緒や…」

清「どんな方なんだい？」

ゆ「自分の身をかえりみず、うちを護ってくれはった…強くて…美しい方だよ」

カ「ねえ、そう言えば今日、奴良くんと、翠雨は？」

ふと、今日学校に来ていない2人に気が付いたカナ

カ「奴良くんが休むなんて珍しいね。翠雨はどうしたんだろう？」

ゆ「すつ翠雨なら、なんか急に実家に帰ったみたいだよ」

実は翠雨がゆらを庇ったなんて言えないから、ゆらは咄嗟に嘘をついた

ゆ（うちの所為で怪我して、休んでいるなんて言えん…翠雨大丈夫

かな？  
)

そのころ、本家では……

[illegible]

「暇だあー！なんかやることない？」

部屋で大人しくしていた翠雨が痺れを切らし、叫んでいた？

り「まあ、そう言わずに……翠雨は怪我人なんだから、大人しくしててよ」

リク才は、翠雨の看病（と言う名の見張り）をしていた

翠「怪我人って…もう怪我治ってるよV

あとは、貧血が治れば復活だよ」

リ「えっ！？早くない治るの！？」

翠「あれ！？説明してなかったけ！？」

リ「説明って？」

翠「そっか、リクオにはしてなかったっけ？

ゆらには話したけど…」

リ「花開院さんに話したの！？」

翠「そうだよ、なんかゆらは私が入ではないって分かったみたいで…

それで話したの、まあ理解してくれたけど…

じゃあ、話すね……

—説明中—

って事なの、分かった？」

（↑はしりました。すみませんby作者

翠雨は、自分は祖父母たちの血を多く継いでいる事と、刺青の龍について話した

自分が半端な存在であることは言わなかった

翠（リクオに心配かけたくないし、話さなくていいよね）

リ「そうだったの！！僕知らなかったよ」

翠「なあ、リクオあの日の夜の事覚えている」

リ「あの日の夜？」

翠「いや、覚えていなければいいや

（やっぱり、自分が変化したこと覚えていないか…いずれ、分かってくるだろうな…）」

その後たわいもない話をした  
気がつくともう、夕暮れ時…

リ「もう、こんな時間…」

すると

襖越しに声がした

「翠雨様にお客様です」

翠「毛娼妓か、

で、私に客？」

毛「はい、客間に行けますか？リク才様も一緒に…」

翠「？わかった。

じゃあ行こうかリク才」

二人は客間へ向かった…

襖を開けるとそこにいたのは…

ゆ「翠雨、もう怪我へいきなんか？」

心配そうに見つめるゆらがいた

翠「ゆら、どうしたの急に…？」

ゆ「実はな、今度の連休にみんなで山に行くことになったんや。

そのことを二人に伝えようとおもってな」

翠「え〜どうせ、妖怪オタクの企画でしょ？拒否権を使います。」

ゆ「それが、拒否権はないって…清継言っとったで。」

翠「はあ…分かった行けばいいんでしょ？」

リクオはどうする？」

リ「みんなに何かあったら大変だし、僕も行くよ」

翠「リクオはあいつの保護者かよ!!」

ゆ「ほな、決まりな

あと、翠雨が学校を休んだ理由：急に実家に帰ったって誤魔化したけど良かったか？」

翠「ああぜんぜん構わないよ。むしろありがたいね」

ゆ「ほな、またな奴良くん翠雨」

ゆらは帰って行った

リ「そういえば、行く山って捻眼山（変換してでなかったのだからいきます）だよね？」

翠「うん、そうだね」

翠（捻眼山は確か…牛鬼が納めてるんだよね？

昔、父様と一緒に会いに行つたよね…）

実は、翠雨と牛鬼は知り合い？（顔見知り？）だった

時はかなり進んで、

連休

そして、いきなり捻眼山ふもと↑かなり飛ばしました。すみません

清「さあ、ここが捻眼山だよ」

巻「えええ！！めっちゃ山やん！！」

清「当たり前じゃないか！  
修行だぞ！！」

めちゃくちゃ張り切っている清継…

ちなみに、今いるメンバーは翠雨、リクオ、つらら、カナ、ゆら、  
清継、島、巻、鳥居と言った感じ…

翠（ここ、凄い妖気が濃いな…それに気配がかなり近くに2つ、監  
視か何かかな？）

巻「足いたい」  
鳥「疲れたあゝ」

とか、愚痴をこぼしながらも山を登る一行…

巻「ねえ、あそこになんかない？」

カ「祠みたいだけど…なんて書いてあるのかな？」

リ翠「「梅若丸」」

リクオと翠雨が呟いた

カ「えっ？見えているの？霧がかかっているのに…」

「  
翠「う、うん。見えているよ！！（あちゃー、つい言っちゃったよ）」

少し後悔している翠雨

リクオも、しまったという顔をしていた

ゆ「翠雨と奴良くんは目が良いんやな」

ゆらはすかさずフオーローへ回ったお陰で、なんとかスルーする事が出来た

ゆ「ほな、確かめに見に行きますか」

獣道の先には、苔がむしかいしている祠のような物があつた。

そして、そこには梅若丸と書かれた石碑とお地蔵様があつた

清「おおーこんな所に在ったのか」

「見つけたみたいだね」

すると突然後ろから声がした

そこには……

清「あ、あなたは!？」

翠(!!!?糸が付いているし…、この感じ…成る程ね)

清「妖怪研究家の化原先生!!」

全

「「誰それ!？」」

そこにいたのは、30代後半位のおじさんが立っていた

化「祠、見つけたみたいだね。さすが、清十字怪奇探偵団のみなさん」

ゆ「なあ、この石なんや?」

化「ああそれは梅若丸の供養碑だよ」

巻「く、供養碑いゝ!？」

鳥「なっ何でそんなんがあるんすか!？」

化「ああ、それはだね…「梅若丸もとい牛鬼の暴走を悔い止めるため。ですよね先生?」あ、ああ君は妖怪に詳しいみたいだね」

翠雨が先生に代わり説明をした

翠「いえ、多少知っている程度ですよ。先生の方が詳しいと思いますが…そうですね?先生。

「

翠雨はチラッと、気配がある木の上に目を動かしたがすぐに戻した

先生の頭上の木のところには2人の妖怪がいた

頭に馬?の骨を被った子が、左目を前髪でかくしている子に問いかけた

馬「なあ、牛頭。今の奴明らか僕たちの事気づいていたよね？」

ご「ああ、あいつは俺らのことが分かっているみたいだな」

馬「どうするんだ、このまま計画進めていいのかな？」

ご「大丈夫だろ、お前はそのまま計画通りにやれ。俺は牛鬼様に報告してくる」

そ「うって、その場から消えた

翠（１人消えたな…大将に報告に行ったって所かな？）

―牛鬼組の屋敷―

牛「何かあつたか牛頭丸」

ご「ええ、山に獲物が入りました。

それと、その中の1人が隠れていた俺たちに気づいていたようです。

」

牛「ほお、鋭い人間も居るようだな…どんな奴だ」

ご「たしか、背中の中程まである青っぱい黒髪で金色の瞳を持った  
変わった風貌の奴でしたね」

それを聞くいなや牛鬼の体がピクリと動いた

牛「……まさか、翠雨様まで来ていたとはな…

少々厄介だな…」

ご「？牛鬼様、その翠雨って誰なんですか？」

ご「牛頭丸、お前、龍組を知っているな？」

ご「はい、たった1代で奴良組傘下の高位に付いた組ですよ？  
それと、さっきの奴の関係は？」

牛「翠雨様はその龍組の2代目当主だ。

先代の雷牙より、力は上らしい。

恐らく、

もう少ししたら正式に2代目として活動を始めらるう」

ご「あんな、ひよろつとした奴がですか！！？」

牛「確かに、細いからだ付きだが力は凄いぞ。

昔、一度手合わせしたがギリギリ勝てた位だ」

ご「それならまだ心配いりませんよ。昔の話ですし、牛鬼様は強い  
ですから」

牛「…昔と言っても、翠雨様が4歳の時だぞ…」

ご「……………」

牛「だが、もしかしたら今なら勝てるかもしれないな…」

その言葉を聞くやいなや牛頭丸が目を輝かせた

ご「ほ、ホントですか牛鬼様!？」

牛「ああ、今の翠雨様はとても不安定だ…

体は人であるのに、力は龍神のものだ

だから、本人はそのことを気にして悩んでいる

完全な人でも妖怪でもない…

だから、今とても精神が脆い状態だ

其処をつけば、

簡単に勝つことは出来るだろうが、逆に暴走させたら終わりだからな…」

空では月が淡い光を放っていた

それはまるで、翠雨の心のようにだった

今にも闇に紛れそうな弱い光…でも、ちゃんと弱いながらも一際存在感があつた

牛「牛頭丸、翠雨様とやり合おうなんて考えるなよ。返り討ちに会  
うからな」

「……はい、分かりました」

く捌く（後書き）

はい、だいぶはしょっているところが多かったと思います。

すみません、めんどくさがってはしりました…m（――）m

次話をお楽しみに

頑張って、早めに更新出来るようにします…！

く玖く（前書き）

お待たせしました！！！！

やっと更新できました。

ホント、遅くてすみませんm（―――）m

ではっ！！！！どうぞ！！！！

く  
玖

（↑時間がかなり進んで、もう夜です

山の散策を終えた一行は山頂付近にある屋敷に泊まる事になっている

そして今は女子組と男子組に分かれて、

女子は温泉、男子は山へまた散策に行くことに

女子組は、カナ、鳥居、巻、ゆら、翠雨

男子組は、清継、島、リクオ、そしてなぜかつらら

と言う感じ

そして、今いるところは女子組の露天風呂です

巻「ぷはあゝ超気持ちいいね」

鳥「そうだねえゝ癒されるうう」

力「気持ちいいゝ」

翠「確かに、このお湯いいよね」

ゆ「そうやな」

巻「そういえば、なんでつらは入らなかったんだろうね？」

鳥「さあ、女の子の日なんじゃない？」

力「残念だったね、こんなに気持ちいいのに……」

翠「まあ、つらのことだからリクオが心配だから付いていったん

だろうな…

それにしても、少し過保護すぎないか…？

そんなんで組は大丈夫なのかな？)

なんてことを考えていた翠雨

そんな様子を見ている妖怪がいた

翠(覗き見とか趣味悪いなあ。 1、 2、 3体とさっき、操っていた奴かで4か…)

翠雨は敵が来たことをゆらに伝えるために、

指先を水面に付けて文字を書き始めた

すると、

少し離れたところにいるゆらの目の前の水面に翠雨が書いた文字が泡となって現れた

ゆらは一瞬驚いた表情をしたあと翠雨に顔を向けた

翠雨は一度頷き、一旦風呂をでるために立ち上がった

翠「みんな、先に出てるね。少しのぼせたみたい」

そして、一足先に風呂をでた

そして、いつ攻められてもいいように、妖怪の姿で露天風呂が見える木の影に身を潜めた

翠雨が隠れてまもなく  
先程の3体が現れた

先生を操っていた奴が不気味な笑みを浮かべて、  
周りにいた妖怪たちに命令した

「1人残らず喰ってしまえ」

ゆ「くそっ!! 禄存!!」

ゆらは構えていた式神を出した

「し、式神なんて聞いてないよ!？」

翠「フフ、式神だけじゃないよ…」

ストンと現れた翠雨（妖怪時）

巻「だ、だれあの金髪の人」

鳥「凄く綺麗…」

翠「（ここは一樣他人の振りをした方がいいよね）  
ねえ、その陰陽師さん。その3人をちゃんと護っててね」

ゆらは翠雨がわざと他人の振りをしていることに気づき、「分かった」と一言言つて、禄存の他に貪狼、武曲を出して守りの体制になった

突然、現れた翠雨に驚きを隠せない馬頭丸  
馬「あ、あんた誰なんだよ!？」

翠「私？私はただの通りすがりの者ですが、何か」

馬「どこが通りすがりの者なの!？バツチリ現れたじゃない！

ああーもついいや!!

行けっうしおに軍団!!」

翠「ふーん、そっちがやるきなら、こっちもやりますよ…」（ニヤリ」

翠雨は不適な笑みを浮かべた

左手を右手の上に乗せてスツと左手を左に払ったすると、右手には紫電が刀のように握られていた

翠「さあ、いらしゃいな」

敵を挑発するように煽った

馬「くっそお」

ついに、頭に來たのが一斉に翠雨に突っ込んできた

翠雨も地を蹴って迎え撃つ

1体目は刀を頭の上から下へ振り下ろした

2体目は下から上へ

3体目は顎の下から頭を貫通させた

この一連の動作はほんの数秒で行われ、周りにいたものは何が起こりたか分かっていなかった

3体がほぼ同時に地面に倒れた

残っているのは馬頭丸だけ

翠「残りは、あなただけだよ」

馬「ひっ!」

馬頭丸は翠雨から放たれる禍々しい気に怖じ気付いて逃げようとしたが

翠「こらこら、逃げちゃだめですよ?」

馬頭丸の目の前に紫電が突き刺さる

翠「今、迎えが来たから」

次の瞬間翠雨の背後に鴉天狗たちが現れた

三羽

「「「お怪我は有りませんか!?!」」」

翠「大丈夫だから、そんなに慌てないで黒羽丸、トサカ丸、ささ美

こいつのこと頼んでもいい？

私これから、やることあるから…

一樣、やること終わったら3人共来てね」

羽「分かりましたが…あまり無理はなさらないようにお願いします」

翠「フフ、分かった

じゃあね、陰陽師さん」

立ち去ってリクオの元へ行こうとしたが…

力「待って!!」

振り向くとカナが呼び止めたようだ

力「お礼を言わせて」

翠「お礼なんて、私には勿体ない」

力「なら、せめて名前を教えて!!」

翠（流石に翠雨って言うてバレるからな）

ふと、空に輝く月をみて

翠「なら、月華って呼んで」

カ「月華さん…」

翠「それじゃあ

あとよろしくね」

翠雨はリクオの元へ行くべくその場から消えた

リクオを追いかけて、今は森の中を疾走中

翠（今回、牛鬼は一体何を考えているんだ？

リクオに刃を向けるとは…

でも、牛鬼には牛鬼なりの考えがあるんだろうが全く分からないな  
…)

すると、少し離れたところから声が聞こえてきた  
「逃げてえー！！若ー！！」

翠(この声、つららか！？急がないとっ！！！)

声がしたところには、つららを抱え、祢々切丸を構えたリクオがいた  
翠「リクオっ！！」

リ「翠雨！？どうしてこんな所に！？」

翠「そんなのリクオが心配だったからだよ

それより大丈夫？」

リ「僕は大丈夫だけど、つららが…」

つ「こんなのかすり傷です。私がリクオ様を守るんです!!」

翠「この傷でよく言えるね」

翠雨はちゅんちゅんと足の傷を突つついた

つ「!!!?うつ!!」

翠「ほら、無理でしょ？」

ここは、リクオに任せよ

なんかあれば私も出るからね？」

つ「うゝ、はい、分かりました…」

つららは渋々に行ったようにその場から、端にどいた

ご「はっ、使えない側近を持つと大変でしょう?」

端にどいた翠雨とつららは…

翠「つらら、傷みして。

治すから」

つ「そ、そんなっ!!わざわざ翠雨様にやって貰うなんて!!」

翠「良いから、大人しくしてようか?」

そのときの翠雨後ろには黒いオーラがあった

っ「!!は、はいっ!!」

翠「そ、それでいい」

さっそく治療を始める翠雨

傷口に手を添えた

すると、手から雫が滴り落ちた

その雫が傷口に落ちるとシュウと蒸発するような音がした

っ「くっ!!」

翠「少し我慢しててね…

はい、終わったよ」

手を退かすとさっきまであったはずの傷が綺麗に消えていた

翠「さてと、リクオの方は…」

お互い譲らず攻防戦だった

牛頭丸が振り下ろしたのを防いだ

だが、それを待っていたかのように笑みをこぼした

牛頭丸は呪文を唱えた

翠（！？あれは！！

くっそ、卑怯な手を使いやがって！！）

リクオの動きがわずかに止まっている

っ「リクオ様っ！！」

翠「雷電！！」

つららが叫ぶと同時に翠雨は右手から雷電<sup>かみなり</sup>が放たれた

雷電は牛頭丸が出した爪を焼き切り落とした

その隙に、

我に返ったリクオは牛頭丸を切りつけた

ご「ぐはっ!!」

なるほど、あんたが翠雨様って奴か？」

牛頭丸は斬ったリクオを睨むのではなく、奥にいる翠雨の方を睨んでいた

翠「ええ、そうよ。私が翠雨よ」

ご「ふーん、あんたがね…」

（牛鬼様が苦戦するくらいだ、さぞかし強いんだろうな…ああ、こいつを倒してみたいな…）

ご「人の分際で、妖怪のしかも龍神の力を持っているなんてな…」

なあ、お前は人なのか、それとも、妖怪か？

どっちでもないよな？

お前はなり損ないだろ」

その挑発するような言葉は、翠雨の中で一番触れてはならないところに触れてしまった

翠「…れ…ま……………れ…」

ご「なんだ、よく聞こえないぜ、なり損ない」

翠「黙れ！と言っているんだ！！」

そう叫ぶと、翠雨の手が龍の時の手に変わり、瞳も鋭く猫の瞳のように細くなった

翠「二度と話せないように貴様の喉笛かつ斬ってやる！！」

翠雨は、手に紫電を二本出し牛頭丸の懐に入った

そして、手にしていた紫電で牛頭丸の背中にあつた全ての爪を切り落とした

その勢いのまま紫電を牛頭丸の両肩に突き刺し地面に固定した

肩を貫かれ悲鳴をあげる牛頭丸  
ご「うわぁあっ！！（なんだこいつ、  
さっきと人が違うだろ！？）」

ガシッ

翠雨は手で首を掴み、

翠「この首どうしようか？  
切り落とすか？」

へし折ろうか？

やっぱり…  
肩みたく雷刀で貫通させるか」

そういうと、首を掴んでいない方に紫電を出した  
そして、雷刀（紫電）を振り上げ、振り落とした

だが、

腕を掴まれ、振り落とされることはなかった

「もう止める翠雨。もう十分だろ」

其処にいたのは…

翠「!!!?リ、リクオ!!!」

なんで…」

リ「ああ、知ってたよ…」

夜こんな姿になること」

翠雨を止めたのは、ぬらりひよんの姿になっているリクオだった

リ「翠雨、もうそいつから退いたらどうだ?」

翠「嫌だね…こいつの喉笛かつ斬らないと気がすまない!」

掴まれていた手を振り解いて、

また雷刀を構えたが、体が一瞬フワリとなったかと思っただら今度は目の前が暗くなった

翠「なっ／＼／＼離せっ！！」

そう、今翠雨はリクオの腕の中…

腕の中で暴れる翠雨をよそに  
リ「約束しただろ？翠雨が暴走したら、俺が止めてやるって…」

翠「お、覚えていたのか！？」

リ「当たり前だろ？」

翠雨、お前はなり損ないなんかじゃない。

翠雨は俺と同じように、

妖怪の血と人の血がある俺らはどちらの世界にも入れるだけだ

だから

翠雨は翠雨だろ？

それは、変わらないさ」

翠「…そうだね…私は私か…」

このときにはもう、龍の手と猫目ではなくなっていた

翠「ありがとう、リクオ」

リ「俺はただ約束を守っただけだ

よし、こいつの大将のところに行くか」

翠「行くのはいいけど、つららはどうする？」

つららは今、翠雨の怒りの気に当てられて気絶している

翠「つららに悪いことしちゃったな…」

リ「で、どうすつか…」

翠「宿に連れてくなら、私がやるけど」

リ「そうだな、宿に連れてくか…」

翠「わかったじゃあ、あの子を呼べばいいかな？」

リ「あの子？」

翠雨は空に向けて、雷電を放った

すると、ほんの数秒遅れて翠雨たちの目の前に雷が落ちた

リ「うわっ！！？」

雷が落ちたところにいたのは、

金色の毛をした犬とも狼とも言えない獣がいた

翠「煌<sup>きら</sup>また大きくなった？」

翠雨は煌の頭を撫でながら言った

煌「そうか？私はデカくなつた実感がないが…」

リ「喋つた！？」

翠「うん、そりゃあ話すでしょ」

リ「なあ、翠雨そいつなんだ？」

翠「ああ、この子は雷獣の煌っていうの

煌は私の部下第1号だよ。あと、もう一匹いるけど、まだ訓練中だから外に出せないの」

すると、煌はリクオに近づき

「よろしくな、奴良組若頭」と挨拶をした

煌「で、翠雨私は何をしたらいいんだ？」

翠「そうだった、山頂付近に宿があるから、そこまでこの子連れ  
てってくれる？」

煌「ああ、分かった」

つららを煌の背中に乗せた

煌「じゃあ、行ってくるな」

翠「うん、よろしく」

煌はつららを乗せ宿を目指した

リ「さて、俺らも牛鬼のどこに行くか」

そして、2人は牛鬼がいる館を目指した

翠「リクオ、牛鬼と会ったら何をするの」

リ「分かんねえーな

話し合うかもしれねえし  
斬り合うかもしれねえな」

翠「そっか…」

この2人を照らす月明かりはさっきの弱々しい物ではなく、力強く  
闇を照らしていた

く拾く（前書き）

段々更新が遅くなって、

申し訳ありませんm（　　）m

あと、以前コメントがありまして、

そこに、「」の前にその台詞を入っている人物の頭文字を置いていたり、置いていなかったりという事態を変えてはどうかと言うものがありました。

ですので、これからは統一して頭文字を書いていくようにします。

そのため、編集をしたりするため少し更新のペースが落ちるかもしれません。

ご了承くださいm（　　）m

では、どうぞ？

く拾く

つららたちを見送ったあと

2人は牛鬼がいる館へと向かった

―牛鬼組屋敷―

火がゆらゆらと揺れていた

部屋の中央で書を読んでいる牛鬼の姿があった

翠「なにを考えているの、牛鬼おじさん？」

うしろに振り向くと、

柱に寄りかかっているリクオとその隣にいる翠雨の姿があった

牛「やはり、一緒に来ましたか…リクオ、翠雨様。

リクオは  
血を継いでいるのは確かなようだ…」

スチャッ

リクオが刀を首に突きつけ  
リ「なぜ短絡的に俺を殺そうとした？

一番思慮深いお前がなぜ？

まさか、あの糞鼠もお前がやったのか？」

牛鬼は首に刃があるにも関わらず、振り向きこつ言った

牛「牛頭丸を倒したか？

何がきっかけでその姿になるのですか、

側近か、それとも学友ですか？」

柱に寄りかかっている翠雨がクスクスと笑い

翠「牛鬼おじさん、牛頭丸だっけ？そいつをやったのは私だからね…

おじさん、ちゃんと教育してる？

あいつ、自分のほうが弱いこと分かっていたのに私を挑発してきたんだよ

だからね…

叩きのめしてやったから…

しばらくは両腕使えないと思うから

その間にちゃんと教育してね」

牛「……そうでしたか…

では、ちゃんと言っておかなければ…。

で、リク才様いつからなんです？

夜だから？

自分の意志で変わったのですか？

ぜひ、聞きたいですな」

リ「質問してんのはこっちだぜ。

その気になったら、

簡単にその首はねとばすことも出来る」

シュンッ

牛鬼の刃がリクオの首にあてられる

翠「貴様っ！！」

翠雨が怒りを露わにし、右手に雷刀を出していた

リ「翠雨いい。

しまうんだ」

リクオの制止によって、洩々雷刀を消す翠雨

牛「私の質問に答えるんだリクオ。

明確にな…

こちらとて、首をはね飛ばすなんて造作もないことだ

日が昇れば、その姿からまた元に戻るのか？

そして、妖怪であったときの記憶はなくなるのか？」

リ「ああ、そうかも知れないな……」

牛「昼間の記憶はあるのか？

夜と昼では別人と言うことか」

リ「ほおー随分と詳しんだな」

首にあつた刃がわずかに食い込み血が流れる

牛「私の質問に答えんかああ！！」

牛鬼が怒鳴つたと同時にリクオの周りに、

蛇野郎、キモい奴、ナルシストの鼠が現れた

（→酷い言いようですみませんm（――）mあくまで作者の感じ  
たように書きました）

リ（幻覚か！？）

ガ「ガキのおめえーに殺された

あんときはどうだったんだああ！！」

シュンッ

ブワッ

切り裂くと煙のように消えていった

蛇「俺の時は、気まぐれで変化したのか？

お前は組を継ぐ気があるのか？」

シュンッ

ブワッ

旧「知ってつか？」

二代目が死んでから組が弱体化してきていること

テメエは秩序をなくしたこの組をまとめ上げることが出来るのか！  
？」

突如としてネズミがリクオに襲いかかる

リ「くっ……」

それを合図にガゴゼ、蛇太夫、旧鼠が襲いかかる

翠「リクオっ！！」

牛「リクオ！！」

自分を守る百鬼夜行がなければ何も出来ないのか！！

総大将は違ったぞ！

お前が継いだ血は腐ったのか？」

ブワッ

リクオを囲んでいた三人が吹き飛ばされた

リ「牛鬼…

アンタは俺を試してんのか？

答えてやる、

俺の意志は変わらない…

俺は三代目になってアンタら全員の上に立ってやるよ」

ガキン

ガキン

ガキン

牛「まだだ!!」

お前はこんなものじゃないだろう」

激しくぶつかり合う刀

ガキン

リ「牛鬼、アンタは俺を殺した後どうするつもりだ？」

牛「お前を殺した後…

私も死ぬのだ…」

ザシュッ！！

ドバッ

翠「リクオ！！」

ドサッ

倒れたリクオに駆け寄る

牛「…私のように人を捨てるんだリクオ…」。

総大将になるのならば…な…」

ブシュウウ！！

ドサッ

牛鬼も倒れた

牛「リクオ、翠雨聞け…

捻眼山は組の最西端、  
ここからさき私たちの地はない…」

バサバサ

黒「リクオ様！！」

ト「なんだこの状況は!？」

翠「黒羽丸にトサカ丸!!来てくれたんだ」

牛「リクオ、ここにいるからこそ分かる…」

今の奴良組は内からも  
外からも崩れてきている

早急に立て直さなければ…

だから、

私は動いたのだ

私が愛したこの組を守るために…

この組を潰す奴が許せない

それが…

たとお前でもな…」

黒「逆臣牛鬼！

リク才様に、本家に刃を向けやがったな！！」

牛「当然のことをしたまでだ

うつけにこの組を任せられない

だが…

お前には意志があつた、それに器もあつた

私が思ったとおりにな…

これ以上考える必要はないな」

ノッソリと起き上がり、刀に手をかけた

そして…

牛「これが私の答えだ」

黒「牛鬼！！貴様ああ！！」

刀を自分の腹に突き付けた

翠「雷撃っ！！」

カランカラン

牛「なぜ止めるんだ

リクオ、翠雨」

牛鬼が腹に突きつけると同時に雷撃を放ち、手から刀を飛ばした

リクオは刀の刀身を折った

牛「何故、

死なせてくれない

私には謀反を企てた責任がある

牛頭や馬頭に合わせる顔がない」

リ「てめえの気持ちは分からなくはないぜ

どんな答えが俺からでようか、アンタは死を選ぶだろ

らしい心意気だな

だが、こんなことで死ぬことはないぜ」

翠「フフ、確かにこんなことで死ぬことはないね

おじさん、おじさんは組のことを思ってこんな事をしたんでしょ？

なら、死ぬ事はないよ」

ト「こんなことって!!」

大問題ですよ!!」

リ「ここでのことを、

お前等が報告しなけりゃいいだけだろ？

牛鬼、さっきの答えは、

人の時の俺に聞くんだな

それでも気に入らなかったら

俺を斬ればいいさ

ほら、帰っぞ」

翠「分かったから、その傷を手当てしてから帰ろっよりクオ。」

リ「ああ分かったら…」

そして、その場を後にした

言うまでもなく、本家に戻ったところ鴉天狗にこっぴどくお説教をされた2人…

牛鬼の謀反に関しては、すべてリクオが判断しろとぬらりひょんが言った

そして、リクオは無罪と判決を牛鬼に下した

判決を下した翌日の縁側に翠雨とリクオは2人でお茶をしていた

ズズズー

翠「はあ、お茶美味しいね…」

ズズズー

リ「うん、美味しいね」

ほのぼのとした空気が流れていた

翠「牛鬼おじさんはこの組を凄く愛しているんだね。だから、今回こんなことを考えたんだろうね」

リ「そうだね。」

僕はこの組の三代目になって、組を支えていくよ。

翠雨、僕が三代目になるとき僕の隣に居てくれないかな？

隣でこの組を見守っていてくれないかな？」

翠「……………うん！私で良ければ、リクオの隣にいるよ」

リ「ありがとう。」

改めて、これからもよろしくね翠雨。」

翠「こちらこそ、

よろしく」

そして、またしばらく  
のほほんとして居ていたが廊下の先から影がふたつ現れた

翠「誰が来たかと思えば…

なんだ…

牛頭丸と馬頭丸か…」

ご「なんだとは失礼だな」

翠「ふんっ！相手の力量も分からないくらいの童ワッパがよく言っわ」

鼻で笑い言った

リ（翠雨がかなり毛嫌いしているよ…まあ、あんなこと言われたら

仕方がないか…)

「……………」

牛頭丸も前回の事を反省しているのか、下を向きながら黙っていた

翠「はん、まあいいや。

で、何しにきたの?」

馬「し、しばらく、本家お預かりになったんだ。

だから、よろしくね」

翠「そうなんだ。

よろしく。」

「「よろしく…」」

挨拶を交わした牛頭丸と馬頭丸は牛鬼の元へ行った

リ「そっか、本家お預かりなんだ…」

あ、そう言えば…

もうそろそろ総会がまたあるね。」

翠「そっか、もうそんな時期か…」

なら、父様と母様も来るんだ。

あつ！狒々様にも会えるじゃん！！

やったね！！」

リ「？狒々と知り合いなの？」

翠「うん、家族単位で仲が良かったんだ」

リ「そうなんだ」

翠「うん、早く狒々様に逢いたいな

楽しみだな」

これからのことを考え顔が綻んでいる翠雨

そんな翠雨を優しい表情で見ているリクオがいた

だが、この笑顔がもうすぐ怒りの表情になることは、

このとき誰も知らない…

く拾く（後書き）

牛鬼編はこれで終わりです。

次は、四国編ですが内容が少しくなりそうなので、一話分が多くなる場合は更新が遅くなります

よろしくお願いします

ゝ巻拾巻ゝ（前書き）

四国編に入る前の小話です。

く壺拾きく

牛鬼の一件からしばらくしたある日の朝

リクオは盃に酒を並々と注いであることをしていた

リ「明鏡止水・桜!」

が、

うまく行くはずもなく…

ドバツ

バツシャーン

リクオは池に落ちた

翠「あははは

ちよつと何してるのリクオ？」

翠雨は腹を抱えながら笑っていた

リ「わ、笑わないでよ翠雨／＼／」

恥ずかしくなったリクオは下を向いてしまった

翠「あゝごめんごめん

で、何やってたの？」

リクオに手を差し伸べ、池から引っ張り上げた

リ「練習してたんだ…

僕はこれから、三代目を継ぐから…

そのための練習だよ。

僕は翠雨ほど強くないからね」

翠「そっか

なら、今度その練習付き合っ  
てあげるよ。

それより、速くしないと遅刻するよ

じゃ、お先に〜」

翠雨はにこやかに笑い  
去っていった

リ「あ、待ってよ翠雨!」

―学校―

翠「お疲れリクオ」

リ「ハア、ハア…

間に合った…」

ゼイゼイと呼吸をする

カ「ちょっとリクオ君大丈夫？」

心配そうに伺った

翠「おはようカナ

はい、これ。

お誕生日おめでとう」

翠雨が差し出したのは、薄く丸いの半透明な板がついたネックレスだった

カ「うわああ、綺麗!!」

ありがとう翠雨!!

これ何かの殻？」

翠「まあ、そんなとこだね。

それ、お守りだから身に付けておいてね」

そんなことを話していると

清「やあやあ奴良君、龍君、家長君。

はい、これは僕からのささやかな贈り物だよ」

清継が差し出した箱の中にあつたのは不気味な人形が入っていた

清以外「……………」

清「いいだろう？あの有名なブランドに作らせたんだ」

ブランドに作らせたらしいが決して可愛いや綺麗とは言えない代物だった

カ「あ、ありがとう清継君」

清「では、また放課後にね」

とだけ言い残し自分のクラスに戻っていった

そして、授業が始まった

リ「(コソコソ　ねえ翠雨。  
さつきカナちゃんにあげたやつって…」

翠「(コソコソ　お察しの通り、あれは私の鱗だよ  
やっぱり分かった?」

リ「(コソコソ　うん」

翠「(コソコソ　そうだリクオ、今日カナには気を配っていた方が  
良いかも」

リ「(コソコソ　なんで?」

翠「(コソコソ　うーん…勘かな?兎に角気を付けた方がいいからね」

リ」「コソコソ わかった」

あつと言つ間に放課後

カ「みんなゴメンね  
先帰るね」

と、カナは急いだよう<sup>で</sup>教室を出ていった

翠（一人で帰つて平気かな？

なんかあれば、鱗が教えてくれるからいいか…）

リ」「翠雨どうかしたの？」

翠「いや、なんでもない  
速く行こうか？」

そして2人は部活が行われているところへ向かった

部室にはすでにカナ以外が揃っていた

翠「今日カナ来ないってさ…」

巻「えー来ないの？」

お祝いしようと思ってたのに…」

鳥「残念…明日にでもやればいいんじゃない？」

巻「そうだね…」

島「そうっすよ、明日家長さんのお祝いすればいいッス」

清「なら、今日はお祝いの電話だけにしておこうか」

清以外

「???」

清「ハハ、これを使うのだよ」

清継が取り出したのはカナにあげたような不気味な人形だった

そして清継はなれた手つきで電話をかける

呼び出し音が響く中

翠（！！！！ カナっ！！）

急に翠雨の渡した鱗から知らせ？が入った

翠「ごめん、私トイレ行ってくるっ！！」

翠雨は慌てて部屋を出た

外はもう日暮れで校舎内に生徒の姿はない

それを確認すると翠雨は妖怪の姿に変化し、カナを探す

翠「どこにいるんだ？」

タッタッタ

在る場所にたどり着く

翠「ここにいるはず……」

そこは男子トイレだった

だが、人は居なかった

翠「……！カナッ！！」

居た

鏡の中に……

翠雨は鏡に触れ、鏡の向こう側に行った

カ「嫌、いや来ないで！」

カナの目の前には、

紫色の鏡の妖怪がいた

鏡「いつしよにあそぶ約束したじゃない

カナちゃんいつしよにあそぼーよ」

鏡の手がカナに伸びる

翠「行かせるかぁー！！」

バチン

雷刀で伸びてくる手を叩いた

鏡「いたい…」

翠「行くよ」

翠雨は鏡が怯んでいる隙にカナの腕を掴みその場から離れた

翠「…ここまでくれば大丈夫かな？」

カ「あ、あの！

月華さんですよね？」

翠「（あっそう言えば前に月華って名乗ったんだっけ？）

ええ、久しぶりね」

床に座り込み話をする

すると、急に当たりが眩しくなったと思ったら

先程の男子トイレに戻ってきていた

翠「ちっ、速く私の後ろに隠れて！」

翠雨は舌打ちをし雷刀を構えた

ズズズズズ

鏡からさっきの奴が現れた

鏡「おまえ、じゃま…」

じゃま許さない…」

鏡の妖怪が翠雨に襲いかかる

バチ

バチ

バチン

翠「くそっ！こんな狭いところだと、ろくに技も使えない……」

攻防戦が続いていると…

リ「カナちゃん!？」

鏡の向こう側、現実世界の方からリクオがこちら側にいる翠雨と力ナを発見した

翠（あつ、来た。遅いんだよ…）

バリン

鏡「なんでこっちが見えるんだ？」

鏡の妖怪は鏡を割った

翠「ああ、割っちゃったよ…」

翠雨は手にしていた雷刀を消し、カナを抱き上げ鏡の妖怪から距離を取った

ミシッ

すると、鏡の妖怪の上部の鏡に亀裂が走った

勿論、そんなことをするのは…  
リ「てめえ、なに人の島で勝手なことしてんだ？」

ピキ

ミシッ

ガッシャーン

リクオは持っていた刀で鏡を粉々に砕いた

翠「終わったね…  
怪れない？」

抱き上げていたカナを床に降ろした

カ「大丈夫です。

あ、ありがとうございます」

リ「きをつけな…

帰るぞS「月華だからね」

分かったよ…月華」

翠雨は見えないところでリクオのことを抓っていた

2人が去ろうとするのをカナが引き留めた

カ「あの！あなた方のことをもつと教えて下さい！！」

この発言に顔を見合わせるリクオと翠雨

リ「怖い思いしても知らないからな」

カ「えっ！？」

翠「大丈夫、そのときは私がなんとかしてあげるから

さて、移動するなら任せなさい」

翠雨は窓から飛び降りた

力「えっ！！！！！！」

リ「大丈夫だ。あいつは龍だから平気だ」

その言葉通り、窓の外には白い龍がいた

リ「よし、行くか…」

しっかりと俺に掴まってるよ」

リクオはカナを抱え、窓から飛び出し、翠雨の上に着地した

翠『これからどこ行くんだ若？』

リ「化け猫横町でいいだろ？」

翠『分かった、行くよ』

そして、翠雨は2人を乗せ化け猫横町へ向かった

―化け猫横町―

「いらっしやい

おや、じじいのとこの孫と龍のとこの当主さんじゃないかえ  
もうこんなところる歳になったのかい

まあいい…通りな

妖怪ならフリーだよ」

門番の婆さんと話中へはいる

ガヤガヤ

ガヤガヤ

リ「こつちだぜ」

カ「うわぁ、凄……」

沢山の妖怪たちが犇めいていた

翠「驚いた？」

翠雨はにっこりと笑いながら聞いた

カ「そりゃ、驚きますよ……」

翠「そりゃそうだね」

そして、ある一件の店に入る

「「いらつしやいませ!!」

妖怪お食事所、化猫屋へようこそ」「

リ「よう」

翠「こんにちは」

店「ささっ、中へどうぞ」

中へ通された3人

グビッグビッ

翠「プハアゝ美味しい

このカクテル最高だね」

店「お口にあって良かったです。

よろしければもう一杯如何です？」

翠「頂きます!!」

翠雨は店員からグラスを受け取った

リ「おい月華、お前それ何杯目だよ？」

翠「えっと…11杯目かな？」

リ「ハア…いくらお前でも飲み過ぎだろ

もう終わりだ」

リクオは翠雨の手からグラスを奪い取った

翠「ちえー分かったよ…」

翠雨は渋々で行った様子で諦めた

そして、呆然としているカナのもとへ行った

翠「どうカナ？私たちの世界は…」

カ「ちょっとイメージと違いました」

翠「そう…あ、そつだ折角だから遊ぼうか」

翠雨はひらめいたと言つように店員にお座敷遊びの準備をしてもら  
い、

みなでお座敷遊びを始めた

ある程度したところで翠雨は席を外し、リクオの所に向かった

翠「ああ、なんか疲れた…」

リ「そりゃ、あんなに酒飲めばなるだろ？」

と、そこへ

良「若！嬢さん！

来てくれたんですかい！！」

リ「うまくやってるみたいだな良太猫」

良「任しといて下さい

旧鼠がいなけりや、大丈夫ですから

それより、花札しませんか？」

リ「止めとくよ

良太猫は賭になると熱すぎるらしいからな」

良「誰ですかい。そんな事言う奴！！」

リクオは顎で翠雨を挿した

リ「こいつの親父だよ」

良「ああ、なるほど…」

そう、以前翠雨の父・雷牙は良太猫と賭をやってボロ負けをしたことがあった

しかも、その負けた額がハンパなく多かつたらしく、組の資金が底をつくほどだったらしい…

3人

「……………」

なぜか沈黙が続いた

耐えきれず翠雨が

翠「あああもう！！

湿っぱい話は終わり！！

酒だ、酒をくれ」

店「はい、マタビ酒」

グビッグビ

グビッグビ

翠雨はやけ酒と言うように、

持ってこられたマタビ酒を瓶ごと飲んでいた

リ「おっおい、やけ酒は止めろ」

リクオの制止を無視し、飲み続ける翠雨

グビグビ

リ「もう止める」

ヒョイツ

翠雨から瓶を奪い、残っている酒を喉に流し込む

グビグビ

翠「あゝ私のマタタビ酒があゝ」

カタンッ

空となった瓶をテーブルに乗せた

リ「お前よくこの辛いの一気に飲めたな…」

リクオはマタタビ酒が相当辛かったらしく、手でパタパタと扇いでいた

翠「えー辛いかな？」

私にはちょうど良い感じの辛さなんだけども…

父様は、もっと辛い奴飲んでいるけど」

良「嬢さんはかなりの酒豪でっせ、以前ご家族でいらしゃった時は  
マタタビ酒の瓶を5本空にしましたから…」

リ「お前どんだけ酒飲みなんだ…」

リクオはため息をつき、少し呆れたような表情になった

リ「…さて、そろそろ帰るぜ、あちらさんは疲れて寝たようだ…」

リクオが見つめた先には、熟睡中のカナがいた

翠「そうだね。帰ろうか」

翠雨は眠っている力ナを抱え上げた

リ「翠雨、俺が持つからまた頼むよ」

翠「あーそっか、じゃあ頼むよ」

翠雨は背中にいる力ナをリクオに託し、龍へ変化した

翠『はい、乗って』

リクオは背中に乗った

乗ったのを確認すると飛び上がった

翠『マタタビ酒、また飲みたいなあ』

リ「そんなに気に入ったのか？」

翠「うん、気に入ったよ」

あ、そういえば、カナの家ってどっち？」

リ「確か…あっちだ」

翠「了解」

言われた方角に行くと目的地が見えてきた

寝ているカナを起こし、自宅に帰した

そして、今はリクオだけを乗せ帰宅中

翠『そういえば…なんでカナの家知ってたの?』

リ『ああ、幼なじみだからな』

翠『ふーん、幼なじみね…』

リ『なんだその反応? 妬いたか?』

翠『うーん、なんか複雑な感じ…』

私の知らないリクオを知ってるかもって思うとね…複雑。』

リ『そんなもんか?』

翠雨だけが知ってることだってあるだろ？」

翠『そうかな…？』

まあ確かにあるっちゃ、あるけど…』

リ「ほー、例えば？」

翠『例えば…、昼と夜とで性格が変わるとか？』

リ「俺に聞くんじゃないよ」

翠『だってねえ、』

今と昼とでは、雰囲気かなり違うんだよ』

リ「そりゃ、当たり前だろ。今の俺と昼の俺は、同一人物であって他人のようで、他人ではないと言う感じなんだからな」

翠『ふーん、なんか複雑だね。』

でも、リクオであることは変わらないでしょ？

それで良いと思うよ。

あつ、家が見えてきた』

そして、中庭に降りたった

ヒョイツと軽々背中からリクオが地に降りる

それを確認すると、翠雨の周りで風が舞い、鱗がパラパラと散っていく

鱗が消えると翠雨が立っていた

翠「ああ、疲れた…」

速く寝たい……」

クワアアと大きなあくびを一つし、自分の部屋へ向かう

翠「お休みリクオ……」

リ「ああ、お休み」

部屋へ行き、布団へ入るとすぐに睡魔が襲いかかってきた

そして、いろいろあった一日が終わった

オマケ

翠「あ”あ”ー頭痛い…」

リ「昨日、あんなに飲むからだよ。僕は止めたのに飲むから行けないんだよ」

翠「あんな少量で二日酔いとか…」

最近、飲んでなかった所為かな？」

リ「あれで少量とか…」

普段どんだけ飲んでいるの？」

リクオは呆れつつ聞いた

すると、

翠「昨日の5倍は飲むよ」

しれっとさも、何もなかったように言い切った

リ「……………」

絶句…

リクオは翠雨がかなりの酒豪であることを再度確認したのであった

ゝ巻拾々ゝ（後書き）

小話とか言っでしっかりしたものになってしまいました…

次こそ四国編に突入する予定です。

更新が亀で申し訳ありませんm（|（|（m

## ゝ巻拾貳ゝ（前書き）

お待たせしました

ついに四国編突入です♪

サブタイトルを付けるならゝ狒々編ゝと言った感じです

最近、恋へ発展させることが出来ず苦戦中です…作者のチッコい脳味噌からいいネタを搾り取りながら、頑張って更新しています。

暖かく見守って下さいm( \_ \_ )m

さあ、

四国編の始まりです

では、どうぞ

〽 壹拾貳 〽

今日は奴良組本家にて総会があるため朝から慌ただしかった

翠雨は今その準備の手伝いをしていた

翠「毛倡妓、味見してくれない？」

毛「はいはい…」

うん、いい感じ…

ここはこれでいいから、  
少し休憩してください

そのあとは、掃除の手伝いをお願いします」

翠「OK」

台所をあとにし、

庭の縁側に腰掛けた

翠「はあゝ疲れた…」

そういえば…

今日の総会には父様と母様も来るんだったよな？」

「ああ、もう来ているぞ」

翠「えっ!？」

振り向くと

翠「父様!？」

「私もいるわよ」

翠「母様!？」

父・雷牙のうしろからひょこつと母・翡翠が顔を覗かせた

雷「久しぶりだね、翠雨  
元気にしてたか？」

翠「はい、元気にはしてたけど

夕方に来るはずじゃ…?」

翡「フフ、ホントは夕方の予定だったけど、

せつかくだから、狒々様に顔を出しに行こうってなったのよ

ね♪そうでしょ雷牙？」

雷「ああ、久々にこつちに来たから

狒々様と一杯やりたくてね」

翠「そうだったんだ…

父様、お酒は程々にしてくださいよ？

酒癖悪いんですから…」

雷「翡翠と同じ事を言っただな

分かっているから」

龍組と狒々組は昔からの知り合いで

雷牙が組として立ち上げるときに色々とお世話になった

その縁で今では家族ぐるみのいい仲なのだ

雷「それじゃあ、私たちは狒々様のところに居るから、

翠雨も手が空いたら顔を出しに来なさい」

翠「うん、わかった」

翡「それじゃあ、またあとでね」

2人を玄関まで見送った

翠（狒々様が…久しぶりに逢いたいな…

そつえば、星影は元気にしてるかな？

（しょうえいのしょうの字がでなかったので星でいきますby作者）

つ「翠雨様あー、少しこつちを手伝ってはくありませんか？」

翠「分かった。今行くよつらら!!」

そして、つららの元で手伝いをした

翠「ふー、おわったああ

つらら、私これから狒々様のところに行ってくるね」

っ「？分かりました」

翠「それじゃあ、よろしくね」

翠雨は部屋からでて中庭に向かった

翠（丁度人がいないからいいか）

人が居ないことを確認し、龍へと姿を変えた

翠（よし、行くか）

飛び立とうとしたところ後ろから声をかけられた

ぬ「おっ翠雨、どっか行くのか？」

翠『そ、総大将!!』

ええ、これから狒々様のところへ行こうかと思って『

ぬ「そうかい、気を付けて行くんじゃぞ

あと、総会に間に合うように帰ってくるようにな」

翠『はい、

では、いってきます』

地面を強く蹴り上げ、  
空へ飛び立ち、狒々様がいる屋敷に向かった

翠（確か、この先だったよね？

あ、あつたあそこだ）

森の中に屋敷を発見し、その屋敷の中庭に着地した

ブワツと風が吹き

妖怪の姿に変わった

翠（到着）。

みんなはどこにいるかな？）

屋敷内に入り、皆を捜す

翠（可笑しいな…人の気配がしない…）

不思議に思いつつ廊下を歩く

廊下の角にさしかかると急に血の臭いが漂ってきた

翠「くっ！！」

ダッダッダ

ある部屋の前まで来た

スパーン

翠「狒々様っ！！」

襖を開けるとそこにいたのは、  
虫の息をしていた狒々とそれにトドメを刺そうとしていた  
黒いスーツを着た男が居た

翠「狒々様から離れろ！！

雷撃っ！！」

バチンッ

「おっと、危ないですね」

スルリとかわした

翠「狒々様っ！！狒々様！！

しっかりしてください」

狒々の元に駆けよった翠雨

狒「…翠雨か…ワ、ワシより雷牙たちを…」

狒々が指さした方には、

赤い血溜まりに倒れている雷牙と翡翠がいた

翠「父様っ！！母様っ！！」

狒々を壁まで連れて行き、壁にもたれかけさせ

2人の元に向かった

翠「父様！！母様！！」

2人も狒々同様にかんりの重傷だった

「クハハ、感動の両親の再会か…それがこんな無惨な姿だとはね…」

翠雨はただ無言のまま

腕にあつた刺青の龍をすべて腕から出し、  
実体を持たせた

翠「……父様と母様と狒々様の傷の手当てをしてきて」

現れた龍は全部で9匹ほど

それがバラけて三人の手当に行つた

「凄いですね、玉章様がみたら喜びそうだ」

翠「……貴様がやったのか?……」

「はい?」

翠「……………貴様がみんなをやったのかと聞いているんだ!!」

今までにないくらいの怒りによって、翠雨の体から電気がパチパチと火花を見せた

「やったと言えはどうします?」

翠「貴様をあの世へ送ってやる!!」

ブワッ

風が吹き

瞬時に龍の姿になった

「なるほど…」

あなたが近頃、奴良組に来たっていう子でしたか…」

翠【そんなことどうでもいい。

貴様は私がかみ殺してやる】

今まで翠雨は龍の時

人と話すときは話す相手の頭に直接話しかけていたが

今は、口からちゃんと声をだしている

その声は普段の翠雨からは想像もできないくらい低く勇ましいと言  
う感じの声だった

「クハハ、私をかみ殺すね…出来ますかな？」

翠【やってみせるさ…

雷撃波！】

体の鱗に電撃を蓄え、  
貯まると体中から電撃波が放たれた

手当をしている三人には当たらないように微調整がしてある

バチバチ

バチン

「私には効きませんよ

次はこちらが行きます

怪異・八陣風壁

私の風壁に巻き込まれ

塵になりな」

ゴオオオ

すさまじい風が翠雨に襲いかかる

翠【くっ！！】

体の至る所に傷が出来る

そんな傷など気にしないで敵の懐に入る

そして、長い胴体で動きを封じた

翠【水浄壁！！】

すると翠雨の周りに水の壁が現れた

その水の壁により、風からの攻撃を防いでいる

「こんなことしても、無駄ですよ」

翠【それはどうかな】

翠雨の拘束から逃れ、

水の壁を通り抜けようとそれに触れた瞬間

ジュワァァァ

「うわあああ！！」

触れた所から凄じ勢いで腐食していき、

水から離れてもどんどん腐食していった

「くそっ！！」

ズバッ

男は自分の腕を切り落とした

翠【的確な判断でいいと思うよ】

切り落とされた腕は、  
灰となっていた

翠【もう少し遅れていたら、肩から切り落とすはめになってたね】

「なんだこの水は？」

翠【金生水って知ってる？

純水すぎて、何でも腐食してしまう水なんだけど

この水は、それを遙かに越えるくらいの純水なんだ】

「そんな水が有るわけない」

翠【ホントは存在しない

けど、

これは私が作り出した水  
有っても不思議ではない】

翠雨の纏う空気がより一層ピリピリとしたものになった

翠【さあ、貴様は私の逆鱗に触れてしまった…

死ぬ覚悟は出来ているんでしょうね！】

一気に妖気が発せられ、瞳の色が青から赤に変わった

瞳から普段の輝きが消えていた

翠【ギヤアアアアア！！】

凄まじい咆哮が放たれた

それと同時に、敵に突っ込んでいった

ガブリッ

バッキッ

「うわああああ!!!!」

男が残っていたほうの腕に噛み付いた

「くそっ!」

男は身を振り、翠雨の牙から逃れ後方へ下がり

「喰らえ!!」

男が腕を鞭のようにしなると、

その動きに合わせて、毒を含んだ風が放たれた

シュンッ

シュンッ

シュンッ

いくつもの風が放たれた

ザシュッ

ザシュッ

ザシュッ

放たれた風によっていくつも傷ができる

だが、翠雨はそんな傷など気にしないで

男に迫る

翠【ギヤヤアアアアアア！！！】

また腕に噛み付く

カブリッ

バギッ

ブチリッ

「うわあああああ！！！！！！」

ついに、翠雨が残っていた男の腕を噛み切り離した

ポトッ

噛み切り離れた腕を床へ落とすと、

腕は霧となって消えた

翠【ギヤアアア】

次に翠雨は男の首筋に噛み付いた

「うわあああ！！」

グシャ

ビシャッ

ポトン

簡単に首が落ちた

そして、男は血を吹き上げながら倒れた

当然のごとく翠雨の真っ白の鱗にペンキをこぼしたように赤が広がる

そして、赤い瞳だった翠雨の瞳が普段の蒼に変わった

翠『狒々様！！父様！！母様！！』

三人とも一刻を争うほどの重傷だった

翠雨は器用に三人を自分の背中に乗せた

翠『本家に戻らなくちゃ！今日はゼンさんが居るはずだ！！』

翠雨は三人を乗せたまま本家へと飛び立った

飛んでいる途中

翠雨の動きがだんだんと鈍くなっていった

翠（…くそ…あの男の攻撃の所為か…）

ふらふらしながらも本家を目指す

翠（見えた…）

意識も朦朧となり始めていた

そんな中なんとか中庭に降りた

いや、降りたと言うより軽く落ちたに近かった

ドンッ！！

大きな音が響いた

自分の池のすぐ近くで大きな音がしたため、すぐに河童が様子を見

に行く

河「！！！！」

河童が見た者は、

深手を負った狒々、雷牙、翡翠。

それと龍の姿で真つ赤に染まっている翠雨がいた

河「た、大変だー！！」

誰か来てくれ！！

狒々様がやられたぞ！！！！

速くゼン様を連れてきてくれ！！」

河童の叫びにより屋敷内に居る者全ての視線が向く

全「「「！！！！」」」

あの姿を見て、全員固まった

そんな固まった者たちに一喝

ぬ「なにをしておるんじゃ！！

速く手当をせんか！！」

「「は、はい！！」」

そして、わらわらと本家の妖怪たちが手当にかかる

ぜ「なにやってる！！速く三人を中に運ぶんだ！！

翠雨はそのままにしていって血を流しとけ！…」

まあ、当然のごとくゼンが指揮をとる

慌ただしい中、ぬらりひょんが翠雨の元に寄った

ぬ「翠雨、一体なにがあつたんじゃ？

お前ほどの奴が傷を負うなんてな…」

頭を撫でながら優しい声で聞いた

翠雨は朦朧とする意識の中、口を開いた

翠【…総大将…

私が行ったら、屋敷の妖怪たちが皆殺しにされていて…

狒々様が虫の息に近く…

父様と母様が倒れていました…

やったのは…風を操る黒いスーツを着た男…

あれは恐らく…

四国妖怪…

私、頭にきてそいつは仕留めました…

情けない話、

そこで、こんな傷を受けました…

そして、恐らく四国妖怪が関東に今来ています。

奴らはこの奴良組を乗っ取る気です…。】

ぬ「そうか…

もう休みなさい

あとはやっておくから」

翠【はい…】

翠雨の周りに風が吹いた

翠雨の姿が妖怪の者に変わった

つ「翠雨様！！大丈夫ですか？」

つららが駆け寄り、肩を担ぐ

翠「…つららか…」

つ「はい。大丈夫ですか？」

翠「体が麻痺してる…  
あと…意識も朦朧としてる。」

つ「すぐにゼン様をお呼びします！」

翠「いや、いい！」

ゼンさんには他の人を診て貰って…

私は後でいいから…」

つ「…分かりました。

お部屋に行きましょつか」

翠「嗚呼…」

翠雨はつらの肩を借り、自分の部屋に向かった

部屋に着いた翠雨は、  
つららに手伝ってもらい服を着替え布団に入った

翠「つららありがとね」

つ「いいえ、大したことありません。

それより、速く寝て傷を治して下さいね。」

翠「うん…分かった」

つ「それでは失礼します」

つらは部屋を出ていった

と、それと入れ替わるようにリクオが入ってきた

リ「よお翠雨大丈夫なのか？」

翠「リクオか…」

万全と言うわけではないが、大丈夫だ…。」

リクオは布団に入っている翠雨の横に腰を下ろした

リ「そうか…ならよかった。

で、翠雨。

狒々を殺った奴はどんな奴なんだ？」

翠「ああ、一樣総大将には言ったが…

奴は恐らく四国妖怪…

四国妖怪が今、関東に来ている。

奴らは、この関東を乗っ取る気でいるみたいだ」

リ「四国妖怪ね…

まあ、何が来ようが関東はこの奴良組のもんだからたたっ斬ってやる…」

翠「頼もしいな…」

と、そこへ

長身でパーカーの上に着物を羽織っている人が襖の所に立っていた

「翠雨…」

翠「星影か…狒々様はどう?。」

現れたのは狒々の息子、星影だった

星「意識は戻った…」

親父が翠雨に逢いたがっている。  
行けるか？」

翠「分かった行くよ。」

リクオ手貸して」

翠雨はまだ麻痺が残っているためリクオの手を借り、星影と共に狒々々の元へ行った

星「親父、連れてきたぜ」

三人はとある部屋に入った

そこには、包帯が至る所に巻かれ横になっている狒々が居た

普段している面は取られ、頭の横に置いてあった

狒「着たか翠雨…それにリクオもか…」

三人は布団の横に腰を下ろした

翠「…怪我の具合はどうですか？」

狒「そう長くは持たんだろうな…」

本当だったら、あの時でワシは死んでいたはずだ。翠雨、お前のおかげでみな顔を見て逝ける」

翠「そんな事言わないで下さい…私がもつと速く駆けつけていれば…」

狒「そう、自分を責めるな翠雨。これでよいのだ、これが定めなの

だからな。

星影、組を頼んだぞ」

星「ああ、分かっている。親父を超えるくらいになってやるからな」

狒「はっ、お前にワシを越えさせわせんよ。頑張るんぞ

リクオ、奴良組を頼むぞ」

リ「言われなくとも、やってやるよ」

狒「生意気な餓鬼になりよって…

翠雨、ワシはお前を孫の用に思っていた。

これから、雷牙に代わり組を引っ張るのだぞ。

あと、これをお前にくれてやるっ」

狒々が出したのは、懐刀だった

翠「いいのですか？私が貰って…」

狒「よいのだ、お前に使って欲しいのだ。

使ってくれ」

翠「分かりました…ありがたく受け取り使います」

狒「ああ、ぜひ使ってくれ…

ああ…お前の晴れ姿を見れないのが残念じゃな…翠雨はこれからきつと綺麗になるだろうに…

これから世は妖怪が住みにくくなってくるだろう。頑張って生きるのだぞ」

狒々は三人に見守られながら、この世を去った

星「親父…」

翠「これから頑張って狒々様に心配をかけぬようにします…」

翠雨は貰った懐刀を大事に抱えたあと、腰に差した

翠（四国妖怪め…よくもやってくれたな…関東を乗っ取るうなんて考えて…狸は山に籠もっていればいいものを…許さん…この組は私が絶対に守ってやる。狒々様の仇を取ってやるからな…覚悟してお

けよ、四国の古狸！

狒々様、私はまた闇に染まるかもしれません…どうか、見守って  
て下さい）

翠雨はこれから始まる妖怪戦争？への決意を固めるのであった

く 壱拾貳く (後書き)

長かった…

書いていたら、どんどん話が膨らんでしまいました

次は、七人同行のメンバーを出せたら良いと思っています。

では、また次話お会いしましょうboyにゃんこ

く 壱拾参く (前書き)

なんかやっとな自由な時間が増えてきたので、  
これからスピードアップしていきたいです。

では、どうぞ

く 壱拾参く

狒々がこの世を去ってから、数日があった

奴良組内では、幹部殺しでないか？といわれたため、幹部達に護衛が着くことになった

そのため、本家内はどこか緊張した空気が漂っていた

翠雨はと言つと...

つ「翠雨様の護衛は私が着きます。」

翠「そんなの要らないよ。私に人員を回さないで他の人に回すか、  
本家の警備に回って」

と言って、龍組の当主で在りながら護衛をいらないと言ったのだった

翠「それじゃあ、行ってきます。

リク才速くしないと置いてくよ」

リ「待ってよ」

行ってきます!!」

こんな感じで学校へ向かった

―学校の放課後―

翠雨たちは、部活動（清十字怪奇探偵団）をしている

カタカタ

翠「何その地図？」

翠雨がのぞき込んだ画面には日本地図があり、所々マークがしてあった

清「ああ、これは化原先生と合同で作った妖怪の出没度と妖怪伝説があるところをまとめたものだよ」

リ「へえー日本全国にあるね。」

カ「ホントだね。」

あ、西の方に沢山印があるよ」

翠「京都が多いね。あとは…四国だね」

カア  
カア

そとでカラスが鳴いていた

清「もうこんな時間か…  
今日はこれで解散だ」

清繼の言葉により、家路につく

力「あああ、やっと終わったあ」

リ「清繼くんの話長かったからね。」

翠「よくあんな熱く語れるよね」

三人は並んで帰っていた

そんな三人を影から見守っている黒田坊、青田坊、首無、毛倡妓、河童、つららの姿があった

首「これで、今日の護衛は終了ですね。」

毛「ああ、疲れた…」

黒「気を抜いてはいかんぞ。何かあるか分からないのだから」

黒田坊の言っている側から

河「あーじいー、皿が乾いてきちゃったよ」

パタパタと扇いで風を送り涼んでいた

影で見守っているみんなの声が翠雨まで届いていた

翠（確かに河童にはこの暑さは辛いかな…）

翠雨は前にいるカナに気付かれないように、後ろへ下が

河童の方に手に向けた

すると、次第に河童の頭上に水の塊が現れだした

ある程度の大きさになったので、手をしたに返した

バsshアアン

頭上の水が下に落ち頭から水をかぶる

河「プハアアゝ気持ちいい」

突然河童が頭から水をかぶったため、その場にいる4人が驚いた表情をする

その様子を見て、翠雨はクスリと笑う

翠（あはは、あの顔…面白いや…）

その時、後ろから声がした

「キミがリクオ君だね？」

そして、そちらが翠雨さんだね」

翠（！？だれっ！！いつの間にいたの…気付かなかった）

翠雨はゆっくりと振り返り、リクオの隣へ移動する

目の前に現れたのは、高校生くらいの青年が二人

「聞く必要はなかったね…

こんなにも似ているからね。

僕とキミは…

彼女は僕らの先を行っているけどね

若く才能に溢れ、受け継いでいる。

だけど、キミははじめから全てを持っている

僕はこれから全てを掴むからね

まあ、見てて僕のほうがたくさん畏れを集めるから」

青年が翠雨に顔を近づけ、耳元で話した

「こんな所で逢えるとは思わなかったよ龍神さん

僕はキミが欲しい。

ねえ、僕の組に入らない？」

翠「残念だけど、私は今の組に魅力を感じたからいるの  
あなたの組に魅力を感じたら考えてもいいよ」

クスリ

青年は笑みを浮かべた

「魅力ね…」

すぐに僕の組に魅力を感じると思うよ

僕は四国八十八鬼夜行の組長・隠神刑部 玉章。

また、逢おうね翠雨。」

玉章は翠雨から離れた

玉章のうしろには、もう一人の青年がついて行った

玉「また、逢おうねリク才君、翠雨ちゃん」

玉章はリク才達に背を向け歩き出す

全「!!!!」

いつの間にか玉章の後ろに笠を被った6人の姿があった

翠（四国八十八鬼夜行…こいつ等が狒々様を…許さない…）

翠雨は拳を強く握っていた

翠雨は握った掌を開く、すると開いた手から刺青の龍が現れた

その龍は去っていく8人のうちの1人の背中にピッタリとくっついた

翠（これで奴らのねぐらが分かる…あとで潰しに行つてあげるから待ってな…）

翠雨は何事も無かったようにリクオと話をする

翠「（ヒソヒソ　リクオ、あれって明らかに宣戦布告だよね？」

リ「（ヒソヒソ　やっぱりそうだよね…帰ったら爺ちゃんに話さない」と

リクオと翠雨は急いで家路についた

―本家にて―

リ「じいちゃん!!どこいるの!?!」

翠「総大将―!!どこですか!?!」

玄関に入るや否や二人が叫んだ

鴉「リクオ様、翠雨様!?!どうしたのですか?」

慌てた様子で奥から鴉天狗が顔を出す

翠「奴らが動き出す!」

鴉「奴ら?」

リ翠「四国妖怪だよ」

鴉「!!?」

リ「だから、じいちゃんに知らせようと思って。で、じいちゃんはどこにいるの?」

鴉「それが…居ないのです!!どこにも!」

翠（くそっ、なんてことだ…）

鴉天狗は滝のように涙を流していた

鴉「きつと狒々様をやった奴らに…」

翠「狒々様をやった奴は私が始末したけど…」

翠雨は泣きじゃくる鴉天狗の肩をたたいた

鴉「その仲間の奴に…」

組の者も言っています」

鴉天狗の言葉でやっと周りに気を配った

庭では小妖怪たちが騒いでいた

「奴良組はおしまいじゃ〜」

「総大将おー!!」

「わしは引つ越すぞ」

「嫌やああ」

翠（妖怪が情けない…あれでも妖怪なのか!!!）

翠雨はわたたと騒ぎ回る姿を眺めていた

と、ここで翠雨の堪忍袋の緒が切れた

翠「妖怪が怯えてどうする！！それでも、お前達は妖怪か！！畏れられるはずのものが畏れるなんて…呆れてものも言えないな！！」

リクオ！！私はしばらく出かけてくる。

総大将が居ない間、組はお前が仕切るんだぞ！！」

翠雨は言いたいことを言うと、龍へと変化し空へと飛び立った

有無を言わせず去っていった翠雨をただただ見送る皆…

翠（まったく…妖怪が怯えるなんて…有り得ない）

翠雨は内心、愚痴りながら在る場所を目指した

在る場所とは、

そう、龍神を祀っているあの神社

翠雨は境内に降りたった

ブワァッと風が吹き、妖怪となる

翠（ああ、やっぱりここが落ち着くや…）

翠雨は社の段に腰を下ろした

しばらくそこでぼんやりしたあと、中の御堂に向かった

ギイー

翠（…汚っ！！）

至る所に埃が溜まっていた

翠「こんなに汚かったなんて…」

翠雨はがっくりと肩を落とした

翠「掃除しよ…」

翠雨はどこからか箒と雑巾、はたきを出し掃除を始めた

数十分後

翠「…おわったああ！…うん、綺麗になった」

翠雨は満足そうな表情を浮かべた

翠（よし、久々に瞑想でもしようかな）

翠雨は本尊と向かうように座った

呼吸を整え、精神を落ち着かせる

しばらく瞑想をしていると誰か御堂の中に入ってきた

ギィ

ギィ

床の木が軋む音が翠雨の真後ろで止まった

「その着物の袖旨そうだな…」

ぐいぐいと片袖が引っ張られる

翠「袖を貰う人物を間違えたな『袖モギ様』」

翠雨は引っ張られている方の手で袖モギの首をしっかり掴んだ

その手は、人の手でなく龍の鋭い爪が着いたで爪を立てて握っていた

袖モギは翠雨から只ならぬ殺気を感じ掴んでいた袖を離した

袖を離したことを確認した翠雨はゆっくりと袖モギと向かい合う

翠雨の眼の瞳孔が猫のように細くなっていた

翠「さて…ここへは何しにきたの袖モギ様？」

袖「こ、ここの土地神の畏れを奪いにきたのだ」

翠「ふーん、龍神様の畏れを…残念だけどここには龍神様はいない。代行ならいるけどね。この私がね」

ギュッ

首を絞める力を先程より強めた

袖「ぐえっ」

翠「ほら、私から奪ってみなさい。速くしないと首が体と離れちゃうよ」

袖「は、離してくれ！助けてくれ！…！」

翠「ふっ、妖怪が畏れるなんて…滑稽ね。

いいわ、離してあげる。でも、条件付きよ。私を玉章の元に連れてって」

袖「わ、わかった。その条件を飲むから離してくれ」

翠雨は掴んでいた手を離した

袖「ゲホゲホ」

チャキ

翠「ほら、離れたんだからさっさと連れてって」

翠雨は懷から刀を出して袖モギに突きつけた

その刀は先日狒々からもらい受けた刀だった

袖「わかった…ついてこい玉章様に合わせる」

袖モギは立ち上がりふらふらとした足取りで歩いていく

その後ろを付いていく翠雨

手はずっと刀の柄の上に添えてあった

翠（この刀で狒々様の仇を取ってやるからな…）

―とあるビル―

翠雨は袖モギにとあるビルへ連れてこられた

袖「玉章様、お客人を連れて参りました。」

ガチャッ

翠雨はある一室へ入る

玉「やあ、翠雨。キミから来てくれるなんて嬉しいよ。どう、僕の

組に入る気になった？」

翠「入るかどうかはまだだけど、興味が持てたから来たの」

玉「そう、でも興味を持ててもらえて良かったよ

袖モギ、ご苦労だったね仕事に戻って良いよ」

後ろに立っていた袖モギは仕事のため部屋を出ていった

翠「仕事って土地神から信仰を奪うこと？」

玉「ご名答、土地神の信仰は組の土台だからね。まずは、そこから崩しにかかる。

キミは止めに行かなくていいの？」

翠「その必要はないよ。だって、さっきうちの社に来たところを捕まえてここまで連れてきて貰ったんだ」

玉章は一瞬驚いた顔をしたがすぐに普段の顔に戻った

玉「へえーそうだったんだ。

で、キミはここへ何しにきたの？」

翠雨はにっこりと笑い

翠「奴良組が嫌になったから家出てきたんだ。だから、しばらく私をここに置いてくれない？」

翠（……………これでいいんだ。これで…これから楽しみだ…）

翠雨は内心ほくそ笑んだ

玉「クスクス、龍神様にはあの組は合わなかったみたいだね。

いいよ、いくらでも居て構わないよ。このビルの中も好きに歩き回っていいから」

翠「ありがとう、しばらく世話になるわ」

翠雨はほほえみ、頭を下げた

翠（フッフ…これから楽しみだ）

く 卅拾参く（後書き）

はい、なんか翠雨が奴良組裏切った感じになっちゃいました…

人には人の考えがありますからね。

では、また次回お会いしましょう

く巻拾四く（前書き）

玉章の元へ行った翠雨は何をしようとしているのでしょうか？

まあ、お決まりな感じの展開になるかもしれませんが…

では、どうぞ

〱 巻拾四 〱

翠雨が奴良組を出て行ってから2日がたった

翠雨は本家を出てから一度も帰っていない

そして、学校にも顔を出していなかった

リ「翠雨どこ行っちゃったんだろう？あれから帰ってきてないし…」

つ「きっと帰ってきますよ。何か考えがあるのでしょ」

リ「そうだね…それより清継君の手伝いやらないと…」

そつ、今は生徒総会で新しい生徒会長を決める為の声明発表？なのだ

会場である体育館にはたくさんの生徒で埋め尽くされていた

この体育館には、リクオの護衛でつらら、首無、河童、青田坊、黒田坊、毛倡妓がいた

リ「これで生徒全員かな？

ん！！？」

突然、体育館内に禍々しい妖気が現れた

「「「！！！！！！！！」」」

つ「妖気!!?」

首「今まで感じていなかったのに…」

黒「早いところ敵を捜しましょう」

手分けして妖気の手を探し出し始めたみんなの姿を眺める影が二つあった

白い着物に金色の髪が風で靡き、龍の面を付けた翠雨

その隣に制服姿の玉章

翠「なんで私をここへ連れてきたの？」

玉「なんとなくだよ…きっと面白くなる。」

翠「そう…。」

こんな会話をしていると体育館から悲鳴が響いた

「うわああああー!!」

玉「うまくやれたかな犬神は…」

翠（この声は…ああなるほどね…リクオも頭を使っようになったね。）

翠雨と玉章は体育館の中に侵入する

眼に飛び込んできたものは…

玉「犬神かなり憎んでいるな。あそこまでデカいのは初めてだよ」

犬神だった

首と体が離れており、普段の数十倍の大きさまででかくなっていた

翠（恨んだ分だけ力をつける…厄介だな）

犬神の離れていた頭が体とくっついた

犬「憎い憎い…」

犬神は大きな手で首無の姿をしたリクオを押しつぶした

翠（リクオ！！！！まだ昼の姿なのに……）

翠雨は目を瞑った。

面をしているから玉章は気付かない

ブシャアア

突然リクオを潰した手が血飛沫をあげた

犬「うわああああ！！！」

犬神は後ろへ下がりながら悲鳴をあげた

リ「日は閉ざされた…闇の幕開けだ…」

犬神の手の下から現れたのは夜の時のリクオだった

つ「リ、リクオ様！？」

翠（ふう、良かった…冷や冷やしたよ。でも何で昼なのに夜の姿なんだ？）

翠雨は遠目からその様子を見つめ一人考えていた

翠（ああ！…暗幕か！…それで闇になったから…なるほどなるほど…）

一人納得する翠雨

犬「なんだ…きさま誰だ？」

リ「あーあ、学校でこの姿になるつもりはなかったのに…」

さあ、とつとと舞台からお互い降りようじゃないか？」

そついうとリクオは犬神に飛びかかった

ダンッ

スパッ

軽々と背に飛び乗り、切りかかる

が、

ツルッ

滑ってしまった

それを逃さず筈もなく犬神は長いしっぽでリクオを床にたたき落とした

ガンッ

リ「…やるじゃねえか」

リクオはたたき落とされたとき頭を切ったらしく血が額を流れた

リクオは血を拭い立ち上がった

すると、リクオから禍々しい気が漂った

ゾクゾク

犬（なんだあいつ！？急に雰囲気が変わった…）  
「うおおお！！」

犬神は気合いを入れてリクオに飛びかかるうとしたところ

清継が用意していたプロジェクターが始動した

清「出たな、妖怪！！」

学校での悪事はこの僕が許さん！

くらえ、よみおくりスノーダスト退マックス！！」

ピキピキ

清継のかけ声に合わせ、つららが犬神の動きを封じた

つ「リクオ様今です！」

リ「つらら、少しやりすぎだ」

確かに、つららが出した雪が館内に広がっていた

リクオはそれだけ言っていると犬神に切りかかった

犬「リクオオオオ!!」

ブシャアア

犬神はリクオに切られ倒れる

つ「リクオ様!大丈夫ですか?」

リ「大丈夫だが、まだくんじゃねえ」

リクオがつららを制すると倒れていた犬神が起き上がった

その姿は普段の人のものになっていた

犬「ゼエーハアー

まだだ!お前を殺してやる」

犬神がフラフラと立ち上がったら、犬神の頭の上を呪布？で顔を隠した女が現れ、照明を破壊した

翠（夜雀！？いつの間に着たんだ？）

証明が消され真っ暗闇となった

すると、今まで黙っていた玉章が

玉「さて、僕らも舞台に上がるのか？」

玉章は翠雨に手を引いて、舞台へと向かった

舞台へ行くと玉章は犬神の元へ行った

翠雨も何となくついて行く

犬「玉章！？」

玉「失敗したんだね…残念だ。」

キミは人を呪い強くなる

なのに、キミは恨む相手を畏れた」

ポンッ

玉章は犬神の両肩に手を置いた

ハラハラハラ

犬神は足先から葉っぱとなり、消えていく

犬「！?…た、玉章？」

玉「お前のような屑犬なんか僕の組には要らないよ」

翠（仲間を消すなんて…なんで奴なんだ！）

翠雨は面の下で顔を怒りで染めた

だが、面をしているため周りには気がつかない

ハラハラハラ

ついに、犬神は葉となり消えた

リ「てめえ、何やってんだ？」

玉「久しぶりだね、奴良リクオ君…まさか君がそんな立派な姿だとはね…僕は君を見くびっていたよ。

今の君になら名乗るにふさわしい。」

玉章の手から木の葉が舞った

すると、玉章の姿が変わった

長い白髪に狸の面、歌舞伎役者が着るような着物姿だった

玉「僕は四国八十八鬼夜行が長、八百八狸の長を父に持つ、隠神刑部狸玉章。

君の畏れを奪う、そして君を僕の後ろに並ばせてやる」

リ「それはこっちのセリフだ」

玉「ふっ、ではまた会おう。」

玉章は風となり姿を消した

翠（あんな長々と自己紹介するか普通？）

翠雨は玉章の芝居に呆れていた翠雨は玉章が去った後、リクオへ歩み寄った

リクオの前まで来ると翠雨は手をリクオの額に当てた

リ「なあ、なんで玉章なんかと一緒にいるんだ？」

翠「……………」

翠雨は何も言わずにリクオの傷を治す

そして、翠雨はみんなから顔が見えないように面をづらし、リクオの耳元で話した

翠「ゴメン急に居なくなつて…」。

玉章は何か隠してる。それを見つけるまでは私は帰らない。

そして、狒々様の仇を取ってくる。

星影を…頼んだよ」

翠雨は最後に微笑みリクオから離れ面を付け直すと、床から水柱が現れ翠雨を包んだ

水柱が消えるとそこに翠雨の姿はなかった

リ（翠雨…行っちゃったか…一人で組一つを崩せるか？

しかし玉章の奴は一体何を隠してんだ？これは探りを入れるか…）

リ「さあ、帰っぞ…」

リクオはそう言つと舞台から降りて闇に消えた

ゝ 壱拾四ゝ（後書き）

はい、お決まりな感じの「仇をとる」ってことになりました。

次からは本格的に翠雨の復讐が始まったり、始まらなかったり…。

では、また次回お会いしましょうm（ ）m

く 巻拾伍く（前書き）

翠雨は狒々の仇をとることが出来るのでしょうか？

なんか、前書き書くのが面倒になってきてしまった…。

では、どうぞ

く 壱拾伍く

―とあるビルの一室―

ブクブクと床から水が溢れ出す

段々とそれは人の形を成していく

翠「ああゝ疲れた…。」

現れたのは龍の面を着けている翠雨だった

玉「遅かったね翠雨。戻ってこないかと思ったよ」

翠「私はあの組に嫌気が挿したからここにいのよ、わざわざあんな組に戻る道理はないわ…」

リクオが戻ってこないか？って勧誘してきたから笑って蹴ってやったわ」

玉「ハハッ、君らしいね。そういう自分を貫くが僕は好きだよ」

翠「お世辞なんかいらないわ…

疲れたから部屋に戻るわ」

翠雨は面を取りながら、扉の方へ

扉の前まで来ると

翠「何かあつたら呼んでね」

そして、部屋から出ていった

廊下を歩く翠雨

翠（さて、玉章の隠し玉を探しますか）

翠雨は腕から刺青の龍を5頭出し、自分の妖力を極微量空气中に溶かし込んだ

そして、この妖力を使い以前七人同行のうちの一人にくっつけた龍とこの場にいる5頭に指示を出す

翠（このビル内に玉章の隠し玉が在るはずだ。それを探してきて）

ガウと一鳴きしたあと、散り散りになって探しに出た

それを見届けた後、翠雨は自分に与えられた部屋へ入る

翠「疲れた…」

ポフツとソファーに腰を下ろす

翠（玉章は一体何を隠しているんだろう？

仲間を消しても平気なあの余裕ぶり…それだけの力があるってことか…）

翠雨は1人納得すると、ソファーからベットへ移り身を投げる

翠「はあああ、考えても仕方がないし…寝よ。」

そして翠雨は眠りについた

が、外が騒がしくて寝付けなかった

ガヤガヤ

翠「…っゝゝ、あー五月蠅いな！！誰だよ！？私の安眠妨害する奴

！！そいつの喉笛が切つてやる！！」

翠雨は苛々しながら部屋を出る

そして、騒ぎの根元である吹き抜け部分へと行く

翠「……………」

翠雨は言葉が出なかった

つい先程まで誰もいなかった一階部分が妖怪で埋め尽くされていた

翠（四国の妖怪達か…クソ、こんなに早く集まるなんて…）

翠雨が吹き抜けから下を覗いていると、反対側から同じように玉章と七人同行のメンバーがいた

玉「よく集まってくれたね。ここから四国八十八鬼夜行の始まりだ」

「」「」うおおおお！！」「」

急に会場？が歓声を上げた

そんな騒がしい会場を一人見下ろす翠雨

翠（早く隠し玉を見つけないとな…ってあれっ！？あれって…）

翠雨が見つめる先に居たのは

「ポンポコ」

狸の毛皮を被っている牛頭丸と馬頭丸の姿があった

翠（…何やってんの？あれは何？趣味かなんか？）

翠雨が訝しげな目で見つめていると向こうも気づいたらしく顔をあげた

翠（あ！気づいた。ちょっと話をするか…）

翠雨は二人に來い來いと手招きをした

それに気づいた牛頭丸と馬頭丸は頷いた

翠雨は下から上がって来るであろう筈のエレベーターの前に来ていた

エレベーターの所にゴツい門番役の妖怪がいた

門「あん？何かようか？」

翠「ああ、ちよつと仲間が來たもんでね…（黒）」

門「ん？確かあんた奴良組のもんだろ？」

翠「そうだよ」

翠雨はニヤリと笑うと手に電氣を貯め、その手で門番の腹部を殴った

すると

バチンッ

門「うぐっ!？」

スタンガンのようになった手で門番を気絶させた

翠「ちよつと静かにしててね…（笑）」

門番を邪魔にならないように端に寄せると丁度エレベーターの扉が開いた

開いた先を見た翠雨は固まった

翠「……………」

エレベーター内に居たのは女装をしていた馬頭丸だった

馬「……………」

暫く黙ったまま見つめ合っていると

バシッ

馬「痛っ!？何すんのさ牛頭丸!!」

こ「何ぼさつとしてんだ!!あんたもいつまで固まってんだ」

天井から現れた牛頭丸は馬頭丸の頭を叩いて翠雨に一喝

翠「はっ！？しまった…。  
2人が来てくれて丁度良かった。差し詰めリクオが送り込んで来た  
んでしょ？」

ご「俺たちはあんな三代目の下になんかつかねえよ。俺たちは牛鬼  
さまに言われてきたんだ」

翠「そ…まあ、どっちでもいいや。兎に角手伝って！玉章の隠し玉  
を見つけたから」

そう、実は牛頭丸と馬頭丸を待っていると放っていた龍から知らせ  
が入ったのだった

翠「こつち、かなりの禍々しい妖気があるから気を付けてね」

翠雨はスタスタと進む

そして、とある部屋の前で止まる

翠「ここだ…さあ、戻っておいで」

翠雨は部屋の前で止まり手を出すと部屋の中から龍が出てきて翠雨  
の腕に戻った

「ご馬」「!!!!!!」

後ろで今の現象を驚いていた牛頭丸と馬頭丸

そんなのを気にせず扉に手をかけた

ガチャッ

翠「あつた…あれだ。」

部屋の中にあつたのは刀だった。それもかなり古い物のようで刃こぼれが所々あつた

「ご」なんだあれ？」

翠「あれは恐らくM「魔王の小槌だよ」た、玉章!？」

突然後ろに玉章たちが現れた

玉「やっぱり君は向こう側か…」

翠「言つとくけど私は奴良組とは関係ないから。これは私個人で動いていることだから勘違いしないでね」

玉「君が個人で動くようなことがあったのかい？」

玉章は怪しい笑みを浮かべて翠雨に尋ねた

翠「くっくっ！！分かっていてそんなことを言うんだな！！私は狒々様の仇を取りに来たんだ！！」

玉「ああ、あの老いぼれの爺さんか…」

翠「くっくっ！！！！」

今ので翠雨は怒りが爆発した

ダンッ

素早く床を蹴って鋭い龍の爪で玉章に迫る

が、

ガンッ

夜雀によって防がれる

翠「ちっ…」

すぐ後ろに下がり距離をとる

玉「さて、試しにこの刀使ってみようか」

いつの間にか玉章の手の中に魔王の小槌があった  
翠「なっ！？それを抜いちや駄目だ！！」

チャキツ

玉章は鞘から刀身を抜いた

抜いた瞬間禍々しい妖気が溢れ出す

玉「あははは！！これが力か…。」

玉章は高らかに笑い出した

そして、

ズバツ

ブシャアアア

近くにいた妖怪を切りつけた

玉「もつとだ…もつと血を浴びなくては…」

ズバツ

ズバツ

「うわあああ！！」

「玉、章…様…」

バタリ  
バタリ

玉章は仲間の妖怪達を次々に切り倒していく

ご「なっ何なんだ!!」

翠「やめろ!!それ以上刀に血を与えるな!!」

翠雨は素早く雷刀をだし玉章に切りかかる

ガキイイン

翠「早くその刀を鞘に戻すんだ!!」

玉「邪魔をしないでくれないかな翠雨？」

ガンッ

玉章は翠雨のあいている腹部に蹴りを入れた

翠「ガハッ」

バンッ

飛ばされ壁にぶつかる

スバッ

玉「ああ、そうだ。君らの骸を奴良組の前に置いといてやるつか？」

玉章は牛頭丸と馬頭丸に切っ先を向け、怪しく笑った

玉「ほらっ  
」

ズバ  
ズバ

ご馬「「うわあああ！！」」

2人は正面から切りつけられた

翠「！！！！牛頭丸！！馬頭丸！！くっそ……」

翠雨は蹴られた腹を押さえながら立ち上がった

玉章は再び切りつけようとしていた

翠「させるか！！雷撃！！」

翠雨の攻撃によって2打目は防げた

翠雨は玉章が怯んでいるのを逃さず、その隙に龍へ変化した

翠『牛頭丸、馬頭丸立てる？早く私に乗って！！』

翠雨は一端この場から離れようと考えていた

翠雨は2人の周りに体を置いた

なんとか牛頭丸は翠雨に跨ったが馬頭丸がかなり重傷のようであったりとしていた

翠『馬頭丸しつかりして！！』

仕方なく足で馬頭丸を掴んだ

翠『行くよっ！！』

準備を整え飛び立とうとした

が、玉章がそんなのを許すはずがなく  
玉『逃がすか！！』

玉章は馬頭丸を掴んでいる翠雨の足に切りかかろうとした

翠雨は馬頭丸を守るために咄嗟に尻尾で防いだ  
ズバツ

翠『うわああああ!!』

ポトツ

何かが床に落ちた

翠『ハアハアハア…』

それは、尻尾だった…

咄嗟に防いだ尻尾が切り落とされたのだ

切られた断面から血が溢れ出す

翠雨は痛みを堪え2人を乗せたままガラスをぶち破りビルから脱出した

玉『クフフ…最後に龍の血を浴びれた…』

玉章はまた怪しく笑った

その様子をただ黙って見ているしかなかった七人同行たちだった

く 巻拾伍く（後書き）

今更気づいたんですが、黒羽丸と黒田坊ってどっちも初めが『黒・くろ』から始まってた…。

セリフどう区別しよう？

いやあ、牛鬼と牛頭丸は、  
牛鬼を『牛』、牛頭丸を『こ』と言う感じに分けてはいるのですが、  
どうしましょ…

何かいい方法有りませんか？  
出来れば、頭文字は一文字で統一したいのですが、なにかいい案が  
有りましたらコメント下さい。よろしく願いますm（　　）m

では、また次回お会いしましょう

ゝ壱拾陸ゝ（前書き）

はい、今回は少し長いので最後がなんか変な切り方になっています。  
すみませんm（――）m

さあ、いよいよ妖怪大戦が開幕します！！

では、どうぞ！！

く 壱拾陸く

― 上空にて―

翠『ハアハア…』

翠雨は荒い呼吸をしており、血がポタポタと流れていた

ご「…おい大丈夫か？」

翠『大丈夫…それより、馬頭丸を背中に乗せて』

翠雨は痛みを堪えながら足で掴んでいる馬頭丸を牛頭丸の手の届く範囲を運ぶ

ご「よし、掴んだから離してくれ」

言われたとおりに手を離すと背中に重みが増した

翠『ありがとう…』

そして、本家を目指し飛んでいると

バサッバサッバサッ

見回りをしていた三羽鴉たちが翠雨たちに近づいてきた

黒「!!!? なっ何があつたのですか翠雨様?」

翠『黒羽丸か…早く背中 of 2 人の手当をしてやってくれ…』

さ「2 人のことより翠雨様自身尻尾が…」

翠『私のことは良いから早く 2 人を…』

ト「わ、わかった…」

渋々と言つた様子で牛頭丸と馬頭丸を抱き抱えた黒羽丸とトサカ丸

それを確認すると翠雨は急に力を失い真下に落ちていく

三羽「」「翠雨様!!!」

すぐさま手が空いているささ美があとを追う

翠雨は落ちている最中鱗がパラパラと散って妖怪の姿に変わっていた

ガシッ

なんとか地面に落ちる前に翠雨を止めることが出来た

さ「翠雨様！！しっかりしてください！！」

翠「大丈夫だから慌てないでささ美…。」

黒「どこが大丈夫なんですか！！貴女だってかなりの深手ですよ！！」

翠雨は今、背中に大きな太刀傷があり、深さもかなり深い傷だった

翠「こんな傷大したことないよ。ほら、早く本家へ行こう」

翠雨は青い顔で笑って見せた

三羽鴉たちは翠雨の意見を聞き入れ仕方なく本家へ向けて進み出した

バサバサバサバサバサ

―本家にて―

バサバサバサバサ

中庭に降り立った三羽鴉たち

そして、

スパーンと襖を一つ開け

黒「牛鬼様は居られるか！！あとゼン様を呼べ！！」

突然の三羽鴉の騒ぎで、妖怪達が騒ぎ出した

「おい、牛頭馬頭がやられて戻ってきたぞ」

「何やってきたんだ？」

「てか、消えた翠雨様も傷を負っているぞ」

「一体誰の指示で……」

「あれ、大丈夫か？」

牛「しっかりしろ！！牛頭！馬頭！」

ご「…すみません牛鬼様、しくじりました…」

牛「ああ、分かったよくやってくれた…今はしっかり休みなさい」

牛鬼は抱えていた牛頭丸を治療のため奥に運ぼうとしたら

ご「待つてください！！俺よりあいつの手当を先に…」

牛頭丸の指さす先にはまだささ美に負ぶさっている翠雨がいた

ご「あいつ、俺たちを庇って尻尾を切り落とされたんです…そのまま俺たち2人を乗せて本家の近くまで運んでくれたんです…だから…」

牛「分かった…」

先に翠雨様の手当をしてくれ!!」

「はい!!」

ささ美に連れられ治療のための部屋に入る

中には既に治療の準備を整えているゼンたちがいた

ゼ「おう、来たか。ここに寝かせてくれ」

ささ美は翠雨をうつ伏せに寝かせ傷が見えるようにした

ゼ「また随分とやられたなあ」

翠「このくらいなら、しばらくすれば傷は、塞がりますから大丈夫です…」

ゼン「は傷の具合を診て

ゼ「そうだな…おまえの治療力なら、三日もすれば完治するだろうな…」

だが、またかなりと貧血になっているから鉄分を多くとれよ」

翠「わかってますって…」

ゼンは消毒をし、手早く包帯を巻いた

ゼ「よし、もう行っていていいぞ。

おまえ、もう歩けるだろ？」

翠「ハハ、よく分かりましたね。」

翠雨はゆっくりと壁を伝って立ち上がった

周りにいたゼン以外の者は驚きの表情を浮かべていた

翠「じゃ、お世話様でした」

翠雨はペコリと頭を下げ、壁を伝って出て行った  
ゼ「おう！しばらくは安静だからな」

ゼンは笑って翠雨を送り出した

ゼ「ほれっ、次だ次！！」

まだ驚いている子たちを急かして仕事にかかった

部屋を出た後、翠雨は中庭を目指した

翠（この妖気…リクオのだ…。ほかに沢山の本家妖怪の気も…）

翠「やっとリクオも自分の百鬼夜行を作り始めたんだ。」

なんとか、中庭までやってることが出来た翠雨

翠「リクオ…行くの？」

翠雨は百鬼夜行の主となった後ろ姿に声をかけた

リ「翠雨か…もう大丈夫なのか？」

翠「うん、大丈夫。」

それより、玉章はやっぱり隠し玉を持っていたよ」

リ「やはりな…」

翠「玉章はM「言わなくていい翠雨」何で？」

リクオによって遮られた

リ「相手の手の内を知った所で俺らが勝つのは決まってるんだから聞く必要はねえだろ？」

翠「リクオが知りたくないならいいや…

これから行くの？行くなら私も行く…」

リ「駄目だ！！そんな傷で行かせられるか！！」

翠「…言つと思つたよ。なら…リクオが私の背を守つてよ。

それが無理なら私はみんなが止めようが何をしようが付いていくからね」

リ「……………分かつた。」

翠「よっしゃっ！！」

リ「ただし、俺から離れるなよ」

翠「……………分かつたよ。よしっ、もう行くよね？」

翠雨は天に手を向け、雷撃を放った

数秒後、翠雨の目の前に雷が一つ落ちた

雷から現れたのは

金色の毛で覆われた狼のような獣・雷獣の煌がいた

煌「ああ翠雨！！傷は大丈夫なの！？ずっと上から見てたけど平気なの！？」

煌は現れるや否や翠雨に飛びつき抱きついた

翠「大丈夫だから離れて…お、重い！！」

煌「ゴメンゴメン…そんなに重かった？」

翠「重いよ…前より遥かに大きくなってるんだから…」

煌「そうなのか？私は自覚がないが…」

翠「そりゃ、本人だから分からないだろうけど初めより断然大きくなったよ。」

って、それより!!

私を背中に乗せてくれない？」

煌「ああ、お安いご用だよ。」

翠雨は煌に跨った

翠「はい、早速いこう!!」

リ「……あ、ああ。よし、行くぜ!!」

やっとのことで出発した

―とある道路上―

二つの妖怪勢力がいがみ合っていた

玉「やはり…僕らは似ているね。おそれをぶつけ合おうじゃないか  
…百鬼夜行大戦の始まりだ…」

一触即発のピリピリとした空気が漂う

リクオの隣で煌に跨っている翠雨がボソリと話す

翠「そうだ、リクオ。」

一様注意を言っておくよ1 玉章の横にいる夜雀には気を付けること

2 玉章の刀に気を付けること

最後、三つ目が一番重要だからね

3 大将が先陣を切らないこと」

リ「そんなん関係ねえよ」

リクオは翠雨に顔を向けニカッと笑って一歩踏み出した

「「「！！！！！！」」」

今さっき言った忠告を無視して歩き出したリクオを見て、奴良組側は呆然としていた

翠「えっ！？ちょっと！！言った側から先陣切らないでよ！！」

煌「！！追うよ」

煌「了解！！」

翠雨たちは、先陣を切って随分前にいるリクオを追った

そして、リクオが先陣を切ったことによって妖怪大戦の火蓋が切つて落とされた

「リクオ様に続けえー！！」

「うおおおお！！」

リクオを追う翠雨たちの前に一人の妖怪が立ちはだかる

手「こつから先はこの手洗い鬼様が相手をしてやる！！」

翠「ちよつと邪魔しないで。水流弾！！」

翠雨はイラついた様子で手から高圧の水を放った

手「ぐはっ！！」

巨体が簡単に吹き飛んだそして、丁度青田坊の目の前に落ちた

翠「青田坊ー！！そいつよろしく」

翠雨は二カッと笑いながら、リクオを追った

当の青田坊は「えっ!？」と言うように目の前に落ちてきた手洗い鬼をただ見つめていた

手洗い鬼を飛ばした後、翠雨はリクオまであと少しとなっていた

が、突然マンホールが外れ水が溢れてきた

ドバアアア

翠「今度は何？」

現れたのは

崖「ケケケ…水さえあればリクオなんて一捻りよ。このG「あつそ…邪魔、雷撃!!」えっ!?!うわああ!!」

現れて数秒で崖涯小僧が倒れた

針「崖涯小僧!!よくもやってくれたな!」

今度は少し離れた所にいた針女が翠雨の目の前に現れた

針「次は私が相手だよ」

翠「ああもう！！じれったいな！煌、もういいや。あとは自分で行くよ。好きにふらついていていいからね。」

翠雨は煌から降りた

煌「わかったよ。無理はしちゃ駄目だからね？」

翠「わかっているよ、大丈夫だから。」

翠雨は煌の頭を一撫でして針女と向かい合った

翠「針女元気にしてた？」

針「翠雨… あんたはどっち側なんだい？」

あんたは奴良組に嫌気がさしてうちに来たんじゃないのか？なんでそっちに居るんだい？」

翠「私はただ狒々様の仇をとるためにそっちに行っただ。まあ、私の作戦は失敗に終わったんだけどね…。」

さあ、そこをどいて針女。私はこれから玉章の首を取るから…邪魔

をするなら針女…あんたの首も取ることになる。出来れば私はそう  
したくない…。だから、其処をどいて針女。」

翠雨から凄まじい殺気が放たれ、手には雷刀が握られていた

しばらく、どちらも動かないでいると

ゴオオオつと火柱があがった

針「玉章様!？」

翠「リクオ!!なんで大将同士がやってんの…」

翠雨は呆れたように肩をすくめた

翠「針女、悪いけど先に行かせてもらうよ。雷衣!!」

電気を体に纏い、素早さがだんと上がった

その状態で翠雨は一気に針女に迫る

ダンッ

そして、雷刀で斬る  
スパッ

バチバチッ

針「うわああ」

バチバチと音を立て倒れた

どうやら、体が麻痺しているだけのようだ

翠「しばらくそこで大人しくしててね針女。」

ダンッ

翠雨はまた地面を蹴って一瞬にしてリクオの元まで行った

翠「リクオ！！ちょっと何やってるの！？なんで大将同士がやり合ってるの！？」

リ「おう、翠雨か…。」

翠「おう、翠雨か…じゃないよ！！何やっているの！？」

翠雨とリクオの話を遮るように玉章が話し出す

玉「おや、翠雨じゃないか？君はこんなところで何をしているんだい（ニヤ）」

玉章は嘲るように言った

翠雨はギロリというように玉章を睨みつけた

翠「玉章…あんた分かって言っているんでしょ？」

私はあんたの首を取るためにここにいる」

翠雨は一段と殺気立って雷刀を出した

翠「玉章、あんたの首頂戴いたします!!」  
ダンッ

雷刀を構え、地を蹴り玉章との間合いを詰める

バシンッ  
バチバチ  
激しく火花が散った

翠「玉章、貴様は絶対に私の手であの世に送ってやる!!」

ギチギチと翠雨が玉章を押していく

玉「フフツ、君に僕は殺せないよ。君の相手は僕じゃなくて彼女で十分だ…夜雀!!」

どこからか、夜雀が現れ玉章と翠雨の間に割って入ってきた

翠雨は舌打ちをし、玉章が距離を置く

夜雀はそんな翠雨を逃すはずがなく、黒い羽をまき散らしながら翠雨に迫る

翠「つち！リクオ！！その羽に触れるなよ！！」

玉「もう遅い…」

翠「何？」

翠雨を追っていた夜雀はいつの間にかリクオの目の前にいた

翠「リクオ！！」

リクオは夜雀の羽に触れてしまい視界が閉ざされ闇の世界になってしまった

翠「玉章、貴様！！！」

玉「やったのは僕じゃないから…張本人は後ろだよ」

翠「！？ハッ！！！」

つい振り向いてしまった翠雨  
しまったと顔を背けたが時既に遅し、

翠（光が…これが夜雀の力か…厄介だな…）

翠雨の視界から光がなくなり、闇となった

玉「それで勝てるかな翠雨？」

翠「アハハ、私を誰だと思っているの？いいわ、私独りで夜雀を倒してあげる。そのあと、あんたの首をもらうから」

翠雨はニヤリと笑った

翠「リクオは玉章の相手をしてね。私も終わったら手を貸すから」

リ「フンッおめえの手なんか借りずに蹴りをつけてやるよ」

翠「そう、頑張ってね。」

夜雀、行くわよ…雷衣!!」

翠雨はまた電気を体に纏った

これは、先ほどと少し違い電気が絶えずバチバチと外に放たれ続いていた

雷刀を握り直し、ダンッと地を蹴った

それも夜雀に向かって

夜「!!!!!!」

夜雀もまさか来るとは思っていなかったらしく目を見開いて驚きな

がら雷刀を受け止めた

翠「なぜ見えていないはずなのに自分の位置が分かったか不思議に思っているんでしょう？」

バチバチと時折火花が散った

翠「教えてあげる…あなたが倒れた後にねっ!!」

翠雨は両手で持っていた雷刀から片手を離し、雷撃を放った

バチンツと凄い音がしたと思ったら夜雀は飛ばされていた

と、そこへなんとつららが応援にきた

つ「翠雨様、大丈夫ですか？」

翠「つららか…丁度良いときに着てくれた。一緒に夜雀をしとめるよ」

つ「?…は、はい!!」

つらは初め何のことで頭を傾げたがすぐに状況を理解したようで返事をした

翠雨によって飛ばされた夜雀が起き上がり、翠雨にまた迫る

翠「今だ!!」

翠「水流弾!!」

つ「呪いの吹雪・風声鶴麗!!」

2人が放った水と氷は互いに混ざり合いながら夜雀に襲いかかった

夜雀に当たった瞬間、巨大な氷柱が出来た。その中に夜雀の姿があった

翠「よし、次は玉章…」

翠雨の目がまた猫のように瞳孔が細くなっており、獲物でも見つめるように鋭く歓喜の色が見えた

ゝ 壱拾陸 」（後書き）

はい、ホントに最後が無理矢理話を終わらした感があります…

次は頑張って話を纏めてコンパクトにしたいです。

では、また次回お会いしましょう

く巻拾七（前書き）

続きます！やっと書き終わりました

では、どうぞ

〽 壱拾七 〽

夜雀が倒されたことによって光が戻っていく

リ「相変わらず強いな…翠雨は」

玉「くそ、もうやられたのか…」

どいつもこいつも使えないな…まあ、いいけどな。どうせあいつ等は道具しかないからな…」

急に玉章から妖気が溢れ出す

すると、手にしていた魔王の小槌を長い白髪が包んでいく

そしてそれをグルングルンと回し出し、仲間の妖怪達を次々と葬っていく

「玉章様！？何、うわああ！！」

ブシヤヤヤヤ！！

リ「仲間を…斬っているのか！？」

遅れて駆けつけた翠雨がこの様子を見て、顔が青ざめた

翠「駄目だ！あれ以上血を吸わせたらっ！！」

翠雨は血相を変えて玉章に迫った

ガキイイン

翠「玉章、目を覚ませ！！それに乗っ取られるな！！」

玉「五月蠅い！！僕はこの血肉で魔王となるんだ！！」

ズバッ

翠「うつ！！」

玉章は翠雨の左腕を切りつけた

斬られたことによつて後ろに下がる翠雨

リ「大丈夫か翠雨！！」

リクオが心配そうに覗いた

翠「大丈夫。あれはもう魔王の小槌に乗っ取られている。

情けで助けようかと思つたけど…あれはあれで好都合。狒々様の仇をとる！！」

翠雨は斬られた左腕を押さえ、ニヤツいた

翠「これでやつと仇がとれる」

翠雨が雷刀を出し今にも飛びかかりそうだった

リ「落ち着け翠雨…おまえはここにいな。おれが行く」

翠雨を制し、リクオは祢々切丸を構え、玉章に切りかかった

ガキイイイン

キンッ

攻防戦が続く

玉「何故？なぜ倒れないのだ…僕のほうがおそれが多いはずなのに何故？」

リ「おまえの何処に『おそれ』を感じたらいんだ？

確かに強い物に対する恐れもあるだろう…

僕がお爺ちゃんから感じたのは君の言うものとは違う。

強く、格好良く、憎たらしくても憎めない…

憧れなんだ、畏れと言う物はっ！！」

翠（昼と夜の血が混ざっている…）

リクオは一気に玉章を押して、玉章の刀を弾いた  
その隙についてリクオは玉章の仮面を切りつけた

仮面はぱっくり割れ、顔が露わになる

顔にも傷があり、其処から大量の妖気が溢れ逃げ出す

玉「うわああ！！妖気がっ！！」

ドサッ

ついに玉章の妖気がほとんど抜けて地に倒れた

少し離れていた翠雨は玉章に歩み寄った

翠「なんて様だ玉章。刹那は魔王になれたんだがな…」

さて、それでは…狒々様の仇取らせてもらっ

翠雨は雷刀を出し、一步また一步と玉章に近づいた

翠「さようなら魔王さん」翠雨は皮肉を込めて玉章を魔王と呼び、  
雷刀を振り下ろした

ガッ

バチバチッ

振り下ろした雷刀が玉章の首に落とされることはなかった

「ふうゝなんとか間にあつたわい…」

翠「そつ総大将!？」

ぬ「刀を下ろしなさい翠雨」

突然現れたぬらりひよんは優しい声音で翠雨を諭す

翠「嫌です!! 狒々様を、家族を殺されたのです。仇を取らねば私の気が済みません!! そこをどいて下さい総大将!!」

ぬらりひよんは大きな溜め息を一つ

ぬ「…翠雨、仇を取ったら狒々は戻ってくるのか？」

戻ってこんだろう。仇なぞ取る必要はないのじゃ。」

翠「必要はあります。玉章は罪を償わねばなりません。狒々様や…仲間を殺していいわけ有りません!!」

誰も命で償わせるつもりは有りません私だってそこまで鬼ではありません」

翠雨がぬらりひょんと対峙していると後ろから

ドロソッ

煙がモクモクと上がり煙の先には大狸が姿を現す

狸「おお、玉章。こんな姿になりよって…。

あの、どうか刀を納めて下され龍組の当主様よ」

翠「四国の…隠神刑部狸？」

狸「如何にも、ワシが四国を束ねる隠神刑部狸です。」

翠「何故ここに…？」

翠雨は雷刀を消して隠神刑部狸を見つめていた

すると

ぬ「わしが連れてきたんじゃ」

翠「総大将が！？何故？」

狸「この馬鹿息子を連れ戻しにきたのです。

どうか、命までは取らないで下さい。今後一切四国から出さず大人しくさせます故…」

翠「……分かった。だが、そうみすみす生かしておくのも私の気が済まん。そうだな…腕一本で手を打とう…」

それでどうかな？」

翠雨は何処までも冷酷な冷たい表情だった

狸「…分かりました、それで命を取らないと言うなら当主様どうぞ持って行って下さい。」

玉章も良いな？命には変えられないからな」

倒れている玉章も観念したようでコクンと頷いた

翠「総大将、よろしいですね？」

ぬ「……分かったわい。翠雨は相変わらず冷酷じゃのう」

翠「これが私ですから…」

翠雨は小さく微笑んだ

そして、雷刀を出し玉章の前まできた

すると、

リ「翠雨、君はそれでいいの？

ホントは…仇なんかとっても意味がないって分かっているんじゃないの？」

翠「……分かっているよ。仇を取ったって狒々様は戻ってこないことだって分かっている。

でも、やらないと私の気が収まらない…やらないと私の気がどうにかなってしまう…

だから、止めないでくれ！！」

翠雨は雷刀を振り上げた

翠「では、玉章…貴様の左腕貰い受ける！！」

スパンッ

勢い良く振り下ろされた雷刀

そして、玉章の体から離れた腕はポトツと地に落ちた

斬られた腕を押さえ悶える玉章

不思議なことに斬られた所から血が吹き出ることにはなかった

翠「血が出ないように焼き切り落とさせてもらった…痛みは少し増すけどね。」

四国で大人しくしていなさい…さようなら玉章。」

翠雨は雷刀を消した

すると翠雨の足下から水が溢れ出し翠雨を包み込んで消えた（なんかデジャブ）

狸「行ってしまったか…どこまでも冷酷な当主様だな…」

ぬ「それは違うぞい、隠神刑部狸。」

確かに翠雨は冷酷なところがあるじゃろう。だが、それは全て仲間を思っただけの行動じゃ…

だし、翠雨は根はとても優しい子じゃよ。現に、玉章の利き腕ではない左腕を取ったし血を流さんように切断面を焼いたじゃろ？

あれは翠雨なりの優しさよ」

ぬらりひょんは力カカツと大笑いをした

ぬ「リクオ、この始末おまえがつけておけ。」

ぬらりひょんはそう言い残し、笑いながら去っていった

つ「いかがなさいますかリクオ様？」

リ「一つだけある。それさえしてくれば、今回の件手打ちとする」

――四国のとある岸壁――

そこに海を眺める青年が1人

「四国で大人しくしていなさい…か、」

青年はない左腕を撫でる

「君は冷酷になりきれていないよ翠雨…本物なら僕の命を貰ったんだろうな…ああ、できるならまた君に逢いたい、逢って話したい…」

すると、青年の後ろから声がかかる

「玉章様、戻りましょう皆が待っています」

居たのは針女、手洗い鬼、崖涯小僧だった

玉「そうだね…」

玉章は皆が要る方へ歩き出す

途中振り返った

先程までいた崖には墓標が幾つか建っていた

玉（条件が仲間を葬ってやれ…か。こちら甘いな…）

玉章はまた歩き出した

その背中には、四国の夕日が輝いて、墓標はただ静かに佇んでいた



ゝ 壱拾七ゝ（後書き）

はい、なんとか四国編の終了です！！

長かったようで短かった…

次はオリジナル話を入れたいと思います（「」）

まあ、最後の方は原作に近づくとは思っていますが…

オリジナル話の前にオリキャラ紹介のPART2も入れるつもりです。

これは、別に読まなくても支障はないので、飛ばしてくれてもOKです。

前回、黒田坊と黒羽丸の頭文字の件ですが、うれしくも案を提供してくれる方がありました。

その方の意見を使うことにしました

黒田坊・黒「」

黒羽丸・羽「」

というふうにしていきます。

では、また次回お会いしましょう

## オリキャラ紹介PART2（前書き）

別に読まなくてもOKな奴ですので、飛ばしてくれても大丈夫です。  
読みたい方はどうぞ

## オリキャラ紹介PART2

翠雨の技について

今後、登場する物もあります。

前半の方と後半の方で言い方が変わっていたりと作者が全く統一していなかったため、ちゃんと統一していきます。

ですので、この章を参考にして今までのをうまくドッキングしてくださいm(\_\_\_\_\_)m

・雷刀

手に紫電を出し、形を刀のようにしたもの。

長さを変えればナイフとしても使用可能

・雷電または雷撃

手から雷を放つことができる。

イメージはポ・モンの技の10万ボルトな感じです

これが主に言い方が変わった物です。すみません。

・雷衣らいい

電気を体に纏わせること

いろいろなことに応用可能例えば、

手に集中させて纏わせると、人を殴ったりするとスタンガンのようにになったり、足に集中させ纏わせると瞬間的に光の早さになることができる

・水浄壁

純水すぎて触れる物を腐食させていく水の壁

・水流弾

水を勢いよく噴出する事によって金属をも切断する事が出来る

あとは、名前のない傷を癒やすことができます。

これは、手から水を出しその水には翠雨の妖力が込められている  
そのお陰で傷が塞がる

技は今のところこれで全部です。

次は翠雨の部下？を紹介します

・煌（雷獣）♀

金色の毛で覆われた

狼とも犬とも言える獣

煌との出会いは翠雨が当主になるための修行中に入った森の中で、

まだ生まれたばかりで衰弱していた煌を保護し、

母親代わりに育てたところ懐かれてしまった。

今では翠雨の側近的位置にいる。

翠雨より年下だが、根っからの姉さん肌で翠雨のことを凄く気にか  
けている。

基本、煌は雲の上にいるため、呼ぶときは雷を使って呼んでいる。

戦闘のときは、自在に雷を操り素早い動きで相手を翻弄し、鋭い牙と爪で仕留める

次はもう一匹の部下兼側近の紹介です。

この子はまだ登場させてないのでネタバレになります。

ネタバレが嫌という人はここで1または高速スクロールで飛ばして下さい。

ネタバレOKと言う人下へ進んでください

・幻（怪鳥・ゲン）♂

羽が鋼で出来ている特大サイズ（全長3メートル程）の驚みtainな鳥

羽が鋼のため全身が鎧のようになっていゐる。そのため防御力が絶大。巨体な割にスピードが早く、攻撃力もそこそこある。

翠雨との出会いは、これまた修行中に翠雨が卵が独りごちになつていたところを発見し、組に持ち帰つて孵化させた。

問題があつて、飛ぶことが出来ない。それは、翠雨は龍で翼が無い  
ため翼で飛ぶという事を教えられないから。だから、いま翼で飛ぶ  
特訓中

## オリキャラ紹介PART2（後書き）

読まなくてもOKな奴を読むなんて…

ありがとうございますm（　　）m

では、また次回お会いしましょう（　　）（　　）

く 老 拾 捌 く （前書き）

原作から一端離れて、オリジナル話に行きます。

まあ、途中から原作にまた戻ってくるとは思いますが…（笑）

では、どうぞ

く 壱拾捌く

四国とのゴタゴタがあつてから数週間後の夕飯時

リ「さつ里帰りいい!？」

急な翠雨からの発表に驚き、箸を落とすリクオ

翠「うん、この長期休みで一端里帰りしようと思って…

それで、総大将行つてきてもいいですか？」

ぬ「おおお、構わんよ。行つてきなさい。雷牙と翡翠によろしくな」

翠「はい」

翠雨は許可がでたことによほど嬉しかったらしく、ニッコリと笑みをこぼした

翠「そうだ、リクオも一緒に行かない？着たことないでしょ？」

リ「えっ！？まあ、確かに行ったことはないけど…一緒に行ってもいいの？」

翠「うん、リクオが良ければこっちは大歓迎だよ！

よし、そうとなれば明日の朝に出発するから準備しておいてね」

それじゃって言って翠雨は自室へと戻っていった

リ「翠雨の実家ってどこに有るの？」

ぬ「んゝ確か…和歌山県に竜神温泉（実はこの地名実在します）というところがあるじゃろ？確かその近くの山だった気がするなあゝ」

リ「竜神温泉…そんなところがあるんだ…しかも場所が近畿…どんなところなんだろう？」

リクオも席を立ち、部屋へ向かおうとした

ぬ「ぬっ、そうだリクオ。向こうに行ったら龍神に挨拶をしてくると良かるう。雷牙と翡翠とは、面識があるだろうがその祖父の龍神とはないだろう。」

良い機会じゃしちゃんと挨拶をしてきなさい」

リ「うん、分かったよじいちゃん。

それじゃあ、明日の用意があるからお休み」

今度こそ、部屋へ向かった

リ（翠雨の故郷かあ。どんなところなんだろう？）

リクオは翠雨のことを考えながら、荷物をまとめ布団へ入った

――翠雨の部屋では――

翠（やつぽい、久々に帰れるよ。父様と母様に会えるんだ！！

…そういえば、2人とも調子は大丈夫なのかな？

まあ、お爺様たちや曾お爺様が居るから大丈夫か。

あ、そうだ！！向こうへついたらあのこの様子も見ないとな…

もう一人でも、平気になったかな？

まあ、全部行けば分かることだし…

早く寝るか…)

翠雨も故郷へ思いを馳せ、眠りについた

— 翌朝 —

日が昇ってまだ間もないうちから、本家の庭先はにぎやかだった

翠雨とリクオの見送りのために、妖怪達が集まっていた

リ「翠雨、それホントに言っているの!？」

翠『うん、だからさっきから言っているじゃん。早く乗ってよ』

リ「えっ、でも…」

翠『おぼろ車だと、間に合わないんだって。だから、乗って!!』

渋り続けるリクオ

今の現状は、庭先に龍の姿で荷物をうまく胴体に括り付けている翠雨と、翠雨の正面で立ち尽くしているリクオと言っ感じ

リ「はあゝ分かったよ。乗るよ…」

翠『よし、それじゃあ荷物頂戴』

翠雨は左手をちよいちよいとやって催促する

リ「はい。」

翠『よしっ、それじゃあ乗って!!角を掴んでくれば、落ちないから』

リクオは言われたとおりに翠雨に跨り角に掴まった

翠『では、行ってきますね』

ぬ「うぬ。気を付けていつてらっしゃい。後、これを龍神に渡しておいてくれ」

ぬらりひょんがリクオに渡したのは酒瓶だった

リ「お酒…」

翠『あつ、それ曾お爺様が大事にしているお酒と同じ奴だ』

ぬ「おお、そうじゃったのか！？なら、良かったわい。龍神によるしく伝えておいてくれ」

翠『分かりました。行ってきます！！』

リ「いってきます。」

ダンッ

翠雨が力強く地を蹴り空高く飛び立った

その姿が見えなくなるまで見送るぬらりひょんとリク才付きの側近たち

つ「リク才様あゝ。大丈夫でしょうか？」

首「大丈夫ですよ。若だつてもう子供でもないんですから、見守つていましょう。それに翠雨様も付いていますから」

黒「そうだぞ雪女、少し心配のし過ぎじゃないか？ちょっとはリク才様を信じよう」

青「そうだぜ雪女。若を信じようじゃないか」

4人は色々話しながら庭から離れた

だが、ぬらりひょんはまだ庭に残っていた

そんなぬらりひょんの元へ鴉天狗が現れた

鴉「総大将、先程のお酒分かっていて渡したんですよね？なぜ、知

らなかったことを装ったのですか？」

ぬ「鴉天狗か…何故だろうな？あの酒はわしと龍神の出会いの酒だからな…なぜか渡したいと思ったんじゃない」

ケラケラと笑いその場を離れていったぬらりひょんだった

―その頃翠雨たちは―

リ「ねえ翠雨、重くない？大丈夫？疲れたら休んで良いからね？」

翠「…リクオ、それもう10回目だよ。私は大丈夫だから、それよりリクオは大丈夫？かなり長時間飛んでいるけど…」

リ「ああ、僕は平気だよ。

ねえ翠雨ずっと聞きたかったんだけど…

小さい頃に翠雨は当主になるための修行で浮世絵町を離れたでしょ。その間翠雨は何をしていたの？」

翠『何を…うん、修行としか言えないかな…』。

そうだな、

滝に打たれて精神を鍛えたり、

父様と手合わせしたり、

お爺様や曾お爺様とも、手合わせしたし

あと、

何も持たず、荒くれ者が多い山で1ヶ月過ごしたり』

リ「なんか一番最後の奴がほかのに比べて可笑しい気がするんだけど…」

翠『気にしたら駄目だよ…』

そんなこんなで暫く雑談をしていると

あっという間に和歌山県上空に来ていた

翠『リクオ、そろそろ下に降りるからね』

目の前には山が広がっていた

翠雨は徐々に高度を下げていきついには木々の間を飛んでいた

リ『ちょっと翠雨、こんな気が多いところ危ないよ!!』

翠『しょうがないよ、この道じゃないと屋敷にたどり着かないよ』

リ『ん?どういうこと?』

翠『この森には特殊な結界が張ってあって、簡単には屋敷に入れな  
いようにしてあるの。だから、もう少し我慢して…ほら、もう出口  
だから…』

そのことは通り一気に視界が開けた

広い原っぱが広がり、大きな日本家屋が一棟あるだけだった

翠雨は屋敷の前の原っぱの上に降りた

すると、屋敷からわらわらと妖怪達が出迎えた

「おお、翠雨様が帰ってこられた…」

「当主ー！！お帰りなさい」

「お帰りなさい翠雨」

「お帰り翠雨」

翠『ただいまみんな』

リ「こんにちは」

リクオは翠雨から降りて挨拶をした

翡「あら、奴良組の若頭」

雷「おお、いらつしやい」

リ「お久しぶりです。雷牙さん、翡翠さん。」

三人が挨拶をしている間に、龍の姿から人型に戻った翠雨が、出迎えに来た妖怪達と一緒に三人の元へやってきた

翠「ただいま父様、母様。

曾お爺様は今どこに？」

翡「お帰りなさい。お爺様はいつもの所よ」

翠「わかった…リクオ、曾お爺様に会いに行こうか」

リ「う、うん」

翠雨に連れられ屋敷の中へ入り、長い廊下を暫く歩く

すると、中庭が見えてきた

それはかなり古風の日本庭園で、中心に大きな満開の桜が一本あった

リ「なんで桜が咲いているの？今は夏のはずなのに…」

すると後ろから声がした

「あの木は決して枯れることのない花を咲かす万年桜じゃよ」

其処にいたのは左目を眼帯で隠し、山吹色の髪の優しそうな老人が微笑んでいた

翠「！！！！

曾お爺様！！」

ガバッ

翠雨は老人の姿を見るや否や抱きついた

龍「おおー。翠雨。相変わらず元気じゃな。少し見ないうちにまた大きくなったか？」

翠「そんなことはないですよ。

それより、紹介します。

今お世話になっている奴良組の3代目です」

リ「初めまして、奴良組3代目若頭、奴良リクオです。」

リクオは丁寧な頭を下げた

リ「どうぞ。祖父から龍神様にと…」

リクオはぬらりひょんから預かっていた酒をさしだした

龍神は一瞬目を見開き、驚きで金色の瞳が揺れたがすぐに元の優しい眼差しとなった

龍「おおー。旨そうな酒じゃな。有り難くいただくよ」

につこりと微笑みリクオから酒を受け取った

翠「曾お爺様、また飲まずになんてしないで下さいよ」

勿体ないとぼやいた翠雨

龍「ハハハッ。そうだな、これは今日の晩酌とするか…。」

翠「それなら、私も少し飲みたいです!!」

翠雨は目を輝かせていた

お酒は20歳から

龍「なら、皆で飲むとするかのぉ」

翠「やった！！夜が楽しみだ！！」

翠雨はよしとガッツポーズをした

リ「あはは……」

リクオは呆然とその様子を見ていた

龍「長旅で疲れたじゃろ。もう部屋で休むと良い。

翠雨、部屋に案内してあげなさい」

翠「はい。

じゃあ、リクオ付いてきて……」

翠雨はスタスタと進んだ

リクオは龍神に頭を下げ、先に行った翠雨を追った

長い廊下を歩き、1つの部屋のまで止まった

翠「リクオはこの部屋を使って。左隣が私の部屋だから何かあったら呼んでね。」

リ「わかった、ありがとう。」

翠「私はこれから森へ行くけど、リクオはどうする？部屋で休んでる？」

リ「折角だから一緒に行ってもいい？」

翠「うん、別に構わないよ。」

なら、丁度良いか…」

リ「何が丁度良いの？」

翠「ほら、前に煌以外に私の部下が居るって話だよ。」

「これから、その部下に会いに行くよ」

ゝ 壱拾捌ゝ（後書き）

なんか、内容がグダって来てしまった（。□。；）

頑張ります…次はやっと翠雨の部下登場ー！！

では、また次回お会いしましょう

〱 壹拾玖〱 (前書き)

お待たせしました!!

更新遅くて申し訳ありませんm ( \_ \_ ) m

今、テスト前で時間がないもので ( ρ \_ ; )

すみません言い訳です…。

では、どうぞ

く 壱拾玖く

そんなこんなで森へとやってきた2人

リ「ずいぶんと大きな森だね…」

翠「そうかな？確かに大きな森だけどここら一帯だと普通サイズだよ。」

リ「へえへ。」

しばらく森を歩き、一本の大木の前で止まった

翠雨はその木の上の方を見上げ、すーっと息を吸い

翠「げえええーん！！」

と叫んだ

すると、その木の上の方がガサガサと動き、ひょこつと鳥の頭が現れた

「おおお！！翠雨！！お帰り」

翠「ただいま幻。どう、あれから飛べた？」

幻「まあ、なんとか…」

翠「それなら、良かった。幻、一端降りてきて。紹介したいから…」

幻は分かったとうなずき、またガサガサとしてから、大きな翼を広げながら、

その木から飛び降りた

滑空しているようで、しておらず落ちていると言った方がしっくりくるようだった

翠雨たちの前にドスンツと音を立て鋼色の全長3メートル程の怪鳥が姿をさらした

リクオは、驚き目を見開く

翠「前よりはか、ましになったかな…。」

翠雨はその怪鳥に近づき頭を撫でた

幻「それでも頑張ったんだ…」

翠「リクオ、紹介するね。私の部下兼側近の幻。」

リ「奴良組3代目若頭、奴良リクオです。」

幻「こんなひよろつちい奴が3代目なのか翠雨？」

幻は翠雨の方をみた

翠「幻、リクオを甘く見ない方がいいよ。ちゃんと大将としての器もある。力はまだまだこれからだけど、期待はして良いと思うぞ。」

幻「翠雨がそこまで言うなら…。」

翠雨はまたにつこりと笑い幻の頭を撫でた

翠「さて、紹介も終わったし…練習始めようか。」

で、今日は特別講師が来ているから」

リ幻「「特別講師？」」

翠「そう、特別講師。」

さあ、出てきて下さい三羽鴉の皆さん。」

リ「えっ!？」

リクオが驚いていると、バサバサと少し離れた木から姿を現した三羽鴉たち

羽「いつからお気づきに？」

翠「初めからに決まっていますでしょ。」

三人の部屋割りだけど、黒羽丸とトサカ丸はリクオの部屋の右隣、ささ美は私と同じ部屋で良いでしょ？」

三羽「」「分りました」「」

翠「と言つことだから…」

早速、幻に翼で飛ぶことを教えてあげてくれない？」

翠雨はにっこりと笑っていた

だが、三羽鴉たちはその笑顔から畏れを感じていた

そして、始まった三羽鴉による飛び方講座

基本の翼の動かし方から始まり、

飛行中のテクニクなど、いろいろたたき込まれていった

さ「もっと大きく羽ばたいて!!」

幻「はいっ!!」

羽「違う!! もっと右翼を使って!!」

幻「はい!!」

ト「ああ、だからそうじゃなくてもっと」

幻「はい!!」

時折バンバンと鉄を叩くような音がしていたが翠雨たちは見てみぬ

振りをし

翠「あれでちゃんと飛べなかったらどうしよう…」

リ「…あの凄い指導で飛べない方が凄いと思うよ。」

翠「それもそうだね。要らない心配だったか…。」

リクオと翠雨は顔を見合わせ、クスリと笑っていた

2人が笑い合っていると、突然強い風が吹き付けた

急な風に目を瞑った

幻「翠雨見てくれ！ちゃんと飛べるようになったぞ！」

2人の目の前には大きな翼で羽ばたいている幻の姿があった

翠「まあ、あの指導で飛べない方が凄いと思うけど…。でも、飛べるようになって良かったな。」

さて、やることもやったし、屋敷に戻ろうか？」

翠雨は幻の頭を撫で、屋敷への帰路に向かった

その後ろ姿に幻は

幻「もう、戻るのか？」

少し残念そうに肩を落とした

翠「幻はもう飛べるんだから、寂しくなったらいつでも、屋敷が私の所に来ればいいだろう？  
そう、しよげるな」

幻「そうだね…。じゃあ、またね翠雨！」

翠「じゃあ、屋敷に戻ろうか」  
森を後にした翠雨たちだった

そして屋敷に戻ったところ丁度夕餉の時間だったため、直に広間へ向かった

すーつと襖を開け広間に入ると

翡「あら、お帰りなさい。どこでも好きなところに座って頂戴ね」

雷「お帰り翠雨。幻君はどうだい？」

翠「三羽鴉たちに手伝って貰って、もうちゃんと飛べるようになりました。」

翠雨は自分の定位置の膳の前に腰を下ろした

リクオはその隣に座った

三羽鴉たちは少し離れた下手の方に座った

膳の前に腰を下ろしてしばらくすると、襖が開き龍神が入ってきた

龍「おお、すまんのお待たせてしまったわい。」

翠「そんなことないですよ曾お爺様。私たちも先ほど来たところで  
すし…。」

龍「そうか…なら良かったわい

では、頂くとしよう

頂きます」

龍神の一言によって始まった夕食

ガヤガヤと賑やかな時間が過ぎていく

翠「曾お爺様、さつき貰ったお酒飲みましょうよ!!」

翠雨はずっと待っていたがいつこうに瓶のふたを抜かないため、痺れを切らし催促した

龍「まあ、そう焦るでない。そんなに飲みたいのならあとでわしの部屋においで。一緒に月見酒でもどうじゃ?」

翠「月見酒ですか!?!やったね!!分かりました、絶対に行きますから全部飲まないで下さいね」

龍「アッハツハ…。さすがに全部は飲めんから安心せい…。

そうだ、リクオ君も一緒にどうじゃ?」

リ「いいんですか！？喜んでいきます！！」

龍「あとで翠雨と二人でわしの所においで」

その会話を最後に止まっていた食事を再開した

龍「…御馳走様でした」

翡「お粗末様です」

龍神の締めの一言によって各々片づけや、部屋へ帰っていく

翠「リクオは部屋で休んでいて、あとで迎えに行くから」

リ「仕事有るなら手伝うよ」

翡翠「リクオ君は客人なんだから、何もしないで良いわ。

やることはないなら、お風呂でも入ってきたらどう？」

翡翠はいつの間にか持っていたバスタオルをリクオに押しつけた

翠「そうだね…お風呂入ってきな。案内するから」

ガシッとリクオの腕を掴みお風呂場へと引っ張っていった

その様子を暖かな眼差しで見送った翡翠だった

しばらく廊下を歩きお風呂場に到着

翠「はいっ、ここがお風呂場ね。今の時間は誰も入っていないはずだから、ゆっくり浸かっておいで」

リクオをグイッと押し脱衣場に押し込んだ

リ「えっ！？ちよつ、翠雨！？」

翠「上がったら部屋に居てね」

じゃあつと言つて翠雨は今来た道に戻つていった

強引に押し込まれたリクオは、渋々お風呂に入りに行った

食事をした広間へと戻つてきた翠雨

早速片づけを手伝い始めると

「当主当主！！」「翠雨様翠雨様！！」

と小さな妖怪が二人翠雨の腰辺りに抱きついた

翠「おお、びつくりした…。

どうしたんだ雪<sup>セツ</sup>、炎<sup>エン</sup>？」

その抱きついている二人は、

1人は全身真っ白で雪を連想させた。

もう1人は全身真っ赤で炎を思わせた。

二人は腰に自分の色と逆の色の面が下がっていた

初めに口を開いたのは真っ白の方の少女だった

雪「当主はいつまでここにいるの？」

真っ赤の少年が続く

炎「翠雨様はいつ浮世絵町に戻るのですか？」

翠雨を見上げながら問いかけた

翠「長くて、あと一週間はいるつもりだな。帰るまではたくさん遊んであげるからね」

翠雨は優しく二人の頭を撫でてやった

雪「ほんとぉー!？」

翠「うん、本当だよ。今まで私が嘘を付いたことがあったか？」

炎「ないですね…。」

翠「ほら、炎も言ってるしホントだよ。

明日からたくさん遊ぼうか」

雪「うん！！雪、沢山当主と遊ぶ！！炎、今日は早く寝て、明日いっぱい遊ぼう！！」

炎「そうだね。そうしようか」

二人は仲良く手を繋いで、部屋へ戻っていった

その様子を眺めている翠雨

翠「少し見ないうちに大きくなってたな…。」

翡「何オバサンみたいな事言っているのよ！！

貴女だってまだ若いでしょ」

いつの間にかいたのか分からないが翡翠が翠雨がこぼした言葉に突っ込んだ

翠「母様…いつの間にいたんですか？」

翡「片づけはいいから、お爺様の所へ行ったらどう？」

華麗に翠雨の質問をスルーした

翠「じゃあ、曾お爺様の所に行ってきますね」

翠雨は最後に器をお盆の上に乗せ、流しに持って行った

その足で自分の部屋へ帰って行った

いったん自分の部屋に戻り、準備をし隣のリクオの部屋に向かった

準備と言っても大したことではなく、ただ身なりを少し整えたただけだった

隣の部屋の襖の前にやってきた

翠「リクオー入っていい？」

リ「おう、構わねえぜ」

翠（『おう』？）

いつもと口調が違うことに気づきつつ襖を開け部屋にはいる

案の定、部屋の中には妖怪の姿のリクオが窓に肘を置き、煙管をふかしていた

翠（ああ、やっぱり夜の姿か…）

リ「もう龍神の所に行くのか…？」

リクオはふかしていた煙管をさつと片した

翠「うん、付いてきて」

リクオは窓辺から立ち上がり翠雨の横についた

それを確認してから歩き出す翠雨

翠「リクオ、失礼のないようにね」

リ「なんだその言い方」

翠「いや、だつてそっちの姿だとなんか性格変わっているからさ…  
ちよつと心配で…」

リ「なんだ、それ。ちよつと失礼じゃないか？」

翠「そうかな？…ああ、ここだ」

そんな話を話しているといつの間にか龍神の部屋の前に来ていた

翠「曾お爺様」

翠雨は襖の前で、止まり中へ確認を取った

龍「おお、きたか…。どうぞ、入りなさい」

翠雨とリクオは龍神の正面に座り用意されていた杯を持った

すると龍神が指をクイッと振る

すると、酒瓶が宙に浮き杯に酒が注がれていく

龍「では、頂こうか」

グイッと煽った

翠「…美味しい！」

リ「ああ、確かに旨いな」

龍「そうじゃろ！この酒はわしのお気に入りだな」

龍神は褒められたことを嬉しく顔を綻ばせた

龍「そう言えばリクオ君。それが本当の姿なのかね？」

リ「本当の姿ねえ。こっちの姿も昼の姿も本当の姿だよ。俺は俺だから」

龍「ハッハッハ確かにどちらも本当の姿だな…」。

それにしても…本当にぬらりひょんにそっくりじゃな。血はちゃんと繋がっているみたいじゃのお」

リ「毎回言われるんだが、そんなに似ているか？」

龍「ああ、あいつの若い頃にそっくりじゃ」。

わしが初めてあいつにあった時の目をしている。

あいつが魑魅魍魎の主を目指している頃だな」

リ「そんなもんか」。

なあ、ずっと聞きたかったんだがその左目どうしたんだ？神ともあろう者が傷を負っているなんて…」

翠「確かに…。それ私もずっと気になっていたんです。一体何があ

「つたんですか？」

翠雨も昔からずっと気になっていたらしいから、答えがやっと聞けると喜んでいようだ

龍「そうじゃな…なら、わしの昔話に付き合って貰おうかの。」

龍神は空になっていた杯に酒を注ぎ、一口つけた

喉を潤した所で、窓の外に目を移した

空には数え切れない程の星々が競い合うように輝き、それを見守るように淡く輝く月が空にぽつんとあった

その様子を見つめながら、語り出した

それは、神と任侠者が会っお話だった



ゝ 壱拾玖ゝ（後書き）

次は、龍神とぬらりひよんの出会いがあった昔の話をします。

途中から、原作沿いになっていきます。

というか、ほとんど初めから原作沿いな感じですね…

なるべく早く更新するので、よろしく願いしますm（＿）（＿）m

では、また次回お会いしましょう

く式拾く（前書き）

更新遅くなって申し訳ありませんm（　　）m

定期テストと部活の大会があつた所為で全然書けませんでした…

これからは、ネタが尽きない限り頑張ります！！

それでは、龍神が語る昔話…

では、どうぞ

く式拾く

今から400年程前…それは京都で羽衣狐が魑魅魍魎の主として君臨していた頃

こちら最盛期を迎えていた龍神

「龍神様、また羽衣狐からの使いが来ておりますが如何致しますか？」

1人の龍神の部下が屋敷の前に羽衣狐の使いが来ている峰を伝えた龍「何？また来たのか？今度はなんと申しているんだ。」

苛立ちの色を見せたのは、艶のある短い黄金色の髪に金色の瞳、白の袴姿をした龍神だ

部下は少し言いにくそうに濁しつつ、

「…そ、それがまた…謁見をしたいを申してまして、直接羽衣狐からの文を渡したいと言っております…」

龍「…分かった。その使者と会う。部屋に通せ」

「かしこまりました」

ふうつと溜め息を付き、長い爪でカツカツと苛つきながら肘置きを叩いていた

龍（今度は、何のようできたんだ…鬱陶しいのぉ）

部屋を出ていった部下は羽衣狐の使者を連れて戻ってきた

羽衣狐の使いは龍神の前に座り深々と頭を下げた

「謁見を許していただき有り難き幸せ…龍「そんなのはどうでも良い！！早く文を出さんか！！！」」

使者が挨拶をしていたところ、痺れを切らした龍神が苛立ちのあまりついカツとなり、妖気がブワツと溢れ使者が怯えさせた

「こっ、これです…」

怖ず怖ずと差し出された文に目を通した

すると、

わなわなと震えだし紙をグシャリと潰し、使者を睨みつけた

龍「ふざけたこと言いおつて…

『傘下に入らなければ、

出雲大社の神々を殺す』だと…

この龍神をなんだと思っているんだ!?

我ら龍は神に仕え、支える神獣。

それを…それを…主を殺すだど!!戯れ言も良いとこだ!!」

龍神は怒りに身を染め、凄まじい妖気が室内に漂った

龍「おい。羽衣狐に伝えろ、『貴様に神々は殺させない』と…そして、近々其方に顔を出すとも伝えておけ」

「はっはい!!」

羽衣狐の使者は慌てて立ち上がり、屋敷を出ていった

途中何度も躓き倒れながら…

使者が帰った部屋には龍神が1人…

と、そこへ

「落ち着いて下さい兄上。皆が怯えています。」

すーっと襖を開け、部屋に入る男が1人

深い青色の髪に黒い瞳で白い袴を身に纏っていた

龍「ああ、瑞弥<sup>みずや</sup>か…

そうだな、

少し熱くなり過ぎたか」

龍神は深呼吸をすると、徐々々に禍々しかった妖気が落ち着いていた  
った

瑞「兄上、今回はなんとやってきたのですか？」

龍「そうだ！！聞いてくれ瑞弥！！

あの狐、傘下にならなければ出雲の神々を殺すとほざいたのだ！！

ふざけたことを言ってくれたわ！！

それで近々あやつに合って直接言ってくるわ」

瑞弥はニコニコとしながら

瑞「確かにそんなこと言われると頭にくるね…

殺したくなっちゃうね」

ニコニコしながらかなり物騒なことを言っていた

龍「瑞弥…言っていることとやっていることが違うぞ……。」

龍神は呆れたような表情をしていた

瑞「ああ、そうだ。兄上さっき面白いことを聞きました。

なんでも、関東の任侠者が京に入ったらしいですよ。

で、その大將が人間に恋をしたみたいで自分の物にしようと奮闘しているみたいです。

面白いですね。

人なんて我らより短命だし、ちょっとした事で死ぬような弱いものなのに…

そののどこがいいのでしょうか？

私には理解できませんね。」

龍「まあ、そう言うな。人は確かに我らより遙かに短命だ。

だが、その僅かにしかない命に悔いがないよう、

いつも一生懸命で自分だけの花を咲かせている。

その花は、野に咲く花よりも美しいものよ。

人は我らより美しい…。」

瑞「そんなものですか？分かりますね。」

龍「いつかおまえにも分かるときが来るじゃろ」

そつ言つと龍神は立ち上がり屋敷を出ていった

瑞「はあゝ、また長い散歩かな？今回はいつ帰ってくるかな…」

瑞弥は大きな溜め息を一つ

これからしばらく兄に変わり仕事をするのだろつと考えていた

そのころ龍神は遙か上空を飛んでいた

黄金に輝く鬣と鱗が月明かりに照らされキラキラと輝いていた

龍（あの女狐め…一泡吹かせてやる。

と、まあそのためにもまずは敵情視察からだな）

そう、龍神は羽衣狐に一泡吹かせるために敵情視察をするため京へ向けて飛んでいたのだ

龍（そういえば、何年ぶりの京だ？流石に町並みも変わっているだろうな）

悠然と空の旅をしばらくするとやっと京の町が見えてきた

龍（おおゝ久々の京だ…あの狐が政に関与し始めてからは来ていなかったからな…）

ああ、大気が淀んでいる…）

龍神の言うとおり京を覆う空は淀みきっていた

それはある一カ所から黒々と広がっており、

その源は羽衣狐が人に化け、政を行っていた大阪城？だった

龍神はそれを忌々しそうな目で見つめた後、京の町に降り立った

もちろん、人目がないときを見計らって降りた

地に降りると龍神は人の姿に化けた

服などは色々変えることはできるが、髪と瞳の色だけは変えることが出来ないので仕方なく笠を深く被った

笠を被ってしまったば、髪や目の色は分からなくなった

その姿で京の町にくり出した

ざわざわとした喧噪の中、周りに気を張りちよつとした主婦間の噂話に聞き耳を立てる

「なあ聞いたかい？またあつたらしいよ…。」

「えっ！？またかい？今度はどこだったんだい？」

「…今回は二丁目の酒蔵の前だと…。また肝を抜かれていたらしいよ」

「…またかい…夜はもう外に出ないで大人しくしないといけんね…」

その主婦の話を耳にした龍神は顔をしかめた

だが、笠をしているため周りの者は気づかない

龍（生き肝信仰か…）

恐らくあの女狐が手下を使い集めさせたのだろうな…。

あの女狐は力を付けて何をするつもりなんだ？

そこまで、大量に妖力をつけなければならぬこともあるのか？

うーん……わからんな）

暫く考えながら歩いていると、妖怪の妖気が漂ってきた

ふと道に立ち止まり様子を伺う

段々と妖気が濃くなってきた龍神は通りに目をやり妖気の元を探した

龍（あ、居た…。）

通りには長い白銀の髪を靡かせ、かなり着崩した着物を身に纏う男とその手の中には鮮やかな桜色で花柄の上等な着物をきた美しい女性がいた

桜「！なぜ誰も気づかないのですか？」

ぬ「それはわしがそう言う妖だからだ。

ぬらりくらりと現れる。

人はわしのことをぬらりひょんと呼んでおる」

二人の会話に耳を傾けていた龍神

龍（…もしかしくとも、あいつが瑞弥の言っていた妖か。

人に恋した妖…

お相手はあの癒しの力を持つ桜姫か。

大丈夫だろうか？少し釘を刺した方がいいか…『桜姫を危険にさらすな』と…）

龍神はまだ何か話している二人に近づきこう言った

龍「ちょっとそこのお二方。こんな夜更けにどこに行くのですかな？」

桜ぬ「…！！！」

二人はまさか周りから見られているとは思っておらず驚きで目を見開いていた

龍「そんなに驚かなくても…」。

周りの人にあなた方の姿は見えませんよ。安心してください。」

ぬ「なら、なぜてめえは見えるんだ？」

龍（私に向かつて『てめえ』だと…何様のつもりだこいつ！…人の往来がなければ切り裂いてやろうと思ったのに…）

内心ぬらりひよんの態度に腹を立てつつも平静を装う

龍「私はそなたと同類よ。

いや、同類という括りで括れたらの話しじゃがな」

ぬ「ん？どうゆうことだい？」

ぬらりひよんは訝しげに首を傾げた

桜姫はなんのことやら、さっぱり分からない様子

龍「そのままの意味じゃ。

まあ、いずれ分かる事よ」

ますます分からないという顔の二人

その様子を見てクスリと笑った龍神

龍「ククク…そんな顔をするでない。

そんなことよりぬらりひょん、

おまえはその手の中の姫様をどこへ連れて行くつもりだ？

もし、その方に変なマネしてみる。その方は今の世に必要な方だ。  
何かあったときはおまえの組を潰してくれよう」

龍神は少し殺気を放ちながら笑っていた

ぬ「なっ！！組を潰すだっ！？」

龍「そうだが？私には任侠の組の一つや二つ簡単に消すことが出来る力がある。だから桜姫に危害を加えるでないぞ。それさえ守ってくればあとは何をしようが口出しはせん。」

ぬ「……あんたは一体何者なんだ？俺のことを知っていたり、桜姫のことも知っていた。それに組一つ潰せるだけの力を持っている。

何者なんだ？」

ぬらりひょんは鋭く目を光らせ、目の前にいる人物が誰か見極めようとしていた

龍「ククク…そう睨むでない。」

私に名など無い…

私はただの龍だ。

神に仕えるただの神獣よ。」

今までぬらりひよんの腕の中で黙って様子を伺っていた桜姫が口を開いた

桜「…神獣…龍……！！

まさか！？」

桜姫は何かピンときたようにぱつと顔を上げた

龍「桜姫はもう分かったみたいですね。流石といった所か…

人々は私のことをこう呼ぶ…

神の使い龍神と。」

ぬ「んなつ！？龍神だと！！こいつが？」

ぬらりひょんはまさか目の前の人が龍神だとは思っていなかったらしく驚きの表情をしていた

龍「そうじゃ、私が龍神よ。」

そんなことより、さっき私が言ったことちゃんと守るんだぞ。」

ぬ「桜姫を危険な目に遭わせなければいいんだろ？」

任せておけて龍神さんよ。」

龍「おまえがそう言うなら何もいわん。任せたぞ。」

では、またな。

もしかしたら、また合うことになるだろうな」

龍神は満足したように微笑み手を振りながら立ち去った

手を振りながら立ち去る龍神の背中を見つめるぬらりひょん

ぬ（あいつが龍神……。たった1人で妖怪から龍を神聖な存在にした者。

儂と対して歳も変わらないだろう。それでここまで力を付けているなんて…。儂はあいつの足元にも及んでいないだろうな。

だが、いつかあの龍神を越えて儂は魑魅魍魎の主になってやる)

そんなことを思われながら見送られた龍神はというと、

龍(ぬらりひょん、ね…。

彼奴はきつと私を越えるのだろうな。彼奴が魑魅魍魎の主になったら世はどうなるのだろう？

まあ、この淀みきつた空気からおさらばできれば何でもいいがな。)

ふつと口角をあげ笑い、笠を深く被り直しながら人混みに消えていった

く 式拾く (後書き)

実は龍神とぬらりひょんは昔に面識があっ たんですね。

次はいよいよ羽衣狐が登場！

かもしれません…。

では、また次回お会いしましょう

く式拾巻く（前書き）

お待たせしました！

毎度毎度更新が遅くて申し訳ないですm（――）m

今、引っ越し作業中なもので…

しかもそこで、私のコレクションたち（マンガたち）が勝手に倉庫へ持って行かれていて今手元に原作がないので作者の記憶力を頼りに頑張っています。

何言い訳してんだコンニャローって感じですよね…

ホントすみませんm（――）m

週1位のペースにしていけるように頑張ります！！

なんか、前書きの文章構成がグチャグチャに…

今回、終わりが中途半端な終わり方なので後書きを書かずにすぐに次話に行けるようにします。

では、どうして

く式拾きく

ぬらりひょんとあつた後、龍神は屋敷に帰るために空中散歩をしていた

行きと違い厚い雲に覆われた月が雲の隙間から申し訳なさそうに周りを照らす

龍（妖力をたくさん使うことと言ったら…なんだ？

羽衣狐と言えば、珍しい転生妖怪…

！！？分かったぞ！！！！

早くこのことを瑞弥に言わねば！（

スピードをあげ、瑞弥がいる自分の屋敷へと急いだ

風を斬る音を聞きながら空を飛ぶ

龍「瑞弥ああ！！」

屋敷の玄関先に降り立つと弟の名を叫んだ

その声は屋敷のどこにいても聞き取れるほどの大声だった

瑞「ちよつと兄上！！あんな大きな声で呼ばないでください。ちゃんと聞こえていますから！！」

で、何をそんなに急いでいるのですか兄上？」

急にまじめな顔をなり、兄を屋敷内に連れていく

二人は一つの部屋に入った

龍神は部屋の中に腰掛けた

龍「瑞弥…あの女狐が何をする気かわかってきたぞ。

あいつは今、力を付けている。そのため生き肝を食べ、特殊な力がある者達を城を集めてその者たちも食べるのだらう。それだけ力を付けなければ行けない。」

龍神はこれまででわかった情報からの推測を瑞弥に話した

瑞「生き肝信仰か…。可哀想にきつと赤子が多く狙われたでしょうな。赤子の肝は大人より良いですから…。」

龍「ああ、今まで襲われてきた子達は皆、赤子や身ごもった子だ。惨いことをする…。」

瑞弥、羽衣狐がどんな妖怪か知っているか？

瑞「妖怪では珍しい転生妖怪でしたよね。」

龍「そうだ。奴はある目的のために転生を繰り返している。」

自分の子を産む。と言つ事のために…。」

瑞「子を産む？」

龍「そうじゃ。奴は今身ごもっているのだろう。」

なんとかしても阻止せねば…。」

瑞「何故阻止するのですか？放っておいても良いのでは？」

瑞弥は、別に阻止なんかしなくともいいではないかと考えていた

龍「はあゝ」

ポリポリと頭を搔いて溜め息を一つ

龍「まだまだだな瑞弥。」

奴は子を産むために力を欲している。

だから、生き肝を食べているのだ。

赤子の生き肝では足りなくなったら次はどうする？

赤子より力がある肝を欲しがるだろ？

奴は今、特殊な力を持つ者を城に招いている。

これがどういうことかわかるか？」

瑞「その特殊な力を持つ者・尊い人の生き肝を食べるということですか兄上？」

龍「そうだ。我らには仕事があるだろう、尊い人を加護するという仕事が…。」

それが今、危うい状況だ。

明日、その仕事上の危険分子を排除するぞ瑞弥。」

瑞「兄上…」。

本当は、仕事じゃなくて一発ガツンとあの狐にかましたいんでしょ」

龍「……………」

本当を言えばそうだな。

だが、我ら神獣は神の仕事の手伝いをするのが仕事だからちゃんとせねば。やっと認めてもらえ始めたのだから…な。」

瑞「（変なところでしっかりしているんだよね…兄上は。）

分かりましたから…

では、明日の仕事に向けて色々出来るうちに他の仕事をしますか…」

瑞弥は立ち上がり部屋を出ていった

龍「わしも明日に備えてやるか…。」

龍神も立ち上がり自分の仕事を始めた

—翌朝—

龍神は弟の瑞弥をつれて羽衣狐の元に向かった

雲の上を飛ぶ二頭の龍

黄金にきらめく龍神と、

その横に付く氷のように透き通っている青の鱗に白銀の鬣をした弟の瑞弥がいた

瑞「相変わらず兄上はガラガラしていますね。目が可笑しくなりそうです。」

瑞弥はニカツと笑いながら言った

龍神はムスツとし、負けじと言い返す

龍「そういうお前こそ、氷みたいな鱗と鬣で…冷気を出すな、寒いだろうが。」

瑞「冷気なんか出ません！」

龍「儂のことを悪く言うからじゃ。お互い様だ。」

龍神はケラケラと笑い出した

ひとしきり笑い終わると真面目な顔になった

龍「瑞弥、もしこれからの羽衣狐との一戦で儂に何かあったらお前が龍神を継ぐのだぞ。」

瑞「兄上、それはもしもの話ですよ？

そんなことにはならないからそんな心配いりませんよ。

もし、本当に何かあったら私が兄上の盾になりますから。」

龍「…弟に庇われるのは情けないから、そんなことの無いようにやるさ…。」

そんなことを話しながら飛んでいた

日は西に傾いていた

日が暮れる頃やっと羽衣狐のいる城に到着した

正門の前に降り立つと素早く人の姿になった

門兵に声をかける

龍「（こいつ妖怪か…兵に妖怪を使うほどの城には妖怪が溢れているんだな）」

淀殿「いや、羽衣狐殿に合いたいのだが…。」

そついうと門兵は驚きの表情を浮かべた後、すぐに真剣な顔になった

門「羽衣狐様に何用ですか？」

龍「私は龍神と言うものだ。以前頂いた文の返事をするためにきた。お会いできるか？」

門「少々お待ちを…。」

こう言って門の中へ確認を取りに行った

瑞「ちゃんと会えるでしょうか？」

龍「大丈夫だろ、アイツはわしを引き込みたくて仕方がないのだから…。こつちから出向いたんだ、こんな良い機会を逃すはずがない。この機会にわしを引き込む気だろう。」

すると、ギイイッと正門が開いた

開かれた門から先程の門兵と銀髪で紋付きを着た男が出てきた

その紋付きを着た男が龍神の前まで来た

「龍神殿とお見受けする。わざわざ足を運んでいただきありがとうございます。御座います。我らが主羽衣狐様もお喜びです。」

どうぞ、羽衣狐様の元へお連れいたします。」

門の中へ戻っていった彼のあとをついていく

瑞「ヒソヒソ」兄上、アイツ何者ですか？」

龍「ヒソヒソ」アイツはしょうけらだ。羽衣狐を神のように崇める奴だ。

もし、羽衣狐に何かあつたら発狂しだすだろうな」

龍神はクスリと笑って見せた

城の中に入り、長い廊下を歩く

しよ「羽衣狐様は今ほかのお客様を待っているのですがその方が来るまでの時間しか合うことが出来ません。ご容赦を…。」

龍「ああ、別に構わん。」

しよ「それでは…」

しょうけらは豪華な襖の前に止まった

しよ「淀様、お客様をお連れしました」

しょうけらは声をかけ、襖を開ける

羽「おお、よく参ったな。

今まで妾の文を無視してきたのに…。」

部屋には、上等な着物を纏った女性が三人ばかりいた

龍神は一通り部屋の中を見回した

龍「あそこにいるのは…髪長姫に苔姫…。みんな特殊な力の持ち主たちか…。」

羽衣狐に視線を移した

龍「無視などしておりませんよ。毎度悩んでいると次の文が来るものですから返事が書けずにいたのですよ。」

龍神はガハハと笑って見せた

羽「それにしても、今回はわざわざ顔を出してきたではないか？

どという風の吹き回しだ？」

ガハハと笑っていた龍神は徐々に笑いをやめ、真剣な目つきになっ  
ていった

龍「どうもこうも無いじゃないですか？

貴女が我らの主を殺すと言っからではないか」

遂には羽衣狐を睨みつけていた  
後ろに控えていた瑞弥も黙って殺気を放っていた

羽「そう睨むでない。

そうだその目：お前がまだ荒くれ者だったところと同じ目だ。」

龍「もとより、わしらは下級出だ。すぐには変わらん。ましてや、  
根は変えるつもりは無いがな。」

羽衣狐の皮肉にも睨み殺気立ちながら答えた

暫くにらみ合っていると少し乱暴に襖が開けられ、一人の女性が部  
屋に投げ入れられる

「きゃあっ！？」

ドテっというように畳に手を着けて倒れてきた

龍（桜姫！？くそっ！！ちゃんと守れって言ってあったのに…）

そう現れたのはぬらりひょんに託したはずの桜姫だった

桜「痛た…」

桜姫は腰をさすりながら目の前に立っている女（羽衣狐）を見つめた

羽「おお、やっと来たか…」

待ちわびたぞ。

悪いが妾は忙しいのじゃ。もう帰ってくれんか？」

羽衣狐はウキウキと笑顔をしながら、龍神に帰ってくれと催促した

龍「このわしより重大なことなのですか？」

羽「そうじゃ。早よう帰ってくれ。また、会いに来てくれると助かるがな。」

龍「分かりました。またいつか…。」

龍神はニヤリと嗤いそれだけ言ってゆっくりと立ち上がり羽衣狐に背を向け歩き出す

後ろについていた瑞弥も立ち上がり去っていく

その姿を見ていた桜姫は

桜（あのお方は…昨日の龍神様？）

桜姫が小首を傾げていると、

髪長姫が淀に呼ばれ淀の前まで行った

（頭文字で淀の事を羽衣狐と統一して書いていきます。BY作者）

羽「なんて美しい髪なこと…」

羨ましいのお…

さぞかし旨いのだろうな…」

髪長姫がえっ？というような顔していると羽衣狐がグイッと顔を近づけ接吻をした

その場に居た桜姫たちとそれを背中で感じていた龍神たちは驚愕していた

すると

ジュルルウウつと不気味な音が部屋に響く

ドサリと髪長姫が倒れる

白目を剥き、口元から血が流れて息絶えていた

「きゃああああ……！」

と、未来を予知できる子（名前が分からなかったので頭文字無しで……BY作者）が悲鳴を上げる

「やっぱり……やっぱり……！」

私がみた未来と同じ……嫌……！死にたくない……！だ、誰か……ああ……！」  
彼女は立ち上がり逃げようと襖に手をかけるが、

「どこへ、いかれるのですか？」

襖の前に立っていた兵の顔が途端に鬼の顔に変わり、彼女を部屋に引き戻す

部屋から退場していた二人は襖越しに様子を見ていた

龍「（やはりこうなったか…）  
瑞弥、仕事をするぞ！」

瑞「はいっ兄上!!」

二人は襖を蹴破り、桜姫と苔姫の前に立った

く式拾式く

バンっという音とともに

部屋に飛び込んだ龍神と瑞弥はまだ生きている瑛姫と苔姫を庇うように羽衣狐の前に立った

羽「やはりまだ帰っておらんかったか…。」

龍「当たり前じゃないか。彼女等を守ることがわしらの仕事なんだから…。」

それにお前がこれからしようとしていることも大方予想がつく…。」

瑞「羽衣狐…あんた今身ごもっているだろ？そのお腹の子のために生き肝を喰らい、尊い人の肝まで喰らった…そうだろ？」

羽「ああ、そうじゃ。妾はこの子が生まれて困らないようにしてやっているのじゃ。」

羽衣狐は愛おしそうにお腹を撫でた

瑞「そのために一体何人の子が犠牲になった事やら…。」

瑞弥は殺気立ちながら懷にしまつてあつた刀を取りだし構えた

龍神も刀を構えた

龍「羽衣狐よ…我らの仕事が何か知つておるか？

我らの仕事は尊い人を守ることだ…！」

ダンつと二人は駆け出し羽衣狐に切りかかる

が、ガギインと周りにいた妖怪達に防がれる

龍神は舌打ちをし後ろに下がる

羽「ほれ、妾はまだここにいます。妾を倒したいのらう？早くおいで。やらぬならこちらから行くぞ。」

すると羽衣狐の背中から8本の尾が現れ、二人に襲いかかる

龍「雷浄壁…！」

瑞「水浄壁…！」

二人は各々雷と水の壁を作り出し尾を防ぐ

羽「それで防いだつもりか？」

龍瑞「何！？」

二人に襲いかかっていた尾は、8本すべてではなかった

2本だけ残っており、その2本が瑛姫と苔姫に迫る

龍「！？くそっ！！雷衣！！」

すばやく反応し、電気をまとい瞬発力を上げ瑛姫と苔姫に迫る尾に  
追いかけて二人を庇うように立ちふさがった

瑞「兄上！！」

ビシャヤアアア

血が吹き出す音がし、次にドサリと倒れる音がした

倒れたのは姫二人を庇った龍神

ではなく、瑞弥の方だった

龍神も畳に片膝をつけ左目を押さえていた

瑞弥は体に大きな風穴が空きそこからどくとどくと血が流れ出す

龍神は左目の真横を挟られ頭蓋骨が露わになっており、左目眼球を抜かれていた

龍神は痛む顔に耐えながら自分の数歩先に倒れている瑞弥の元に駆け寄る

その間無防備になる瑛姫たちの周りに雷浄壁を作り、簡単には手を触れられないようにして置いた

龍「瑞弥！！何故わしを庇った！？何故…」

ぐったりと倒れている瑞弥を抱き抱えた

瑞「ガホッ…兄上が龍神であるべきなんです…こんな出来損ないの龍が…神になんてなれません…」

瑞弥は口に戻ってくる血にせき込みながら龍神の手を強く握った

龍「何を言っているんだ！？

本当は瑞弥、お前が龍神になるはずだったんだ！！

暴君なわしが龍神になるはずはなかったんだ。

本当は才に溢れるお前がなるはずだったのに…

何故庇った！！！！

わしが居なくなればお前が龍神になるという正しい形になるはずだったのに…」

どうしてというように瑞弥を見つめた

瑞「…私は龍神になんてなれません…兄上になって正解だったんです。」

私では力が弱く皆を引っ張っていきませんから…

龍神は兄上になって当然なんです…

兄上…

いや、

弟よ。私の分…長く生きる…死ぬに、急ぐんじゃないぞ…

最後に、頼みが…ある

私の妻を頼む…

あとは頼んだ…

雷弥…」

握っていた手が床に置いた

龍「…瑞弥…いや、兄上…。

どうしてわしより先に行ってしまったんだ。」

龍神は瑞弥の落ちた手を体の上で組ませ、瑛姫たちの近くの壁により掛けた

すると

瑛「あ、あの！龍神様、よかったらこの私にその傷を治させてください。」

龍「いいのですか？」

瑛「構いません。私たちを守っていてくれたお礼だと思ってください」

二人を守っていた電気の壁を解いて目の前に座ると瑛姫は龍神の左目あたりに触れた

すると、抉られなくなっていた皮が再生し、元の形になった

だが、失った眼球は再生しなかった

そのため、左目の所にポツカリ穴が出来た

瑛姫は全てを治せなくて申し訳ないと謝ったが龍神はこれだけで十分です。と礼を言った

すると、笑いを堪えながらも笑っている声が聞こえてきた

羽「クスクス…傑作じゃ！！」

兄弟愛か？

まさか…兄、弟が逆だったとはな。

で、その兄の方が弟に劣っていたから弟のお前が龍神になったのだろっ？

とんだ出来損ないの兄だったな」

龍神は後ろにいた羽衣狐にバツと振り向いた

拳を強く握りフルフルと震え、怒りを露わにしていた

龍「瑞弥を…兄上の…侮辱は許さん！！」

龍神の手足が人の物から獣、龍の手足に変わり皮膚の所々から鱗が現れる

龍「許さんぞ羽衣狐！！」

ダンッと駆け出し、雷刀を作りだし切りかかる

バチバチッ

龍「そこをどけ！！鬼童丸！！」

龍神を止めたのは鬼童丸だった

鬼「させん！！羽衣狐様には触れさせん！！」

鏑迫り合いが続く

ギチギチ

龍「ならば…」

すると龍神の体からバチバチと火花が散った

龍「…雷撃波！！」

龍神の体から雷が四方八方に放たれた

鬼「ぐはっ！！」

「ぎゃああ  
」

その雷撃波によって鬼童丸と部屋にいたほかの妖怪の大半が雷によって焼かれたり、部屋の壁に叩きつけられ気絶していたりした

龍「許さんぞ…許さんぞ羽衣狐！！」

再び切りかかろうとしたら、龍神と羽衣狐の間あたりにあった襖が吹き飛んだ

「見つけたぜ羽衣狐!!」

襖をぶち壊して登場したのは勿論、ぬらりひょんだった

ぬ「瑛姫を返して貰うぜ」

龍「遅いぞぬらりひょん!!あれほど瑛姫を危険な目に合わせるなと言ったではないか!!」

それがまんまと連れ去られをつて…

お前はまだ魑魅魍魎の主にもなっていない!!瑛姫を自分の物してもない!!自惚れるな!!

すっかり前を見ている、このボケが!!」  
後半はなぜか説教になっていた

そのようなぬらりひょんの後ろで見ていた者達は一同にこう思っ

ていた

（総大将が怒られて気落ちしている…）

ぬらりひょんは登場して早々に説教をくらい気落ちしていた

それを見て、また一喝

龍「何、気落ちしてんじゃ！！早よう刀を抜いて構えんか！！」

龍神はすでに雷刀を出していつでも攻撃できるようにしていた

龍「行くぞぬらりひょん！！」

ダンツと駆け出し羽衣狐に迫る

龍神を追うようにぬらりひょんも駆けだした

羽「なんどやっても同じよ！！妾にその刃は届かない」

龍「それはどうかな」

龍神が振り下ろした雷刀は尾に防がれる

羽「ほら言ったではないかその刃は届かぬ」

龍神はニヤリと微笑んだ

ぬ「こつちだぜ」

羽「来るのは分かっておった」

後ろから切りかかるぬらりひょんも尾を使い後ろに弾いた

龍「今度はこつち…雷撃砲!!」

か●は●はーのポーズから雷撃の電圧が数倍、速度も数倍の雷撃砲が放たれる

はっと振り向いたときにはもう手遅れ

ズギャアアン

凄まじい雷光と爆音が響く

噴煙の中から現れた羽衣狐はなんとか尾で防いだが防ぎきれず  
二本の尾が中程から焼き切れていた

切れた尾二本は羽衣狐の足下に落ちていた

羽「おのれえやりおつたな龍神！！」

龍「わしに気を取られてていいんですか？」

ぬ「貰ったああ！！」

ぬらりひょんは懷から出した刀で羽衣狐の顔を斬った

羽「うああああああ！！妖力が！！行くな！！何年駆けてここま  
で集めたと思うとる！！行くな！！」

斬られたところから妖力が流れ出す

必死にそれを追いかけ外に出た羽衣狐

龍「ぬらりひょん！！早く追い駆けて留めをさせ」

ぬ「おう、ありがとな龍神さんよ」

ぬらりひょんは羽衣狐を追って外へ駆けだした

龍「お前が次の妖怪の主じゃ…」

龍神はそう呟いて変化していた手足を龍の物から人の物に戻した

まだ、奴良組対羽衣狐の部下の戦いは続いていたが龍神は琰姫の元へ向かった

琰姫には牛鬼がついていた

龍「琰姫…ひとつ確認したいことがあります。いいですか？」

琰「なんでしょうか龍神様？」

龍「貴女はあの妖怪が好きか？」

瑛姫はまさかこんなことを聞かれるなんて思ってもいなかった

その所為で顔を真っ赤にしオロオロと拳動不審な行動をするがピタリと停まりコクンと頷いた

龍「それが聞けて充分…。

さて、わしは上の様子を見に行くのですが…一緒に来ますか？」

まだ顔を赤らめている瑛姫はブンブンと勢いよく首を縦に振った

龍「では行きますか…牛鬼、心配なら一緒について来い」

三人は外へ行つたぬらりひょんと羽衣狐を追った

「ぬらちゃん、あんたおいしいとこ持って行き」

ぬ「うおおおおお!!」

ズバアアッ

羽衣狐の宿にしていた淀から羽衣狐が抜けた

羽『許さんぞ！呪ってやる呪ってやる！！何世代にもわたって呪ってやる！！お前の血を絶やしてやる』

こう言い残して羽衣狐はまた次の宿を探しに行った

琰「妖様！私にあなたのお怪我を治させてください」

ぬ「瑗姫！？危ねえだろこんな所来たら」

遠目から二人の様子を眺めている龍神

龍「人に恋した妖か…」

「なんや？雷ちゃんも恋しくなっただか」

龍「花開院 秀元か…」

毎度毎度その雷ちゃんと呼ぶのをやめると言っているだろうっ

秀「いいじゃんいいじゃん」

今回は流石に龍神も無傷では済まなかったみたいだね。」

龍神は眼球が抜け穴が空いている左目を覆った

龍「左目を失ったのは辛いが瑞弥を失ったことの方がもっと辛しさ……」

秀「そう…瑞ちゃんが…」

雷ちゃんには痛手だね。」

龍「ああ、かなりの痛手だが乗り越えなくては…」

わしは瑞弥の分長く生きなければならぬからな……。」

秀「君らが神獣である以上僕ら陰陽師は君らの味方だから何かあったら頼ってくれて良いからね」

龍「ああ。恐らく、わしの子孫か世話になるだろうな。そのときは頼むよ秀元。」

城に来たときは夕暮れだったのにもう日が昇り始めていた

ぬ「京は終いだ。帰るぜ!!」

そして、長かった一日が終わりを告げた

ワイワイガヤガヤ

ここは花開院家

いつも異常に騒がしかった

「いやあゝ総大将すげえなあ。

あの魑魅魍魎の主を倒して…綺麗な姫さん貰って最高だな」

「ホント瑛姫は美人だよな…

羨ましいぜ」

狒「いやあいやあ。総大将もやりおつた…。今夜は無礼講じゃな牛鬼。」

ほれ、もっと飲め飲め牛鬼よ」

牛「いや、もう…」

酒によって上機嫌の狒々は無理矢理牛鬼に酌をする

別の部屋では、秀元、龍神、ぬらりひよんの三人が酒を飲んでいた

龍「羽衣狐も死んだな…」

秀「そうだね。これで君が魍魎魍魎の主だよぬらちゃん。」

龍「何か呆気なかったな。」

そつだ、ぬらりひよんお前は魍魎魍魎の主になって何がしたい？」

ぬ「何もしないさ…わしらは闇に生きる。この先妖怪は住み辛くなるだろう。わしはただ、わしら妖怪が安心して住めるとこれを作ればそれで充分さ」

秀「欲がないね…もっと貪欲かと思ったけど違うみたいだね。」

龍「そうだな。」

さて、わしは一足先に帰るとするよ。」

ぬ「もう帰るのか龍神よ。」

秀「かなりお早い帰りやな。」

龍「ああ、部下の者が帰りを待っているからな…。それに、瑞弥を故郷に帰してやりたくてな」

ぬ「そうか…。」

そうだ！！帰りにこの酒持って行けよ。あんたの弟にもあげてくれ。」

ぬらりひょんは龍神に酒瓶を渡した

龍「…ああ。ありがたくいただくよ。」

秀元、言ったこと頼むな。」

秀「分かったよ。任せてな。」

ほな、また会おうな雷ちゃん」

龍「雷ちゃん言うな。」

じゃあな、ぬらりひょん。

何かあれば頼ってくれて構わないからな。

またな。」

龍神は貰った酒瓶を持ち、部屋を出た

そして瑞弥が居るところへ行き、自分の屋敷に帰った

## く式拾式く（後書き）

これで昔話は終わりになります。

次は現代に戻ります。

もう、龍神についてお気づきの方もいるかと思いますが一様説明しておきます。

龍神は元は水を司っています。

だから、瑞弥が龍神というのは本当に正しいことなんです！

実はこの設定はつい最近になって考えた物でした。  
辞書で調べていたらこれは使えると思って使いました。

週1のペースを目指してがんばります。

出来るか分からないのですが頑張ります!! (↑おい

応援よろしくお願いしますm ( (m

では、また次回お会いしましょう

く式拾参く（前書き）

現代に戻ってからのお話です。

頑張れば週1のペースで行けそうです！

話に詰まらない限りですが…

まあ、頑張ります！！

では、どうぞ

く式拾参く

龍「あれが初めてぬらりひょんと会ったときだったな…。懐かしいのお」

リ「へえーそんなことがあったんだな…。」

翠「知らなかったよ。」

龍「そりゃそうだろ。なんせ今から400年も前のことだからな…。そう考えるとわしも老けたな。」

さて、夜も更けた。今日はこれで終いにしようか」

龍神のいうように昔話をしていたら、いつの間にか丑三つ時になっていた

翠「そうだね。今日はこれでお開きだね。曾お爺様、昔話聞けて良

かったです。また、次私が帰ってきたときに聞かせてください。」

龍「ああ、いいよ。さあ、子供はもう寝なさい。」

翠「おやすみなさい、曾お爺様。」

リ「話が聞けて良かったぜ。また聞かせてくれ。」

龍「おやすみ二人とも…。」

翠雨とリクオは立ち上がり部屋を出ていった

翠「昔にあんなことがあったんだね…」

リ「そうだな。俺も初めて聞いた話だ。」

翠「リクオも初めてだったんだ」

クスリと笑う翠雨

リ「何笑ってんだ？」

翠「いや、何でもないよ。」

またクスリと笑い、翠雨はおやすみと言って自分の部屋に入った

リクオも翠雨の隣の部屋、自分の部屋に入った

「何を笑っておられるのですか？」

翠「ささ美か…もしかして起こしちゃった？」

部屋には普段の服ではなく単衣を着たささ美がいた

さ「いいえ。少し寝付けなかったもので…」

翠「そつか。」

翠雨は布団を敷き、ささ美同様単衣になる

そして、行灯を枕元に持ってきて布団に入った

翠「ささ美…私の組を見てどう思った？」

翠雨は眠たく重い瞼をしつかりとあげ聞いた

さ「…そうですね。あくまで私の意見ですが…、

とても力を持っていると思います。夕餉の片付けの時に翠雨様に抱きついた双子…。

見かけによらず妖力が多かったことから強いのでしょう…。」

翠「雪と炎ね…。確かにあの子達は強いね。なんせ私が稽古を付けたからね。

まだまだ甘え盛りだけどきつとこの龍組を支えてくれる子になる。

ほかに思ったことがある？」

さ「いいえ。特にはないですね。

どうして、そのようなことをお聞きに？」

ささ美は突然真面目な質問をされたので内心驚いていた

翠「たまに分からなくなるんだ…。私がしてきたことがあっているか。

だから、客観的な意見がほしかったんだ。」

さ「大丈夫ですよ。選択に迷ったときは自分が思うことをするのが一番良いと私は思います。」

翠「そっか…。ありがとうございます美」

翠雨は悩みが晴れたようにスッキリとした顔だった

さ「あの、翠雨様…」

翠「ん？どうしたの？」

ささ美が少し言いづらそうに続けた

さ「あの…翠雨様は、

リクオ様のことが好きですか？」

翠「また随分とズバツと聞いたね…」

ポリポリと頭を掻き話をそらそうとする

だが、ささ美がそれを許すはずがなく煌々と輝いた目で追いつめる

さ「で、どうなのですか？どうなんですか？」

翠「…はあ、ささ美には適わないね。

好きだよ…あのときからね」

翠雨は珍しく顔を少し赤らめ恥ずかしそうにしていた

さ「あのときとは？」

翠「私、小さい頃は奴良組にお世話になっていたんだ。

4年位前かな…私が龍組の当主になる修行で奴良組から離れるときがきたの。

そのとき私、リクオのことが好きなんだなって思ったよ。

離れたからこそ気付いたんだ…

そう思ったら、辛い修行でも耐えられた

誰よりも強くなりたいてって思ってね…私がみんなを守るって…」

さ「そうだったんですね…。良いですね。

そう思い合っているなんて…」

最後は翠雨に聞かれないよう小声で囁いた

翠「ん？最後なんて言った？」

さ「い、いいえ。何でもないです。」

翠「そう…ならいいや。」

もう私寝るよ。」

さ「そうですね…おやすみなさい翠雨様。」

翠「おやすみささ美…」

枕元に置いておいた行灯の火を消し眠りについた

翠雨と分かれたあとのリクオはというと

リ「なんで、お前等が俺の部屋にいる？

黒羽丸、トサカ丸。」

そうリクオの部屋になぜか黒羽丸とトサカ丸がいた

羽「若に聞きたいことがありますて…」

ト「単刀直入に聞きます…」

若は、翠雨様の事「好いてるよ…幼い頃からずっと。おめえらには渡さないからな」

トサカ丸を遮り、自分の思いを言ったりクオ

羽「大丈夫です。我らは手は出しませんから…」

黒羽丸とトサカ丸は顔を見合わせうなずきあった

ト「何故今、翠雨様のことを確認したかという…」

羽「先程、雷牙様と翡翠様が話しているのを聞いたのです…」

黒羽丸が聞いた物はこうだった

雷『そういえば…彼、少し見ないうちにまた凛々しくなったな。』

翡『そうですね。私も驚きました。彼なら十分翠雨を支えることが出来ますね。彼を選んで正解でしたね。』

となれば…時期が来たら翠雨を娶って貰いましょう。』

雷『そうだな。そうすると…あの里の人たちに挨拶をしなくては行けないのか…』

あの里苦手なんだよな…。』

翡『でも、ちゃんとやらねば翠雨が認めてもらえませんよ。』

雷『うゝ…。まあ、いざとなったら実力行使で行くか…。』

翡翠『駄目ですって……。』

翡翠はクスクスと笑い、雷牙もつられてガハツハと盛大に笑った

羽『…と言う話がされていました。翠雨様はどこかの里に嫁入りを  
するのではないのですか？』

リ『だから、どうかに嫁入りをする前に俺が娶らないのか？って言  
いたいんだろ？』

羽『そうです…。』

リ「大丈夫…もし、翠雨がどっかに嫁ぐ事になったら、

ちゃんと嫁ぐ前に振り向かせて俺の側に置いておくから問題ないさ」

リクオは自信満々の様子

羽「そうですか…なら、問題ありませんね。」

ほっと一安心した様子

リ「お前等が心配するようなことじゃないだろ？」

ト「いえ、翠雨様が幸せであることが私たちの喜びですから…」

トサカ丸は少し顔を赤らめ俯きかげんにポツリポツリと呟いた

リ「あいつ皆から愛されているよな…」

ほら、話は終わっただろ。部屋に戻れ。俺は寝るんだから邪魔するなよ。」

こう言うと黒羽丸とトサカ丸は部屋を出ていった

リ（翠雨がどっかに嫁ぐ…そうだよな…。翠雨は、龍組の当主なんだから良い相手があるんだもんな。

あんな昔の口約束覚えている訳ないか。

でも、そんな約束が無かろうと翠雨を側に置きたい…。俺の側に…。

リクオはこう想い、眠りについた

そして、また夜が更けていき長かった一夜が終わった

く式拾参く（後書き）

はい…

なんか後半が昼ドラにありそうな感じになってしまいました；

リクオがあんなことを言うなんて…

書いていて、こんなこというか？と考えてしまいました…。

さて、次は原作沿いに戻していこうと思います。

時間があれば閑話として、このあとのオリジナル話を書きたいと思っています。

では、またお会いしましょう

く式拾四く（前書き）

今回は少し短めです。

では、どうぞ

く式拾四く

4日程、翠雨の故郷でのんびり過ごした

今日は浮世絵町に帰る日

日がまだ上りきっていない朝方  
玄関先に荷物を持っている二人

すると

「と〜お〜しゅ〜!」

翠雨に抱きつきゆさゆさと揺らす雪

雪「もう帰っちゃうの!?!もう少しここにいて!」

炎「雪…翠雨様だつて忙しいんだよ。」

雪の後ろにいた炎が雪を翠雨から引つ剥がそうと頑張る

翠「ごめんね雪…もう帰らなきゃ行けないの。」

次の休みはお正月。また、戻ってきたら一緒に遊ぼう？

それまでちゃんとやることやって待っていて。」

雪「イヤだよ…冬までまだいっぱいあるよ」

炎「雪、我が儘を言っちゃ駄目だよ！

寂しいのはみんな同じなんだから…

ちゃんとやることやって翠雨様をお迎えしてあげよ？」

雪「うゝ…。分かった…。

雪、ちゃんとやる。」

洪々といった様子

翠雨は腰に抱きついていいる雪の頭を愛おしそうに撫でた

翠「うん。いい子にして待っていて。」

お正月はみんなで遊びましょ」

翠雨に抱きついてた雪が名残惜しそうに離れた

翠雨とリクオは玄関までお見送りに着ていた父・雷牙、母・翡翠、  
龍神の三人に向き直った

リ「お世話になりました。」

リクオは三人に向かい頭を下げた

龍「またいつでも遊びに来なさい。」

雷「そうですね。」

また泊まりにおいでリクオ君」

翡「いつでも歓迎するわ

それと翠雨をよろしくね。」

リクオは少し赤らめ、はい。と返事をした

翠「それでは行って参ります。

私の留守中、組を頼みます。」

翠雨はそれだけ言って行き同様、龍の姿になり荷物とリクオを乗せ  
飛び立った

朝焼けを眺めながらの空中散歩

翠『風とか大丈夫寒くないリクオ?』

リ「大丈夫だよ。それより翠雨こそ平気？」

翠『全然大丈夫だよ。心配性だね』

クスクスと笑い出す

リ「そ、そんなに笑うことないじゃん！」

翠『クスクス…ゴメンゴメン

だから、そう怒らないで』

リ「元はといえば翠雨がいけないんだよ。

風とか大丈夫？って…僕どれだけひ弱なの…。

大丈夫なのに…。翠雨のほうが僕より心配性じゃないか」

翠『確かにそうだね。

リクオが大丈夫って言うなら少しスピード上げるよ』

翠雨の口元がニヤついた

リ「ちょっと待った翠雨！」

翠雨のたくらみのある笑みに気付いたリクオが制止をするが

それを無視しまた翠雨がニヤついた

すると今まで悠々と飛んでいたのがスピードを上げ、風を切るようになった

リ「はっ速いよおお翠雨！スピード落としてえええ！！」

リクオは落ちないようにしっかりと翠雨にしがみつき悲痛な叫びをあげるが翠雨は全く聞こえていないというように無視

暫くすると元の悠々としたスピードになった

翠雨は少し笑いながら  
翠『リクオ…大丈夫？』

リ『…大丈夫だよ。』

翠『今の間は何？』

リ『気のせいだよ…。』

本当は寒くて寒くてたまらないリクオだが、寒いと言えばまた翠雨に何か言われると思い我慢した

だが、そんなこととうにお見通しの翠雨は

翠（本当はかなり寒いだろうに…やせ我慢して。

そう自分の弱いところを見せずにしているとこれから大変になりそう…。ちゃんと自分の事を理解しないと、人と妖怪の血を持つ人は苦勞するんだよね…。

私もかなり苦勞したし…ね。）

翠『もうそろそろ本家到着だよ』

リ「え！？早くない？」

翠『そりゃそうだよ。さっきのスピードは普段のスピードの5倍はあるもん。』

リ「……………」

翠『ほら、もう着くよ』

翠雨は中庭にドスンと音を立て着地した

その音を聞きつけ中庭に顔を出し始める妖怪達

つ「お帰りなさいませリク才様！翠雨様！」

元気よく出迎えたつららに続き、青、黒、首無、毛倡妓が出迎えた

首「お帰りなさいリクオ様、翠雨様」

風が吹き翠雨の鱗がパラパラと散って妖怪の姿に変わった

翠「ただいま戻りました。お出迎えありがとうございます。御座います。」

リ「ただいまみんな。」

組は変わらない？」

黒「大丈夫です。ご心配なさらず」

翠雨とリクオが出迎えた人をお礼を言って屋敷に入る

翠「なんか随分とここを離れていた気がする…」

リ「そうかな？僕には変わらないんだけど…」

すると廊下の向こうからリクオの母、若菜さんがこっちに向かって

くる

若「今帰ったの？」

翠「ええ、つい先程帰ってきました」

若「そうなの！？お帰りなさい二人とも

そうだわ！昨日、リクオの友達の清継君から電話があったわ。

なんでも、近々探偵団の方でどこかに行くみたいよ」

リ「清継君からか…一体なんだろう？」

翠「どうせまた妖怪探検でも行くんじゃないの？まあ、連絡すれば分かることだしね」

リ「後で連絡してみるよ」

リクオと翠雨は若菜と別れ、自室に戻った

―翠雨の部屋―

翠（帰ってきたんだな…）

翠雨は荷物を部屋に置き背伸びをした

翠（くっっ…

雪と炎大きくなっていたなあ

まだまだ甘え盛りだけど。

そういえば、初めて曾お爺さまの昔話聞けたな…

あの左目は羽衣狐にやられたんだよね…。

そして、曾お爺さまの兄弟も…。

羽衣狐、一体どんな妖怪なんだろうか？

曾お爺さまの左目を奪うほどの強さ…。

神を傷つけるなんて大罪にも程がある！

私が曾お爺さまの左目の仇をとってやる…。

（

—リクオの部屋—

リ（楽しかったなあ。あれが翠雨の故郷なんだ。凄く森の中だったね。

あの森で4年近く修行していたんだよな…

だから、あんなに強いのかな？

僕も見習わないと…）

密かに決意を固めたリクオであった

く式拾四く（後書き）

はい、なんか最後が無理矢理終わらせた感じがします…。

どうしても、翠雨に羽衣狐とバトルをさせたかったので若干こじつけをしちゃいました

すみませんm（――）m

次は邪魅？と会います。

まあ、2、3話で纏めたいと思います。

では、また次回

く式拾伍く（前書き）

原作が手元から無くなってしまつて更新が少し遅くなっています。

本当に申し訳ないです（――）

自宅の引っ越しの際にマンガは手持ちで持つて行く予定だったので  
すが、手違いで家から離れた倉庫に持つて行かれました（TOT）

そのため、私、にゃんこの脳みそにある記憶から書いているので、  
少し話が違ふ可能性があります。ご了承ください。

では、どうぞ

く式拾伍く

本家に帰ってきってから3日後…

現在地は浮世絵町から離れ、とある港町にきている

翠「なんで私もこんなところにいるの…」

リ「しょうがないよ。翠雨も清十字怪奇探偵団の一員で、初めての依頼なんだから…。」

つ「そうですよ、翠雨さん。初めての依頼ですしちゃんとやらなくては…。」

「元氣出してください。」

遡ること2日前、

本家に帰ってきた日の翌日

ピンポン

玄関から呼び鈴が鳴る

清「奴良君！。帰ってきているんだろっ?」

玄関から清継の呼ぶ声がする

翠「リクオなら出かけていて居ませんよ」

出迎えたのはちゃんと人の姿になっている翠雨

清「あれ?どうして龍君が居るんだい?」

翠「今、私の両親が長期の旅行に行っているので幼なじみのリクオの家にしばらくお世話になっているんです。

で、清継君は一体何しにきたの？

さっきも言ったけどリクオは今不在だよ。」

清「なら、連絡する手間が省けたよ。

龍君から奴良君にも伝えて置いて。

清十字怪奇探偵団に初依頼があつてね。

それで、明後日……つまり2日後にその依頼主の所に行くから準備していてね。

拒否権はないから、全員参加だよ。

それじゃあ、奴良君にも伝えて置いて

では、また明後日会おう！！」

翠「……………」

清継は用件だけ言って去っていった

翠（あいつ何なんだああー！！毎度毎度：私が拒否権を使おうとすると阻止する！！）

あああああ！！やっぱり、あいつ苦手だ！！（

つ「どうかしましたか翠雨様？」

たまたま通りかかったつららが放心状態で立っている翠雨に声をかけた

翠「丁度良いところに！！つららはリクオの為なら、どこへでもついて行くよな？」

つ「はい！若のためならどこへでもついて行きます！！」

翠「それなら、明後日一緒に来て！！」

そして、今に至るというわけだ

因みに、今日はゆらは来ていない

なんでも修行をするから行けないとの事だ

清「ええと、確かこのあたりのはずなんだが…」

清継は手にしたメモを見ながら依頼主の自宅を目指して歩いている

リ「あ、依頼主ってあの子じゃない？」

リクオが指さした方には、ある家の門に寄りかかっていたメガネでおさげをした女の子が1人いた

すると、門にいた子がこちらに気づき駆け寄ってきた

「貴方たちが清十字怪奇探偵団の人？」

清「君が依頼主の菅沼品子君だね？」

品「ええそうです。さあ、どうぞ。話は中めます。」

品子は皆を家の中に案内した

ある一室に通された

そこには品子の母親と住職がいた

品母「またお被いの人連れてきたの？昨日住職さんにお被いして貰ったじゃない」

品「全然効果がないんだもの！！だから、私なりに調べて頼んだのよ。」

少し言い合いになる

その様子をただ見ているほかの者

すると、痺れを切らした清継が話しかけた

清「で、品子君今回は一体どんな内容なんだね？」

品「…これを見てくれる？」

品子は腕に巻いていた包帯をはずした

包帯の下には痣があつた

大きな手で掴まれたような痣

翠（殺気や殺意は感じられないからひとまず安心かな）

巻「何それ？痣じゃん」

品「今までは手を出さずにただ私の目の前に立っただけなのに……こないだは腕を掴んできたのよ。これはそのときの痣。

ねえ、お願い！！この痣をつけた妖怪……邪魅を退治して。」

島「邪魅？」

名前だけ言われ首を傾げる島、家長、巻、鳥居の四人

清継はうーんと唸って記憶の中からその妖怪を探している様子

リクオと翠雨とつららの三人は顔を見合わせプチ会議中

リ「（コソコソ　ねえ、邪魅って知ってる？」

つ「（コソコソ　私は知りませんね。」

翠「（コソコソ 邪魅でしょ？私、聞いたことあるよ。それなら確か…」

翠雨が邪魅について話そうとしたら、部屋にいた住職が邪魅はね…と邪魅について説明しだした

住「邪魅という妖怪は、元は人だったんだ。

邪魅…いや、人の時の名を…

（割愛）

という妖怪だよ。邪魅は主を恨んで妖怪になった。だから邪魅は、主を殺したいんだろう。でも、当然主は死んでいる。

それで狙ったのが主の直系の子孫に当たる品子ちゃんなんだよ。」

（↑すみません、説明が長かったので割愛しちゃいました。本当にすみませんm（＿）m b y 作者）

住「さて、お被いしてもまだ邪魅がでるようだから…このお札をあげるよ。

本当は使いたくなかったんだけどね…品子ちゃんのためだから。

このお札はとても強力なものだよ。部屋の四方に貼って夜寝なさい。お札を四方に貼ったら部屋の外から中に入ってはいけない。

入ったら効果がなくなっちゃうからね。

それじゃあ、また明日くるから。」

住職は四枚のお札を残し、帰って行った

品「あの住職…どうも胡散臭いのよね。

みんなは今日、私の部屋の隣に泊まっていって。」

品子は皆を部屋に案内した

翠（あのお札…結界系のお札と違う。式紙の札だ…。

怪しいなあのお住職。一体何者なんだ？警戒しないと）

く式拾伍く（後書き）

話が短くてすみませんm（―――）m

次は実際に邪魅が登場する予定です！！

たしか、邪魅ってすごく無口で原作だと少ししか話していなかった  
気がします…

次で邪魅の話は終わりにしたいと思います！！

では、また次回お会いしましょう

〃式拾陸〃（前書き）

お待ちしました

m ( — — ) m

今回は普段と同じくらいの長さです。

前回がやけに短かった所為で今回書くのが大変でした。

では どうぞ

〱式拾陸〱

品子に連れられた二部屋、男子組と女子組に別れて使う

男子組は夜、家の中を巡回するらしい

一方女子組は普通のお泊まり会となっていた

寝るまでは品子も女子部屋にいてワイワイと話し込んでいた

だが、寝る時間になると品子は隣の自分の部屋に帰った

カ「品子ちゃん大丈夫かな？」

巻「あの住職からお札貰ったから平気じゃない？」

鳥「そうだよ。きっと大丈夫だって」

翠「（ボソッ　本当にそうかな？」

翠雨は聞き取れるかどうかの大きさに呟いた

力「？翠雨何か言った？」

翠「いや、何でもないよ。」

もう寝ようよみんな。夜通し起きていると体が保たなくなるし……」

つ「そうですよ皆さん。今日は寝ましょう」

及川ことつらが追い打ちをかけ皆を寝かせた

みんなが眠りについたらを見計らい翠雨とつらが布団から這い出てきた

つ「翠雨様、これからどうしますか？」

翠「そうだね。取り敢えず…つらはここに残って夜中にみんなが起きたらどうにかして、この部屋から出さないようにして。」

私はあの住職について少し調べてくる。」

つ「分かりました。くれぐれも無理はしないでくださいね。」

翠「クスッ

分かったよ。それじゃあよろしくね」

翠雨は少し微笑んで立ち上がり部屋を出た

部屋から出ると翠雨は一瞬に妖怪の姿に変わる

翠「さて、住職のところに行く前にリクオに一言行っていくかな？」

気配を探りリクオの元に向かった

ある廊下を曲がるとリクオが少しキョロキョロとしていた

翠「何してるのリクオ？」

リ「ああ、翠雨が…。

邪魅を追っていたんだが見失っちゃった」

少し残念そうにするリクオ

翠「邪魅は恐らく品子の部屋に行ったと思うよ。

邪魅はそう言う妖怪だから…

そうだ、リクオ。私これから黒幕…住職の所に行くから。何かあればこっちにきな。

この邪魅騒動が解決すると思うから…。

じゃ、よろしく」

翠雨はニツコリ笑い踵を返し来た道を戻り、住職がいる寺を目指した

カラン

コロン

カラン

コロン

静まり返った町に翠雨が歩く音が響く

カラン

コロン

カラン…

コロン。

翠雨の目の前には寺に向かう長い階段が続く

翠「ここか…」

カランコロン

カランコロン

階段を登り本堂に歩み寄る

すると本堂の中から話し声が漏れていた

「…たね。これ……帯が……に……ますよー！……ほ……あり……ご……た。  
これも……しよくの……げです！」

「…いや。…大した…ないですよ…ただ、約束……守っ……さいよ」

翠（密談現場発見！もう少し探ってみるか…）

翠雨は本堂の中に忍び込み闇に紛れ聞き耳を立てる

「しかし、こんな紙切れであの家の住民追っ払えるんですかい住職さんよ？」

住「紙切れとは失礼ですね。これは式神ですよ。陰陽師家、花開院家で修行してきたのですから…」

住職は自慢げに式神をちらつかせた

翠（やっぱり…あの住職、陰陽師か。しかも花開院家の人…。花開院家は何をしているんだ？式神を悪用する人を外に出すなんて…）

翠雨は少し呆れ顔

すると背後によく知った気配が現れた

振り向くとそこには柱に寄りかかったリクオがいた

翠「（ヒソヒソ 来たんだ…で、そっちはどうなの？」

リ「（ヒソヒソ 問題ねえよ。そっちはどうなんだ？」

翠「（ヒソヒソ あの住職は花開院で修行して式神を使えるようになったみたい。

それを土地を買い取るために式神を使って住民を追い出しているみたい。

ちょっと懲らしめようか」

翠雨は企みある笑みをリクオに向けた

翠雨の笑みを見てリクオも笑った

リ「（ヒソヒソ　そうだな。ちょっとばかりやるか…」

二人は幼い子供のようにクスクスと笑う

すると、本堂にきていた893さんの1人が笑い声に気づき叫ぶ

「誰だっ！！」

翠「見つかったね…」

まあ、どうせ表に出るつもりだったしいいか」

カランコロンと下駄が鳴り

翠雨がニコツと笑いながら柱の陰から姿を現す

「なんだ嬢ちゃんじゃねえか…」

おい、嬢ちゃん。なんでこんなところにいんだ？」

カランコロン

翠「さて、何故でしょうか？」

翠雨はニコニコとしながら本堂の真ん中に歩いていく

「嬢ちゃんふざけてないで答えてくんねえか！？」

「じゃないと痛い目見つぞっ！！」

翠「そう怒らないでよ。」

私はこの町で起こっている邪魅騒動を解決するために来たんだから…

で、その騒動を作ったのが貴方たちでしょ？

まあ、主だっているのが住職さんでしょ？」

「「「！！？」「」」

翠雨の言葉に驚きを隠せない人たち

翠「その反応から肯定してるって受け取るよ。」

こっちは貴方たちの所為で迷惑している者がいるのよ。

どうしてくれるの?」

翠雨はニコツと笑っているが目は笑っておらず、足元でバチバチと電気が走った

それを見た893さんたちは怯え逃げようとする

「ばっ化け物だ!」

すると出ようとした扉の横の柱がスパンッと切れ逃げ道を塞いだ

り「俺たちは化け物とは違うぜ。俺たちは妖怪よ。」

翠「そうそう、化け物なんて失礼しちゃう。

で、その彼が…本物の邪魅。」

翠雨は住職たちの真後ろを指さした

ゆっくりと指さされた方に顔を向ける

そこには札で顔が見えない大男が刀を手に提げたまま住職たちを見つめていた

「「「ひゃあああ！」「」」

驚き出口へ向かうが

翠「駄目だよ逃げちゃ」

翠雨は指を鳴らす

すると本堂の扉という扉に電気の格子が張り巡らされた

り「さて、この騒動どう落とし前つけてくれる？」

それから、本堂から悲鳴が響きました。（作文風ww）

三人は清々しい表情で品子が待つ寺の裏に向かった

品「あ、あの！」

翠「住職たちならちよびつと懲らしめてやったから、もうこの町には来ないと思うから安心して」

翠雨はにっこりと微笑んだ

すると品子は

品「あ、あなたは？」

見たことのない人がいるから当然翠雨に問いかけた

翠雨はリクオの事を指さしながら、

翠「私はこの人の仲間だから安心して」

リ「この人って…」。

そんなことより、

こいつが本物の邪魅だよ。

邪魅はただ主を守りたかっただけなんだよ。」

リクオは後ろにいた邪魅を品子に紹介し始めた

邪魅とリクオが品子と話しているうちに翠雨は三人から離れ、

気付かれないように裏にある森に入った

翠「…っ！…ハアハアっ！！…」

苦しげに胸元を押さえながら木によりかかる

翠（やっぱり人に手を出すのはまずかったか…）

翠「…ハア…ハア…」

リ「！？おい！！どうした？大丈夫か翠雨！！」

心配そうに駆け寄ってきた

翠「…大丈夫だから、気にしないで」

胸を押さえながらも、心配させまいと笑って見せた

リ「そのどこが大丈夫なんだよ！？

何があっただんだ！？」

翠雨の肩を抱き、顔をのぞき込んだ

リ「いったい何があったんだ？  
さっきまでは大丈夫だったじゃねえか？」

翠「…これは犯した罪に対する痛みだよ。」

まだ痛む胸を押さえながら話す翠雨

翠「本来、神は人に手を下してはならない。神獣も同じね。  
人に手を下すと罰が当たる

今回私はあることが、神、仏に使える人に手をあげた。

だから、罰が当たったんだよ。龍神の血を引いているから私にもその罰は有効なんだよ。」

痛みがだんだん和らいできたので、大きく深呼吸をしてまた話し出す

翠「この痛みは人に手をあげた分だけ増していくの。今回は懲らしめただけだから、これだけで済んだんだよ。

もし、人を殺めてしまったら恐らく…私は死してなお苦しむと思う

よ。

まあ、これは仕方がないことだから気にしないで……」

胸の痛みも治まり、普通に笑いかけた

翠「もう大丈夫だから。  
心配しないで

帰ろう

みんなの所へ……。」

大丈夫といい、微笑んだ

翠雨はリクオの手を引き、町へ戻った

そのとき、リクオが悲しげな表情をしていたが、前を歩く翠雨は気付かなかった

く式拾陸く（後書き）

後半がグダグダになってしまいました…（――）

なるべく週1で更新できるよう頑張りますが、

次から、少し遅れてくると思います。

すみませんm（――）m

次からは原作＋アニメ沿いになってくると思います。

まあ、対して変わらないと思うのですが…。

私、にゃんこの記憶が途切れてきたのでアニメを参考に書き進めて行きます。

長々とすみません

では、また次回お会いしましょう

く式拾七く（前書き）

メリークリスマス

初めに…

申し訳ありませんでした！m（―――）m

週1ペースで更新しますとか、抜かしときながら、まったく出来ませんでした

変に期待を膨らますようなことと言ってすみませんでしたm（―――）m

では、さっそくどつど

く 貳拾七 く

邪魅との一件が終わり、浮世絵町に戻ってきた

今日は邪魅との一件の時に居なかった、ゆらに報告をしよう!と言  
うこととなり

みんなでゆらを捜していた

リクオと翠雨は二人で町中を歩いて探していた

リ「花開院さん、見あたらないね…。」

どこにいるかな?」

翠「すぐにゆらの所に行きたい?」

リ「そりゃ、見つければ探す手間が省けるからね。翠雨分かるの?」

翠「私を誰だと思っているの?」

覚えた気なら探そうと思えば探せるよ。

じゃあ、さっそくゆらの所にいこうか」

翠雨は目を閉じ、深呼吸を一つ

次に目を開けると、翠雨の瞳は人の時の金色から妖怪の時の青色に変わっていた

髪の毛はうつすら金色になっていた

翠雨はキョロキョロと辺りを見回す

翠（見えてきた見えてきた♪）

翠雨の目には空気中に白く輝く靄のようなモノが筋になって浮かんでいた

り「何してるの？」

翠「今、ゆらの気を目で見えるようにしたんだ。

これから、それを辿って発信源のゆらの所に行くよ

ほら、リクオ。早く着いてきて」

翠雨はどんどん人をかき分け靄を辿っていく

リ「あっ！待ってよ翠雨！！」

遅れてリクオもついて行く

しばらく町中を歩いていたが次第に人気がしなくなってきた

リ「ねえ、こっちであっているの？

全然人気がないんだけど……」

翠「あつてるよ。だんだん気が強く漂っているからこの辺りに居るはずなんだけど…」

二人はキョロキョロと見回すと一つの廃ビルを発見した

リ「あの廃ビル怪しいね…」

翠「確かに…あのビルから気が漂っているからあそこだよ」

壊れている壁から顔を出し、中を覗く

そこにいたのは…

ゆ「あああ！！だめやだめや！！」

全然できとらん！うちには才がないんやろつか？

いかん！弱気になったらいやん！！」

と、なにやら修行中の様子

翠「何やっっているのゆら！！！！」

いつの間にか壁から出てきてゆらの近くにいた

ゆ「うわああっ！！翠雨！？

吃驚したやないの！

なんでこんなところに居るん？

それに奴良君も居はる…」

リ「バレてたか…」

翠「ゆらを探していたんだよ。」

こないだの探偵団への依頼のとき来なかったでしょ？

だからなんかその報告をしようってことになったんだ。

それでゆらを探していたんだよ」

わかった？と首を傾げる翠雨に、

よう分かったと返事を返す

しばらく他愛もない話をしていると

翠（…強い気が二つ…こっちに近づいてきている…）。

翠雨が思った通り、二人の男が三人の前までやってきた

ゆ「竜二兄！！？どうしてここに？

それに隣にいるの誰や？」

竜「こいつは魔魅流だよ。昔よく遊んだろ？今回、お前の新しい兄ちゃんになったんだよ。」

で、何故今回着たかというとな  
お前を連れ戻すために着たんだよ…。

それより…

ゆら、そこにいる奴らは誰だ？」

竜二はゆらの隣にいるリクオと翠雨を見て言っていた

ゆ「二人はうちのクラスメイトや」

竜「ゆら、お前分かっていてそんな奴らと仲良くしているのか？

そいつら…妖怪だぞ。

妖怪は悪だ。妖怪を見つけたらどうしろと教えた？」

ゆ「何言つとる！？人間だよ

なあ、そうやる？

奴良君あんたは人間だよね？」

ゆらはリクオに向かって眼差しを向けた

リ「……そうだよ。僕は人間だよ」

ゆ「ほら！！奴良君は人間や！！」

竜「なら、そっちの女はどうなんだ？」

ゆ「！……………」

ゆらは翠雨が妖怪であると知っていたからどう答えていいか分からなく黙ってしまった

竜「答えられない……。妖怪だと分かっているんだろ

そっちの方がそっち（リクオ）より、厄介なんじゃないか？

そいつは妖怪なんだろ？

ゆら、お前はそれを分かっている仲良くしている…

陰陽師として、あるまじき行為。

今ならまだ許す、京都に戻れゆら。」

ゆ「違う！！翠雨は…」

竜「まだ言うか…

ゆら、お前がそいつらを滅さないから変わりに俺らがやってやるよ

魔魅流…」

すると竜二の隣にいた長身の男が手に札を持ち、翠雨に迫った

翠雨の顔面まで、手が伸びてきたとき、雷光と共に凄まじい轟音が二人の間に落ちた

ピカッドツカアァン

「無礼者！！手を降ろしなさい陰陽師！！」

雷光の中から姿を現したのは、雷獣の煌だった

金色の毛が逆立ち、ご立腹の様子

竜「…雷獣？どうしてここに…」

珍しく目を見開き驚きを隠せない竜二

威嚇を続けながら、若干殺気を放つ煌

煌「このお方を誰だと思っているのですか！？

この方は「煌！！もういい。やめなさい。」

翠雨様しかし…

「もういいと言っているでしょ？引きなさい。」

…分かりました」

鋭い視線で煌を制し、煌を下がらせた翠雨

翠「かれらは私が何者か知れば気が済むでしょう。」

翠雨は隣にやってきた煌の頭を一撫でした

煌は渋々と言ったように頷いた

翠「私は…」

一端ここで区切りると

翠雨の足下から風が吹き上げ、パラパラと鱗のようなモノが舞い上がる

その鱗が夕陽に照らされ黄金に輝きながら散っていく

風が治まるとそこにいる翠雨は妖怪の姿になっていた

金色の髪が風で靡き、キラキラと輝く

翠「妖怪任侠一家、龍組二代目当主。

並びに龍族の長をしている龍 翠雨です。以後お見知り置きよ花開院家の陰陽師さん。」

ぺこりと頭を下げる翠雨

それを訝しげに睨みつける竜二

竜「任侠者か…。それに龍族の長…。

（とんでもない奴と会ってしまったな…。どうするか…。確か龍族の長は人の身で龍神の血を継いでいるとか…。

それで荒くれ一族を纏めているとか…

極めつけは、大国主命から人神の許可も貰ったとか…。本当なのか？）」

翠「本当ですよ。疑われるなら、花開院家当主の秀元殿に聞かれると良いですよ。人神の許可を頂いたときに秀元殿もその場に立ち会っていましたから。」

翠雨はにっこりと微笑んだ

竜「！？（心を読まれた！？）」

翠「ええ、貴方の心を読みました。貴方は外見に出さない分内面で強く思っていますから簡単に読めます。」

竜「わざわざ京都へ戻っている時間がないんでね…。できれば、この場で証明して欲しいんだが…。」

竜二は羽織の中に手をいれ腕組みする

翠「これは証明になりますか？」

翠雨は片手だけを龍の鋭い爪を持つ手に変化させた

翠「全身を変化させてもいいのですが、大きいのでこれだけで…。」

竜「…取り敢えずは分かった。」

あんたはいいとして、そっちはどうなんだ？」

今度はリクオを睨みつける

リ「…僕は……」

翠（さあ、リクオどうする？）

リ「…僕は……。」

竜「言えねえのか？」

まあいい。」

すると竜二は羽織から手を出した

手には竹筒の水筒があり、その栓を抜く

竜「くられ餓狼」

水筒の中から水が意志を持ったように溢れリクオに襲いかかる

リ翠ゆ

「「「!!?」「」」

いち早く反応したのはゆらだった

ゆ「なにすんねん!!」

ゆらは札を展開しリクオと翠雨に水がかぶらないよう二人の前にでる

ゆら自身は少し水をかぶってしまった

竜「何って…そいつの化けの皮を剥がすんだよ。」

駆ける餓狼」

すると、ゆらの口から水が吹き出した

ゆ「がはっ！」

翠「ゆら!!!?!」

膝をつきせき込む

り「……手出しするなよ翠雨。」

突然、隣からさっきまで聞いていた声とは違つが聞き慣れた声でした

翠「なるべく手出しはしないから安心して…」

夜の姿となったリクオは左手にゆらを抱えていた

リ「なるべくかよ…」

翠雨はリクオの腕の中にいるゆらを受け取り後ろに下がった

竜「それが本当の姿か…」

まあ、妖怪は滅するだけだからな」

竜二は羽織からまた水筒を出した

竜「式神融合」

二本の水筒の中身を混ぜ合わせるように流す

竜「なあ、ゲームをしないか？」

三分、俺の攻撃に耐えられたらお前の勝ちだ

耐えられなかったらお前の負けだ。

どうだ？」

リ「いいだろう、乗ってやる」

そして、二人の戦いが始まった

三分がたった

リ「俺の勝ちだな」

所々傷を作りながらも三分耐えきったリクオ

竜「ああ、終わりだな」

すると、リクオの周りから金生水が溢れリクオに降りかかるうとする

竜「俺は才がないから、これを作るのに三分かかるんだよ」

そして、金生水がリクオに襲いかかる

あと少しというところで、強烈な風が吹いた

リクオに襲いかかる金生水が風で流される

目を開けているのも躊躇われるほどの強風で皆が目を瞑る

すうっと風が止み目を開けると、

金色に輝く鬣：雪を思わす白い鱗：深海のような深い青の宝石のよう  
な瞳を持った一頭の龍がリクオの周りにとぐろを巻いていた

竜「なっ！？」

翠【もうやめてもらえませんか？これ以上続けてもあなた方には勝機はありません。

周りをご覧ください】

今居る廃ビル周りには夥しい数の妖怪たちがいた

竜ゆ「「!?!?」」

ゆ「いつの間にかこんなに…」

竜「これじゃあまるで百鬼夜行じゃねえか…」

ゆ「百鬼夜行ならそれを束ねる主が居るはず…」

辺りを見回し主を探す

それはある一人の周りを囲むようにいた

そう、それは翠雨のとぐろの中にいる人物

竜「奴が百鬼夜行の主かよ…」

すると、今まで黙って立っていた魔魅流がリクオに向かって駆けだしていた

竜「！止める魔魅流！！」

手に札を持ち迫る

翠雨がリクオへの攻撃を許す筈が無く

ベシンッ

尾を使い魔魅流を弾き飛ばす

竜「止める魔魅流」

魔「妖怪は悪。悪は滅する。」

竜「こんだけ数が居るんだぞ？分が悪い。

ゆら、訃報だ。

一旦京都に戻れ。奴らが動き出した」

リ「奴ら？」

ゆ「まさか、羽衣狐が！？」

翠「羽衣狐……」

竜「ああ、だから一旦京都に戻れ。いいな？」

それだけ言つて2人消えた

翠（羽衣狐…か。やっと曾お爺様の仇がとれる。京妖怪は強力だからな…どうするか。）

「…ま！…い…！す…様！！翠雨様！！」

翠『…ああ、つらら。どうかしたの？』

考え事に耽っていると、つららが頬を膨らませながら呼んでいた

つ「どうかしたの？ではありません！！いくらお声を駆けても気づいて下さらなくて…。」

翠『ああ、ごめんね。少し考え事をしていたんだ。』

翠雨の周りに風が吹き、龍から妖怪に変化した

翠「で、どうしたの？」

つ「本家に帰りましょう。」

翠「そうだね…。」

翠雨はつららに笑いかけ、本家に戻った

そんな姿を眺めていた男組？

リ「あいつ…なんかあったのか？」

「私には分かりかねます…」

リ「おっ！？なんだ、煌じゃねえか？帰ったんじゃなかったのか？」

煌「少し気になったもので…」

首「それにしても…いつ見ても思うが、翠雨様のあの姿…。綺麗だな…」

青「ああ、確かにな。」

黒「うむ。あの純白の鱗といい…」

首「神々しい金色の鬣…」

青「深い青の瞳…」

首黒青

「「「綺麗だな」」」

3人そろって頬を赤らめ、明日の方向を向いていた

リ煌

「「やめねえか（なさい）」

3人揃って鼻の下をのばしやがって（して）、

そんなんで（そんなので）翠雨（様）に近づくんじゃねえ（かないで下さい）！！！！

もし、近づいたら俺（私）が叩き斬ってやる（焼き殺します）！！！！  
！！！！

見事にハモったリクオと煌

そんな二人に睨まれた3人は青ざめ、肩をふるわせていた

く式拾七く（後書き）

あんだけ時間かけたくせに、なんか端折りまくってすみませんでしたm（――）m

次は、遠野編ということになります！！

勿論、翠雨も遠野に行きます。

次も、更新がいつになるか分かりませんが、

応援よろしく願いますm（――）m

では、また次回お会いしましょうm（――）m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3910t/>

---

～ 龍の孫娘 ～

2011年12月25日19時52分発行